# 立教大学図書館蔵『平家物語』翻刻（二）巻第四～巻第六

朴　知恵・鈴木　彰

【凡例】

一、立教大学図書館蔵『平家物語』全十二巻（請求記号 913.434 / H51）を底本としして翻刻したものである。今号には巻第四～六にあたる部分を掲載する。

一、異体字は通行字体に、旧字体は新字体に直した。

一、丁の表裏の変わり目に（｜）を付し、（1オ）（1ウ）のように示した。なお、遊紙は丁数に入れていない。

一、内題・巻頭の目録を除いて本文は追い込み形とし、改行箇所は「／」で示した。ただし、和歌・漢詩・文書類は行頭二字下げとし、末尾で改行する形式とした。

一、見せ消ちされた文字の左側に傍線を付した。

一、本文の右傍に記された異本注記や補記はそのまま記した。

一、本文の文字間に符号「○」を付して補入位置を示した傍記は、符号の入れられた箇所の右傍に「＊」を付してから傍記された文字を記した。本文中に小字で書き加えられた補記についても同様に扱った。

一、誤字・誤脱があると考えられる箇所もそのままに翻刻し、当該箇所には「（ママ）」と傍記した。

一、巻第四の56丁・57丁は乱丁で入れ替わっている。翻刻に際して本来の順に戻し、丁数の指示は現状を反映させることで、それとわかるようにしておいた。

【翻刻】

平家物語巻第四目録

一とうくう御はかまきとうの事

一高倉院いつくしま御さんけいの事

一御そくゐの事

一たかくらのみや御むほんの事

一御かうの事

一前右大将むねもり馬をこひとり事いてきたる事

一をんしやうしより方〻へてうちやうの事
一をんしやう寺のしゆと高倉の宮にかうりよくし奉る事
一たかくらの宮御ふえの事　」（1オ）
一うちはしかせんの事
一源三位入道とのしかいの事
一たかくらの宮の御子出家の事
一をんしやうしえんしやうの事
一源三位入道うたの事
一けん三位入道ぬえをいる事
（以下、四行分余白）　」（1ウ）

平家物語巻第四

とうくう御はかまきとうの事

治承四年正月一日あらたまのとしたちかへれともとは殿／には入道しやうこくもゆるされ法皇（ママ）もをそれさせまし〳〵／けれはくわん三のあひたもさん入する人もおはせすされともこ少／納言入道しんせいのしそくとう中納言なりのり左京の大／夫なかのりこれ二人そゆるされてまいられけるおなしき廿／日とうくう御はかまきならひに御まなはしめとてめてた／かりし事ともありしかとも法皇は鳥羽殿にて御みのよ／そにてきこしめされけるおなしき二十一日にとうくうせんそ」（2オ）ありせんていことなる御つゝかもわたらせ給さりしををしおろし／奉らせ給ふそあさましきこれも大しやうの入たうのよろつ心／のまゝなるかいたす所なりしゆ上はこんねん三さいにならせ／ましますあはれいつしかなるしやうゐかなとときの人／申あはれけれは平大なこんときたゝのきやうはうちの御めの／とそつのすけのをつとたるによて今度のしやうゐいつ／しかなとたれかかたふけ申へきいこくにはしうのせいわう三／さいしんのほくわう二さいほんてうにはこんゑのゐん三さい／六条院二さいこれみなきやうほうのうちにつゝまれてい／たいをたゝしくし給はさりしかともあるひはせつしやうおふ」（2ウ）てくらゐにつけあるひはほこういたひててうにのそむとみえ／たり又かんのかうしやうくわうていはむまれて百日と云に／せんそあり天子くらゐをふむせんせうわかんかくのことしな／と申されけれはそのときのゆうしよくの人〻あなおそろし／ものな申されそされはよきれいともかとそつふやきあはれける／とうくう御位につかせ給ひしかは入道しやうこく／ふうふともにしゆむ三こうのせんしをかうふりねんくわ／むねんしやくを給て上日のものをめしつかひゑかきはな／つけたるさふらひ共出いりしけれはひとへにゐんくうの／ことくにそありける出家入道ののちもゑいようはつきせすこそ（ママ）」（3オ）みえし出家の人のしゆん三こうのせんしをかうふる事／はこゐんの大入道とのかねいへこうの御れいとそ聞えし／

高倉院いつくしまへ御さんけいの事

さるほとにしん院あきのいつくしまへ御かうなるへしとそ／聞えしていわう御くらゐをさらせ給て後しよしやの御幸／のはしめはやはたかもなとへこそなるにはる〳〵いつくしま／までの御幸はいかに

と人申あへりたゝし白川院はくまのへ／御幸後白川院は日吉のやしろへ御かうなるすてにしん（ママ）／めいゑいりよにありといふ事は御しんちうにふかき御／しゆくくわんありそのうへ御むさうのつけありとそおほせられけ」（3ウ）るこのいつくしまをは大政入道ことにあかめ奉るあひたうへ／には平家にとうしんしたにはほうわうのいつとなくをしこ／められてわたらせ給へは入たうの心をもやはらけたまはんとの御／きねんのためとそ聞えし三月十八日のくれにしんゐん／さきの右大しやうむねもりをめして明日御かうそのついて／に鳥羽とのへ参りてほうのけ（*わう）さんにいらはやとおほしめす／はいかに入たうにしらせてはあしかりなんやとおほせら／れてれうかんに御なみたをうかまさせ給ひけれはむねもりの／きやうこの仰を承りかたしけなさになんてうしさいか候へき／とてこれもなみたをそなかされけるさらはやかてこのよし鳥」（4オ）羽とのへそうせよかしと仰られはむねもりのきやういそき（*けれ）／鳥羽とのへ参りてこのよしをそうせられけれは法皇あまり／におほしめす事なれはゆめやらんとそおほせられける／あくる十九日のあかつきいつくしまへ御かうならせます／いまた夜ふかく大しやうの入道のしゆくしよ西八条より／しゆつきよなるころはやよひなかはすきぬれはかすみにくもる／ありあけの月のひかりはおほろにてこしちをさしてかへるか／りのくもゐに音つれゆくもおりふしあはれにきこしめすく／ふの人さにはさきの右大将むねもり五てうの大なこむくにつ／なとう大納言さねくにつちみかとのさいしやうのちうしやう」（4ウ）みちちか殿上人にはたかくらの中しやうやすみちさ少しやう／たかふさくないのせうむねのりなとそ参られける中にも／う大しやうむねもりはすひひやう三十きはかりそくせられ／けるきら〳〵しくそみえし夜もほの〳〵とあけかたになる程／に鳥羽殿へ御かうなりて門をさしいらせ給へは人まれにして／こくらく物さひしけなる御ありさまつあはれにそおほし／めす春すてにくれなんとすなつこたちにもなりにけるこすゑの／花のいろおとろへてみやのうくひすこゑ老たりこその正／月六日てうきんのためにほうちう寺とのへきやうかうのな／りしにはしよゑちんをひきしよきやうれつにたちてかくや」（5オ）にらんしやうをそうしゐんしのくきやうさんかうしてまんも／むをひらきかもんれうえんたうをしきたゝしかりしきしき／今は一事もなしけふはたゝゆめとのみそおほしめすと／そ中納言しけのりの卿さむして御きそく申されたりしかは／法皇しんてんのはしかくしのまにしゆきよなりて上くわ／うをまち参らせさせ給ひけるしんゐんはことし廿にならせ／給ふあけかたの月の光りにはえさせ給てきよくたいもいと／とうつくしくそみへさせ給ふ御ほきこけんしゆんもんゐむ／にすこしもたかひまいらせさせ給はぬにもつきせぬものは／御なみたなりりやうゐんの御さちかくしつらはれたり御も」（5ウ）むたうのよしをは人承るに御前にはあませはかりそ候はれ／けるやゝ有てほうわう仰けるはは〳〵となみちをわけて御／かうはなに事にて候やらむと申させ給へは心中にふか／くきねんすへき事候とてとおほせけれはこそ我事を御い／のりあるにこそと

思召して御なみたにむせはせ給ふはるかに／日たけにけれは御いとま申させたまひて鳥羽とのを出させ／たまひけり上くわうはほうわうのりきうのこていいうかんせ／きはくの御すまゐ御心くるしく御らんしをかせ給へはう／わうは又上くわうのりよはく行の宮(ママ)なみのうへふねのうち／の御ありさまおほつかなくそおほしめすみなみの門を出さ」（6オ）せ給て御船にめされけるまことにそうへうやはた賀茂なと／をさしをきてはる〳〵いつくしまへ御さむちやく入道しやうこく／のさいあひのないしかしゆく所くわうきよなり中一日御／とうりう有てきやうゑふかくをこなはるけちくはんのた／うしにはけん僧正(ママ)かうさうのほりかねうちならしへう／ひやくのことはにいはくこゝのへの都を出させ給ひ八への／しほちをわきもつてはる〳〵とこれまて参らせ給ひたる御／心さしのかたしけなさよとたからかに申されたりけれは君も臣／もみなかんるいをそもよほされける大宮きや人(ママ)をはしめま／いらせてやしろ〳〵所さ入みな御幸なる大みやうより五ち」（6ウ）やうはかり山をまはつてたきのみやへまいらせたまふこう／けむそうしやうはいてんのはしらにかきつけられけるとかや／

くもゐよりおちくるたきのしらいとに契りをむすふこ／とそうれしき

かんぬしさはき(ママ)かけひろかかひしゆ上の／五位こくし藤原のありつなしなあけられてしゆ下の四／ほんやかて院の殿上ゆるさるさすそむゑいほうけんにな／さるしんりよもうこき入道相国の心もやはらき給ひぬ／らんとそみえしおなしき廿九日御舟かさりてくわんきよなる／おりふし波かせはけしかりけれは御舟こきもとさせその日いつしま*く／のうちありのうらと云ところにとゝまらせたまふ上くわう大みやうしん」（7オ）しん(ママ)の御なこりおしみにうたつかまつれ人さと仰けれは／たかふさのせうしやう／

たちかへる名残もありのうらなれは神もめくみをかくる／しらなみ

夜半はかり風しつまり波もをたしかりけれは御／舟ともこきいたさせその日はひんこのくにしきなのとまりに／つかせ給ふこの所はさんぬる応保の比ほひ一院御／幸のときこくしふちはらのためなりかつくりたりける御しよのあり／けるを入道しやうこく御まうけ(ママ)うしつらはれたりしかとも／上くわうそのへ(ママ)はこかうもならすけふは卯月一日衣かへと云／国(ママ)のあるそかしとてをの〳〵都の事をのたまひいたしなかめやり」（7ウ）給ふ程にきしに色ふかきふちの松のえたにさきかゝりける／を上くわうゑいらん有てあの花おりにつかはせとおほせけれ／は大宮の大納言たかすゑのきやう承て左中将中はらの／やすさたかはし船にのりておりふし御前をこきとをりける／をめしておりにつかはすふちの花を松につけなからおりて参／らせたりけれは心はせ有なとおほせられて御かんありけり／このはな仕れをの〳〵とおほせけれはたかすゑの大納言／

ちとせへん君かよはひに藤なみのまつのえたにもかゝ／りぬるかな

二日はひせんの国こしまのとまりにつかせ給ふ／五日天はれてかいしやうものとけかりけれは御所の御舟」（8オ）をはしめ参らせて人さの舟ともみなこきいたすくものなみけふり／のなみをわけしのかせ給ひてその日ははりまのくにやまたの／うらにつかせ給ふそれより御こしにめして福原へいらせおはし／ますくふの人さ今一日もさきに都へとはいそかれけれとも六日は／御とうりうありてふくはらのところ〳〵をれきらむあり／けりいけの中なこんよりもりの卿のさんさうあらたま／て御らんせらるあくる日ふくはらをたゝせ給ふとてむ／ねとのしやうをこなはれて入道のやうしたんはのかみきよ／くに正下の五位まこ越前の少将すけもり四位の主上とそ聞え／しそれにもなか一日御とうりうありておなじきふくはらを」（8ウ）たゝせ給ひ八日みやこへつかせ給ひけり御けかうのくきやう／てん上人とはのくさつまてそ参られける／

御そくゐの事

おなしき廿二日てい御そくゐあり大こくてんにてあるへかり／しか一年やけにしかはこ三条院の延久のかれいにまかせ／てたいしやうくわんのちやうにてをこなはるへかりしを九条／殿申させたまひけるはたいしやうくはんのちやうはほんに／んのいへにとらはくもんしよていの所なり大こくてんなか／らん上はしゝんてんにてそをこなはるへけれと申させた／まへはししんてんにてそをこなはれけるさむぬる応保」（9オ）四年十一月一日れいせんのゐんの御そくゐしゝんてむに／てありしは御しやけによて大こくてんなからんうへはたいしやう／くわんのちやうにてをこなはるへきなと人さ申あはれけ／れとも九てうとの、御はからひのうへはちからをよはす／をなしき八日中宮はこうきてんよりしゝうてんにうつ／らせ給てたか御くらへ参らせたまひけり御有さまめて／たかりけり平家の人さみな出仕せられけるに小松のたいふのきん／たちはかりそ去年ちゝのおとゝこうし給ひしかはいまたふくにてろ／うきよせられたる蔵人とのさゑもんのすけさたなか今度御そく／位いらんなくめてたかりしやうをかみ十まいはかりにしるし」（9ウ）てふくはらへ奉りたりけれは入道相国二位とのもゑみをふ／くみてそよろこはれけるかやうにはなやかなりし事／共はありしかともせけんなをしつかならす／

たかくらのみや御むほんの事

その比一院たい二の御子もちひとのしんわうと申て御はゝ／はか賀大納言すゑなりのきやうの御むすめなり三てうたかく／らにまし〳〵けれは高倉のみやとそ申ける御年十五と申し／さむぬる永万元年十一月十六日近衛かはらの大宮の御所／にてしのひつゝ御けんふくあり御しゆせきもゆうに御さい／かくもすくれてわたらせ給ひしかはたいしにもたゝせ給ひ御」（10オ）くらゐにつかせ給ふへきにけんしゆむもん院はけいほにて／まし〳〵しかは御そねみにてたいしにたにたゝせ給はす花／のもとの春の御あそひにはしんひつをふるうて手つから／御せいをあそはし月の前のあまのえんにはきよくて／きをふいてみつからいんをあやつらせ給ふかくてあかしくら

さ／せ給ひし程に治承四年には御とし三十にそならせ給ひける／其
としの四月九日の夜こんゑかはらに候けるけん三位入道より／まさ
ひそかにこのみやの御しよへ参りてすゝめ申ける事こそ／おそろし
けれ君はてんせう大しん四十八世の御すゑしんむ天皇／より七十七
代にあたらせ給ふみかとたいしやうほうわうの」（１０ウ）御子に
てわたらせ給へは君こそたいしにもたち御位／にもつかせ給ふへき
に三十にならせたまふまてしんわう／のせんしをたにもかうふらせ
給はすみやにてわたらせ給ふ／をは心うしとは思召さすやこの世の
中のありさまをみる／にうへには平家にしたかひたるやうに候へと
もしたにはそね／まぬものや候きみ此時におほしめしたゝせ給てへ
いけを／ほろほし世をうつ取て御くらゐにもつかせ給ひ法皇の／い
つとなく鳥羽殿にをしこめられてわたらせたまひ候御な／けきをも
やすめ参らせさせたまへかしそれそ御かう〳〵／のいたりにて候は
んすれまことに思召たちてりやうしをくた」（１１オ）させ給ふも
のならはよろこひのみみをなしはせまいり候はん／する源氏ともこ
そおほく候へとて一さに申つゝく京都には／てはのかみみつのふか
子ともいかのかみみつもとてはの蔵人みつ／しけ源判官みつなかて
はのくはんしやみつよしくまのに／は六条の判官ためよしかはつし
十郎よしもりとてしん／くうにゐんきよして候つの国にはたゝの蔵
人ゆきつなたゝ／の二郎ともさねおなしき三郎たかよりかはちの国
にはむ／さしのこむの守よしともかしそくいしかはの判官代よしか
／ぬやまとの国にはうのゝ七郎ちかはるか子とも太郎あり／はる二
郎きよはる三郎なりはる四らう茂治近江のくにには」（１１ウ）か
しはきの判官入道にしこりのくわんしやみのゝくにには／かはへ／の
たらうしけなをおなしき三郎しけとをきたの三郎し／けなかかいて
んのはんくわん代しけくにやしまのせんしやう／しけときその子太
郎時きよおはりの国には山たの二郎し／けひろあしきの二らうしけ
よりその子二らうしけたか同き三／らうしけすけかいの国にはへん
みくわんしやよしきよ同き／太郎きよみつたけたの大らうのふよし
かゝみの二らうとをみつ／その子二らうなかきよやすたの三らう三
らうよしさた一（ママ）／てうの二らうたゝよりいたかきの三郎かねのふへ
んみ四郎あり／よしたけたの五郎のふみつ木曾のくはんしやよしな
かおほち」（１２オ）の太らうこれよしひらかのくはむしやもりよ
しその子四／郎よしのふをかたのくはんしやこれよしいつの国には
／流人さきのひやうへのすけよりともひたちのくにには／ためよし／
か三なんしたの三らうせんしやうよしのりさたけのくはんしや／ま
さよしその子の大らうたゝよし三らうよしむね四らう／たかよし五
らうよしすゑむつの国にはよしともかはつし／九らう判官よしつね
これらはみな六そむわうのへうゑい／たゝのまんちうかこういんな
りむかしは源平さうにあら／そふててうてきをほろほししゆくはう
をとけゆみやをとて／せうれつなかりしかとも今はうんていましは
りをへたてて」（１２ウ）しうしうのれいにも猶をとれりけんしあ
りと申せ共く／にはこくしにしたかひりやうけにつかへくしさうし
に／かりたてられてちうややすきおもひなしいかはかりか心うく／

候らんはや〳〵思召たちてりやうしくたさせ給ふ物ならは／夜を日につきてはせまいり平家をほろほし候はんし、つ／をめくらすへからす入道もとしこそよりて候とも子ともひき／くし御とも仕り候はんになとか一はうさ、へては候へきと／たのもしけにこそ申けれみやはこの事いかならんすらんとて／しはらく御せういんもなかりけるかこあこまろの大納言／むねみちの卿かまこひんこのせんしすゑみちか子に少」（13オ）なこんこれなかと申はゆ、しきさう人なりけれは時の人／さう少納言とそ申けるその人のこのみやを見参らせて君は／御位につかせ給ふへき御さうましますてんかの事おほ／しめしはなたせたまふへからすと申けるうへいまこの三位入道／もかやうにす、め申されけれはさてはしかるへき天せう大／しんの御す、めやらんとおほしめしくまのに候ける十郎よし／もりをめしてりやうしの候つかひにとうこくへこそく／たされけれよしもりその時蔵人のゆきいへとかいみやうのり／やうしを給てあふみのくによりはしめてみのおはりのけんし／ともにしたいにふれてくたるほとにおなしき五月八日いつ」（13ウ）／のほうてうひるかしまにくたりつ、さきのひやうゑのすけ／にりやうしを奉りあむを取てしたの三郎せんしやうよし／のりはあになれはとらせんとてひたちのうきしまへそ／くたりける木曾のくはんしやよしなかはをいなれは給るとて／東山道へこそおもむきけれさるほとにほうわうはなりちか／しゆんくわんのやうにとをき国へもうつされはるかの島へも／なかされんするやらむとおほしめしけれ共せいなんのりき／うにして

ことしは二年にならせ給ふ／

法皇鳥羽殿よりひふくもんゐんへ御幸の事

おなしき五月十三日のとりこく*はかりに鳥羽とのにはいたちおひ」（14オ）たゝしくなきて大ゆかにはしりまはるほうわう大にお／とろかせ給ひて御うらかたをあそはされてあふみのかみ／なかかぬそのころいまたつるくらんと、めされて候けるをち／かくめしてこのうらかたきとあべのやすちかにかんかへさせて参／れと仰せられけれはなか、ぬこれを給てやすちか、もとへゆ／きむかふやかてかんかへてかんしやうをしんすなかかぬ参り／ける程に夜はすてにふけぬしゆこのふしきひしくて門をひら／かさりけれはあんないはしりたりつゐちをのほりこえて大ゆ／かのしたをはひとをりてきりいたよりやすちか、かんしやう／をしんしたりこれをひらいてゑいらんあれは今三日かうち」（14ウ）の御よろこひならひに御なけきとそ申たりける法皇今は／是程になりてなに事の御よろこひ又いかなる御なけき／あらんするやらんと仰せられける程にさきの右大しやうむね／もりのきやうやう〳〵に申されけれは入道すこしおもひなを／つて法皇をは鳥羽殿をいたし奉り八条からすまろのひ／ふく門院の御しよへ御かうなし奉る今三日かうちの御／よろこひとは是を申けるにやとそおほしめされけるさるほと／にやかて宮の御むほんといふ事あらはれにけりさきの右大／しやうむねもりのきやうかくりきをたて、福原へ申され／たりけれは入道しやうこくき、もあへすはせのほりてへちの」（15オ）しさい有まし、こくをめくら

さす宮をとり奉りてとさのはた／へなかし奉るへしとその給ひける上けいは三てうの大納言／さねふさしきしはとうの左少へんみつまさとそ聞えしほう／わうこの事きこしめして又御心くるしくそ思召されけるならひに／御なけきとはこれを申けるにやとそおほしめされけるみやの／御しよへはけんたゆうの官判（ママ）かねつなてはのはんくわんみつ／なか承てむかひけりこのけんたゆうの判官かねつな三位入／道かやうしなり三位入道宮をすゝめ奉りたる事を平家し／らぬによてなり宮はつや〳〵この事はおほしめしもよらす／五月十五日夜のくもまの月をなかめさせ給ふ所に三位入」（15ウ）道のつかひとていそかはしけなるものせうそくをもちて参り／たり宮の御めのとこ六てうのすけのたゆうむねのふこれを／よむ御むほんこそすてにあらはれさせ給ひてくわん人とも／かへんたうせんを承て今夜さんかうして宮をとり参らせてと／さのはたへうつし参らせ候へしとうけたまはり候也いそき御／しよを御出あて三井寺へしゆきよなるへしやかて入道もま／いり候へしとそかきたりけるむねのふ大おくひやうのもの也／けれは心も心ならすわなな〳〵よみあけたり宮も大にあき／れさせ給ひてこはいかゝあるへきと仰けれは宮のさふらひち／やうひやうゑのせうのふつらと申もの御前に参りてさ候」（16オ）は、女はうのしやうそくをからせ給ていそき御しのひ有へし／と申けれはみやはもともしかるへしとてにはかに御くしみた／させ給てかさねたる御いに一めかさをめされけるすけ／のたいふはひたゝれにたまたすきあけからかさもちてくろ／まろと云わらはにはふくろに物入ていたかせせいしの女を／むかへてゆくていにてひんかしのもんよりいてさせ給ひて／たかくらを上へすきさせたまひけるに大きなるみそのある／をいとものかろやかにこえさせ給ひたりけれはみちゆく人／たちとゝまりてはしたるの女房のみそのこえやうかなとあや／しけに見奉はいとゝあしはやにすきさせたまひにけり」（16ウ）にはかの事なりけれはきたいのてうほう共をとりわすれさせ／たまひけるその中にもせみをれこえたとてかんちくの御／ふえ二もたせ給ひたりけるかこえたをはことにしつしおほ／しめして御身をもはなたせたまはすつねの御まくらにしもと／り忘れさせ給ひたりけるを御心にそひしとかけさせたまひけ／るのふつらみくるしきものしたゝめんとてはしり参りてみけ／るにつねの御くらにこのふえをとりわすれさせ給ひたり／けるを見奉りてあなあさましこれはさしも御ひさうの御ふえ／にて有物をとおもひ東の門よりふとはしり出て五ちやうかうち／にてをつき参りこの御ふえをしんしたりみやはなのめな」（17オ）らすよろこはせおはしましてわれしなはこのふえをは御くわ／んに入よと仰けるやかてのふつらも御ともに候へかしと仰／けれはたゝ今くわん人ともかさむかうし候中にあひしら／ひ仕るもの一人も候はさらむかむねんにおほえ候ものその／ものには候はねとものふつらさるものありとみな人しりて候／それもおちたりなと申候はん事ゆみやとるものはかりに／なこそおしく候へくはんにんともさんかうして候はゝ一あ／ひしらひ申てうちやふりて参り候へしとてやかて御所へは／しりかへ

りてたかくらにしのこもんをさし三てうおもての／そう門をひらきうすあをのかりきぬのしたにもえきおとし」（17ウ）のはらまきをきてゑふのたちわきにはさみつゝたゝ一人今／や〳〵とまちかけたりさるほとにけんたゆうのはんくわん／かねつなてはの判官みつなかつかうそのせい三百よきにて五／月十五日のねのこくはかりに三条たかくらのみやの御所へ／そをしよせたる源大夫判官かねつなはそむするむねありとお／ほえてもんくはいにひかへたりてはのはんくわんをしよ／せてみやの御むほんすてにあらはれさせたまひてくはむ人と／もかへつてたうせんを承て御むかへにさむして候なりいそ／き御しゆつなり候へしと申せはのふつらすゝみいてゝなに事／にて候やらんみやはこの程御ふつけいにてこれは御しよ」（18オ）にても候はすてはの判官なんてうこれならてはいつかたへし／ゆきよなるへきそへちのしさい有まししもへともまいりてさ／かし奉れと申せはのふつらこはいかにものものもおほえぬくは／む人共か申やうかなたとひ日ほんこくをかたきにうけさせ給／ひてうてきとならせ給はんからになんちらか馬にのりな／からさうなく御にはへうち入申たにもらうせきなるにしも／へとも参りてさかし奉れと申こそきくはいなれそのものに／こそなけれともみやのさふらひにさひやうゑのせうはせへの／のふつらありとそしらすやちかよてあやまちすなといひけ／れはけんたゆうの判官これをきゝて門外にひかへたりける」（18ウ）かもんの中へそにけ入けるちやうのしもへの中に／かなたけといふやつは大ちからのかうのものなりもえきおとし／のはらまきにに三まいかふとのをゝしめなきなたのさやは／つして大ゆかへきてあかるとうれい十四五人こそつゝひたれ／のふつらはかりきぬの帯ひほひつきてなけすてゑふのたちな／れ共みをは心えてうたせけるをぬくまゝにくいやつはら／かな一とものほせたつましきものをとてさむ〳〵にきるちや／うのしもへ十四五人たけしといへ共のふつらにていたくき／りたてられてあらしにこのはのちるやうにさうそおりたり／けるころは五月十五夜なれは一むら雨のふりとをりをしは」（19オ）れたるくもまの月にかたきはふあんないなりのふつらあむ／ないはしりたりあなたのつまにをひつめてははたときりか／なたのめんらうにせめつめてはちやうときりいかにせんじ／の御つかひをはかくは仕るそといへ共せんしとはるなにそとて／きりたりけりたちゆかめはをしなをしかたきのなるへやふりて／いりこゝをさいこそきりたりけるにむねとのつはもの十／四五人こそきりふせたれたちのきさき三すむはかりうちお／りていまはしかいせんとおもひてこしのかたなをさゝれとも／おちてなしちからをよはす高倉おもてのこもんのかたへはし／りいてけるかしなのゝくにのちう人てつかの八郎といふ大」（19ウ）おとこのなきなたひらめてよりあひたりけるにのらんとかゝ／りけるかのりそむしてもゝをぬいさまにつらぬかれてのふ／つらたけしといへとも大せいのなかにとりこめられていけと／りにこそなりにけれその後ちやうのものともみたれいりて／御しよをさかし奉らせけれとも宮わたらせ給はさりけれはち／からをよはす御所をつゐふく

してのふつらはかりいけ取にし／て六原へゐて参りたりよあけて後さきの右大しやうむね／もりのきやうのふつらをめしてつほのうちにひきすへさせまこと／かなんちせんしとはなにそとてきりたりけるかさん候この／ほと夜なゝ御所をおそうものゝ候つるをもんをひらひて」（２０オ）あひまつ所にこのやはんはかりによろひたるもの二三百人を／しよせて候つるをなにものそとゝひ候へはせんしの御つか／ひと申候間あはれきやつはられいのかうたうらかあるひは／せんしの御つかひそあるひはきんたちのいらせ給ふなと申／かとそむしてきりたん候と申けれはなんちかせんしの御つ／かひにあつこうしちやうのしもへにんしやうせつかいはなは／たきくはいなり又みやの御ゆくゑさためてしりたるらんこと／のしさいをめしとひてそのちのふつらをは河原にひき／いたしてかうへをはね候へのふつらあさわらひて申けるは／さすかのふつら程のものかせんしの御つかひにあつこうをし」（２０ウ）ちやうのしもへにむしやうせつかいこともをろかに候をや／かねよきたちたにもちて候はゝくはん人ともをは一人もあん／をんにてはかへし候はしみやの御行衛はたとひしり参らせ／たりともよも申候はしましてしり奉り候はすさ*っふらひ程の／ものゝ申さしと思ひきりたらむことをかうもんによて申／へきやう候はすをよそ御いのちにかはり参らせてかうへを／はねられまいらせん事はせんしやうのめんほくめいとの思ひ／いてなりとそ申ける平家のさふらひともす百人なみ／ゐたりけるはあつはれかうのものゝてほんやけにもふせく／こそたうりなれそれはたれもふせかうすあたらものをきら」（２１オ）るる事のおしさよあれかせんねんも御しよにありし時大／はんしゆかとゝめかねたりしかうたう六人をいつめて四人を／はやにはにきりふせ二人をいけとりにしてその時なされた／りしひやう衛のせうそかしこののちもあれかおもひなをりて／御うちに候はんするそ一にんたうせんのつはものにて候はん／するとくち〳〵におしみたてられてけにもとや思はれけ／んさらはさうなくなきつそとてはうきのくにひのといふ所／へなかされけりけんしの世となてくはんとうへはせくたりて／かちはらについてありし事のしたいを一（ママ）とに申たりけ／れはかまくらとのなのめならすかんしおほしめしてのとの」（２１ウ）国に御をんありけるとそきこえけるさるほとに宮はたか／くらをのほりへこんゑをひんかしへ川をわたりてによ／いこえにかゝらせ給ひけりいまたならはせ給はねはなつくさ／のしけみかしたのつゆけさもさこそ心うくおほしめされけめ／けはしきいはのかとをすきさせ給ふに御あしもはれぬかけ／ぬしてあゆみそかねさせ給ひけるむかしきよみはらのてんわ／うのおほとものわうしにをそはれさせ給てよしの山へいら／せ給ひし御事も思召いたしてあはれなりとかくしてあるつ*カ／きかたに三井寺へいらせたまひけりかひなきいのちのおし／さにしゆとをたのみてきたるなりと仰けれは大しゆほうりん」（２２オ）ゐんに御しよしつらひて入参らせけりさる程に三位入道ふし／やかた〳〵に火かけてそのせい三百よきにて三井寺へこそは／せまいりけれあくる十六日に宮の御むほんをこしてうせさ／せ給ひぬといふ

ほとこそありけれきやう中のさうとうな／のめならす／

さきの右大将むねもり馬をこひ取大事いてきたる事

そも〳〵年比日比もありけれはこそありけめことしもこのみ（ママ）／やの御むほんこさせ給ふ事はなにと申に後日に聞えし／はさきの右大しやうむねもりのきやうふしきの事／をのみし給ひけりされは人の世にあれはとていふましき事」（22ウ）を申（ママ）すましき事をもせはいよ〳〵しりよあるへき事／なりたとへは三位入道のちやくしいつのかみなかつなのもとに／九ちう一のめいはありかけなる馬のならひなきいつけ／馬にてなをはこのしたとつけられたりさきのう大しやうなか／つなのもとへししやをたてゝそれにきこえ候このしたを給／て見候はゝやとのたまひつかはしたりけれはあまりにひさ／うしさる馬は候つるかこのほとあまりにのりそむして候／間いたはらせんとてんしやうへつかはして候やかてめしのほ／せてけさんにいれうする候と申けれは大しやうちからを／よひたまはてまし〳〵ける程に平家のさふらひともかあは」（23オ）れその馬は一昨日まては候しものをきのふも候しけさも／にはのりし候つるなとくち〳〵に申けれは大しやうやさ／てはおしむにこそあんなれにくしさらはせめこはせよやと／てあるときさふらひしてはしらせあるとき（ハ）は文をもちてはし／らせ一日に五六度をし返し〳〵こはれけり三位入道此事／をきゝいつのかみをよひていかなるこかねをまろかしたる馬なり／とも人のさ程にこはんにおしむへきやうなしとう〳〵／そのむま六はらへつかはすへしといはれてちからをよはす一／しゆのうたをかきそへ六原へたてまつる／

こひしくはきてもみよかし身にそふるかけをはいかてはな」（23ウ）ちやるへき

右大しやうひきまはしみるへきほと見給ひて／あなにくやさしもぬしかおしもつ（ミ）るにぬしかなのりをかな／やきにせよとていつのかみのなのりをなかつなとかなやきに／したりけりきやく人のきたりて聞え候このしたをみ候はやと／申せはあのなかつなめひきいたせは（ママ）かつなめにくらをけ／なかつなめにはのりせよなかつなめうてはれなとの給ひ／けるいつのかみこの事をきゝてさしもみにかへて思ひつ／れはこそひさうしつるにまたこそ馬にはのるとはいへ共はれ／と云やうや有けんゐには、かつてとられたるたにもやすから／ぬにむまゆへに天下のわらはれくさとなる事のくちおしさよ」（24オ）三位入道この事をきゝてけにもさやうにあらはいの／ちいきてもなに、かはせんひんきをうかかう身にてこそあら／めとその給ひけるこのいきとをりによてみやをもすゝめ奉／りたりとそきこえし是につけてもてんかの人小松殿の事／をそみなしのひ申ける小松殿一とせ中くうの御せんに／参り給てよもすから女はうたちと御物かたりのありけるにや／はんはかりにいつくよりともおほえす八しやくはかり候ける／くちなはの大もんのさしぬきのひたりのりんをはいめくる／おとゝこれをみつけ給てこのやうを申ならは女房たちさはき／中くうもおとろき給はん事もをそれありとてかたてにて」（24ウ）はゝちなはのかしらをつよくにきりかたてにてはをゝと（ク）

てな／をしのそてのうちにひきいれさらぬやうにてついたて六ゐ／や候〳〵とめされけれはなかつなそのときゑふのくらんとに／て候けるかなかつなと御いらへ申て参りたりおと、このく／ちなはを給るなかつなこれをうけとりて大りのゆはとのを／へてことねりをめしてこれを給はれといひけれはきやつかしら／ふりてにけさりぬちからをよはすきをふをめして給たりけ／れはきをふこれをうけ取て御くらのうしろなるたけの中／にそすてたりけるつきの日さうてうにこまつとのよりかふ／たる馬によきくらをきたち一ふりそへてなかつなのもとへ」（２５オ）つかはすとてよへの御ふるまひこそゆゝしく候しかこの馬は／のり一の馬にて候はん（ママ）けよりやはんにをよむてけいせいのもと／へかよはれん時もちひらるへしとてつかはさるなかつな／の御返事には六ゐのことはなれは御馬かしこまて給候ぬ扨／もよへの有さまはけんしやうらくとこそおほえて候しかとそ／申たりけるいかなれはあにの大しんはかやうにゆうにお／はせしにおと、の大しやうはさしも人のおしむ馬をせめと／て天下の大事にをよひぬるこそあさましけれ三位入道のさ／ふらひにきをふのたきくちといふものありつよゆみせいひや／うやつきはやのてき、大ちからのかうのものなりさふらひに」（２５ウ）とても九ちう一のひなんなりしゆくしよは六はらのうらつゐ／ちのうちなりけれは三位入道にはせをくれてと、まりけり／さきの右大しやうきをふかと、まりたるよしき、給ていか、／おもはれけんきをふにきとまいれとてめされけれはきをふ／やかて参りたりいかになんちはさうてんのしゆ三位入道か／ともをはせぬそさむ候ねんらいほうこう仕りてもしの事候／は、いのちにもかはり奉らんとこそそむし候しになにも／の、さんけんにて候やらんめもみせられ候はす是程の大事に／おちゆかれ候かかくともしらせられ候はすさらはたうけ／にほうこうせよかし三位入道かをんにはすこしもをとるまし」（２６オ）又てうてきととうしんとやおもふたうけにほうこうせん／とや思ふたとひさうてんのしうにて候ともいかてかてうてき／ととうしんは仕り候へきしよせんこのうへには御ゆるされた／にも候は、奉公つかまつらむする候むねもりのきやうねんら／いあはれめしつかは、やとおもはれけるあひたしんめうなり／さらはこれに候へとてをかれたりやく（や）ありてきをふかある／か候又はるかに有てきをふはあるか候とてあしたよりゆふ／へにいたるまてへんしもさらすそ候けるきをふ有とき申／けるは三井てらへさためてうつてむけられ候はんすらんちほ（ママ）／うしの中には大やのしゆんちやう五ちゐんのたしまその」（２６ウ）ほかたれかしそれかしわたなへたうの中にもそれかし／候へとも心にて、も候はすきをふまかりむかふてえりうちに／つかまつらはやとそむし候かのて事にあひぬへき馬の候／つるをしたしきやつめにぬすまれて候御うちにさりぬへき／御むまの候は、くたし給てまさきかけうちしにつかまつら／はやとそむし候と申れは大しやういかにもしてあらせつ／けはやとおもはれけれはしらあしけなるむまのなんちやうと／なつけてひさうせられたるか一の御馬やにたてられけるを／よいくらをかせきをふにこれをたふきをふこ

れを給てやか／たへ帰てあはれけふの日かとくくれよかし三井寺へはせ参り」（27オ）て三位入道殿のまさきかけてうちしにせんとそ申けるし／たいにくれけれはさいしともをばしのはせていまはとてう／つてたちけるみつにちとりをおしたるひやうもんのかりき／ぬにきくとちおほきらかにしてちうたいのきせなかひおとし／のよろひにしらほしのかふとのをゝしめ三しやく五すん／いかものつくりのたちはき二十四さしたる大中くろのやか／しらたかにおふたりけるかたきくちのこはうわすれしとてた／かのはにてはいたりけるまとや一てそさしそへたるぬりこめとう／のゆみのまなか取てたまはりつるなんちやうにのりのり／かへ一きめしくしてとねりおとこに手たてわきにはさませて」（27ウ）やかた〳〵に火かけむちをあけ三井寺へそはせ参りけるへい／けのさふらひ共せう〳〵しりたりけれともとゝめんといふも／の一人もなかりけりきをふりやかたにせうまうありとさう／とうしけり右大しやうきをふはとの給へは候はすとこそ申／けれあはきやつにたしぬかれつるこそやすからねしやつとゝ／めよとの給へ共とゝめんと云もの一人もなし三井寺にはた／たいまもきをふかさたありけりさるにてもいかになりつらむ／めしくせらるへう候つる物をとくち〳〵に申けれは三位／入道日ころ心やしり給ひけんさりともいふかひなくとらへか／らめらるゝ事はよもあらしたゝいま参らむするものをとの」（28オ）給ひもはてねはきをふむちをあけてまいりたりきをふ参／りて候へと申けれは三位入道よろつ心やすかりつるはこゝ／そかしとその給ひけるきをふ申けるはいつかかうの殿のこのし／たのかはりに大しやうのひさうせられて候つるなんちやう／をこそのこりてのつてまいりて候へと申けれはいつのかみ／大によろこひてやかてこの馬をきをふにこひおかみをやり／もんしにむねもり入道と云かなやきをしてさふらひ一両人／をつけて六はらへつかはしそうもんうちのへをひ入たりへ／いけのさふらひとも是をみてさうとうする事なのめなら／すさきの右大しやうあはれきをふにたしぬかれつるこそや」（28ウ）すからねこのたひ三井てらへゆきむかふたらんものともはの／ものにはめなかけそまつなにともしてきをふめをいけとりに／して参らせよしやつかくひをはのこきりにてきるへしとそ／の給ひける／

をんしやう寺より方〻へてうちやうの事

さるほとにをんしやう寺には大しゆをこつてせんきしける／は近日せしやうのていをあんするにふつほうのすいひわう／ほうのらうろうこの時あたれりしかるにかたしけなくもた／いしやう法皇の第二のみやしゆきよのこと正八まんくうしゆ／こしんら大みやうしんのみやうしよにあらすや大しゆちるい」（29オ）もやうかうしふつりきしんりきもかうふくをくはへまし／すことなとなかるへきこゝにきよもり入道かほあくをい／ましめすむは何の日をかこすへきそも〳〵ほくれいはえん／しう一みのかくちなんとはまたけらうとくとのかいちやうなり／さらはなとかてうそうにくみせさるへき一身とうしんに／せんきして山へもならへもてうしやうをこそをく

り／けれまつ山門へのちやうにいはく／

をんしやう寺てうす　　延暦寺のか

ことにかうりよくをいたし当寺の仏法はめつをた／すけられんとほつするしやう」（２９ウ）

右入道しやうかいほしひまゝにわうほうをうしなひ又仏／法をほろほすしうたんきはまりなきあひたさんぬる十五日の／夜一ゐん第二のわうしふりよのなんをのかれむかためにひそ／かに入寺せしめ給ふこゝにゐんせんとかうしてくはんくん／をはなちつかはすへきよしその聞へありといへ共いたし／奉るにあたはす当寺はめつまさにこのときにあたれりそれ／えんりやくをんしやうりやうしはもんせき二にあひわか／れたりといへともかくするところはこれおなしゑんとむ一／みのけうもんなりたとへはとりのさうのつはさのことし又は／車の二のわにたり一はうかけんにをいてはいかてかその」（３０オ）なけきなからんをやていれはことにかうりよくをいたしたう／しのふつほうはめつをたすけられはやくねむらいのいこんを／わすれてちうせんのむかしにふくせんしゆとのせんきかく／のことしよてうそうくたんのことし／

治承四年五月日／

とそかきたりける山門にはこのしやうをひけんしてこれはい／かにをんしやう寺は当山の末寺なるに鳥のさうのつはさ／のことし又はくるまの二のわにたりとおさへてこれを／書てうらうせきなりとて返てうをもをくらさりけりそのうへ／山門をは平家さすをこしらへ申されけれはめいうんそうし」（３０ウ）やうとうさむしてこの事しかるへからさるよし申されけれ／はみやの御かたへはふちやうのよしをそ申されけるへい／けなをやまをこしらへんかためにあふみへは二万石ほつこくの／おりのへきぬ三千ひき山のわうらいによせられけりそれを／いかなるものかよみたりけん／

山ほうしおりのへ衣うすくしてはちをはえこそかくさ／さりけれ

とふたにかきてそたてたりけるきぬ一たんにもあたら／さりけるたいしゆの中にやよみたりけん／

おりのへを一きれもえぬわれらさへうすはちをかくかす／に入かな

又南都へてうしやうをゝくるそのしやうに云く」（３１オ）

をんしやう寺てうす／

ことにかうりよくをかうむて当寺の仏法はめつを／たすけられんとこうしやう／

右ふつほうのしゆせうなる事はわうほうをまほらんかため／わうほうのまたちやうきうなる事はすなはち仏法によて／なりしかるにかうねんよりこのかた入道さきの大しやう大しん／たいらのきよもりほしひまゝにわうほうをへつしよし／てうせいをみたり内につけ外につけうらみをなしなけく／あいた今月十五日の夜一ゐん第二のわうしたちまちにふりよ／のなんをのかれ

んかためにはかに入寺せしめ給ふしかる」（31ウ）に当寺をいたし奉るへきよしせめありといへ共しゆと一かう／これをおしみ奉るよてかのせんもんふしをたうしにいれん／とほつす仏法と云皇法と云一時にまさにはめつせんとすしよ／しうなむそしうたむせさらむをや百たうのゑしやうてんしく／はんひやうをもて仏法をめつせし時しやうりやうせんのしゆ／とかつせんしてこれをふせくいかにいはんやむほん八きやく／のともからにをいてをやたれの人かかうりよくあらさら／むやなんきやうはれいなしつみなきちやうしやをはいるせ／らるこんとにあらすんはいつれの日かくはけ（ママ）いをとけ／んねかはくはしゆとうちにはふつほうはめつをたすけほか」（32オ）にはあくきやくのはんるいをしりそけはとうしんのいたり／ほむくはいにたんぬへしゝしゆとのせんきかくのことし／よてててうそうくたむのことし／

治承四年五月日　　大しゆら／

とそかきたりける南都にはとう大こうふくりやう寺の大衆／くわいかうして一みとうしんにせんきことをえてのち返／てうをゝくるそのしやうにいはく／

こうふくしてうす　をんしやう寺のか／

らいてう一しにのせられたり／

右大しやう大しん入道しやうかいき寺の仏法をめつせんとほ」（32ウ）つする由のことき よくせんきよくくはにてつしりやうかの／しうきをたつといへ共さむしやうきんくおなしく一たいのけ／うもんよりいてたりなんきやうほつきやうともにもてによ／らいのゆいていなり自寺他寺たかひにてうたつかましやう／をふくすへしそも〳〵きよもり入道へいちのさうかうふけの／ちんかいなりそふまさもりはくらんとの五位のいへにつかへ／てしよこくしゆりやうのむちをとる大蔵卿ためふさはかし／うしのいにしへけひいし所にふしゝしゆりのたゆうあきすゑ／はりまの大しゆとしむかしはみまやのへつたうしきにんす／しかるをしんふたゝもりせうてんをゆるされし時とひのらう」（33オ）せうみなほうこのかきんをおしみないけのゑいかうをの〳〵／はたいのしもんになくたゝもりせいうんのつはさをかいつく／ろうといへ共せいみんなをはくおくのたねをかろくすなを／おしむせいしその家にのそむ事なししかれともさんぬる／平治元年十二月のふよりよしともをついたうせしとき大／しやう天皇一せんのこうをかんしてふしのしやうをさつけ／給ひしよりこのかたたかくしやうこくにのほてひやうちやう／を給はるあるひはなんしたいかいにさんしあるひは／うりんにつらなり女子あるひは中くうしきにそなはりあ／るひはしゆとうのせんしをかうむるくむていそしみなきよ」（33ウ）くろうにあゆみそのまこかのをいこと〳〵くちくふをけつる／しかのみならすわうこうといへ共これをとらへへんけんみみ／にさかふれはくきやうといへ共これをからむこゝをもてある／ひは一た

んしんみやうをのへんためあるひはへんしのりよ／うにくをのかれんとほつす万せうのせいしゆなをめむてんの／こひをなしちうたいのけくむもかへてしつかうのれいをいた／す代ささうてんのけりやうをうはふといへ共上さいをゝそれ／てしたをまき家〳〵さうしようのしやうえんをとるとい／へともけんいには、かてものいふ事なしかつにのるあま／り去年の冬十一月に大しやう天皇のやとりをつゐふくし」（３４オ）はくりくこうの身ををしなかすほんけきのはなはたしき事／まことにこきん（古今イ）にたえたりその時われらすへからくそくし／ゆにゆきむかひそのつみをとふへきなりしかりといへともあ／るひはしんりよにあひはゝかりあるひはわうけんとせうす／るによてうつたうをおさへてくわういんをゝくるあひたか／さねてくわんひやうをゝこし一ゐん第二のみやのしゆかくを／うちかこみ奉る八まん三所かすかの大明神ひそかにやうか／うをたれせんひつをさゝけき寺にをくりつけしんらのとほ／そにあつけ奉るわうほうつくへからさるむねあきらけしし／たかつて又き寺しんりやうをすてしゆこし奉らんてうかん」（３４ウ）しきのたくひたれかすいきせさらんわれらその心をかんする／ところにありきよもり入道猶ようきをゝこしてき寺にうち／いらんとほつするよしほのかにうけ給はるによてかねてその／よういをいたす十八日のたつの一てんに大しゆをこつて同き／十九日諸寺にてつそうして末寺をけちしくむしをえてのち／あんないをたつせんとほつする所にせいてうとひきたては／うさつをなけたりす日のうつせん一時にみなさむすかのた／うかしやうりやう一さんのひしゆ猶ふそうのくわんひやうを／かへすいはんやわこくなんほくりやう門のしゆとなんそほう／しんのしやるいをはらはさらんよくりやうえんさうのちん」（３５オ）をかためてよろしく我らかしんはつをまつへししやうをろく／してきたいをなすことなかれもててつすくたんのことし／

治承四年五月日　　大しゆら／

とそかきたりける／

をんしやう寺のしゆと高倉の宮にかうりよくし奉る事

さるほとにおなしき二十二日のくれにをんしやう寺には大／衆をこりて又せんきしけるは山門には心かはりしつなんとの／しゆとはいまたさんせすこのこと程のひてはかなふましいさ／や今夜六はらにをしよせて夜うちにせんらうせう二てに／わけてによいかてよりけん三位入道を大将としてらうそうとも」（３５ウ）てゝにたいまつもたせあしかろ四五百人をさきたてゝしら／かはと云さいけに火をかけおりゆかは京六はらのはやりお／のものともかあはやことのいてきたるとてはせむかは（カ）、いは／さかさくらもとにひつかけ〳〵たゝかはん程に大てよりい／つのかみを大将にしてわか大しゆあく僧共六はらへをしよせ／てかさ上にひをかけてもみにもうてせめんになとか大しや／うの入道をやきいたしてうたさるへきとそせんきしけるこゝ／に平家のいのりしける一如房のあしやりしんかいと申

ける／かてしとうしゆくす十人ひきくしつゝせんきのにはにすゝみ／出て申けるはかく申せはへいけのかた人するとやおほし」（36オ）めされ候らんたとひさるともいかてかわかてらのなをもおし／みもんとのきすをはそむせて候へきむかしはけんへいさうに／あらそひていつれもせうれつなかりしかともいまはけんし／たえへいけ一の世となり天下をたな心ににきりてなひかぬ／草木も候はすない〳〵のたちのあるさまもふせいにてはかな／ふまし（ママ）けうらう車をかへすと云事は候へともいかによく／〳〵はかりことをめくらし南都のしゆとをあひまつへく／や候らんと夜をふかさんとなか〳〵とせんきしけりせうえん／はうのあしやりきやうしうとて八しゆんにたけたるらうそ／うのもしやうそくにかしらつゝみて大きなるうちかたなさ」（36ウ）すまゝにせんきのにはに出て申はせうこを外にたつぬ／へきにあらすわかてらのほんくはんてんむ天皇は大ともの王／子にをそれさせ給てやまとのくにうたのこほりをすき給ひけ／るにはわつかにそのせい十七きされともいか伊勢にうちこ／えてみのおはりのせいをもて大ともの王子をほろほしてつ／ゐにくらゐにつかせ給ひにききうてうふところにいれはしんりん／これをあはれむといふほんもんありしかるにみやの我らをう／ちたのみていらせたまひたるにいかてかちからをあはせ／参らせさるへきよはしるへからすきやうしうかもんとに／をいては今夜六はらへをしよせてうちしにせよやとそせんき」（37オ）したりけるえんまんゐんのたゆうけんかくと云あくそうす／すみいてゝ申けるはせんきはしおほしいそきすゝめや夜の／ふくるにさらはとてらうせううつたちけりまつによいかて／にむかふ大しやうくむけん三位よりまさ老僧にはてうえん／房のあしやりきやうしうりつしやうはうのあしやりにちいん／そつのほうゐんせんちせんちかてしきほうせんゑいをさきと／してひたかふと六百よきてむかひけりてゝにたいまつをそも／たりけるおほてよりむかふあくそうにはゑんまん院のおに／とさりつしやうはうのいかのきみこれら三人はうちものとて／はおにともかみともあはんと云一人たう千のつはものなりひやう」（37ウ）とう院にはいなはのりつしやあらたいふすみの六郎は／うしまのあしやりきたの院にはしやうき院のあらとさこん／くわう院の六てんくたいふしきふのと加賀さとひんこら也／つゝ井法師にはきやうのあしやり悪少納言かやのちくこひ／むこ大やのしゆむちやう五ち院のたしまひのおのちやううん四／郎はうせうえんはうのあしやりきやうしうかはう人六十人／かうちかゝのくわうせうきやうふはうしゆんしうほうしはら／には一らい法師そすゝみたるたうしゆにはつゝ井のしや／めうめいしゆんをくらのそむけつそむゑいしけいらくちう／かなこふしのけんゑいはうふしにはいつのかみなかつなおと」（38オ）とけんたいふのはんくはんかねつな六てうの蔵人なかいへしそ／く蔵人の太郎なかみつらうとうにはわたなへたうにはふ／くはりまの二郎さつくさつまのひやう衛のせうつゝくのけ／むたきをふのたきくちちやう七となうあたふむまのせうむつ／かきよし（ママ）すゝむをさきとしてひたかふと一千よきにてうつた／ちけり寺には

みやいらせ給て後大せきこせきほりきてさかも／きふさきたりけれはこれをとりのくるほかにはしわたすな／とせしほとにやうやくしこくをしうつてせきちのにはとりな／きあへりいつのかみ申けるこはいかにせんするたゝ今とりなき／て六はらへははく中によせんすれえんまんゐんのたゆ」（３８ウ）うすゝみ出て申けるはしはらくとよむかししんのせうわうの／時まうしやうくむと云つはものありいましめをかうふりてあ／りしかははかりことをもてにけまぬかれし時かんこくのせき／にいたるにはとりのなかぬかきりはこのせきのとひらく／事なしまうしやうくむか三千のかくの中に天かつといふ／兵ありにはとりのなくまねをゆゝしくしけれは人けいめいと／そ申けるかれかたかま所（ママ）にのほりてねのこくはかりに／にはとりのなくまねをしたりけれはせきちのとりともつたへ／きゝてなきあひぬ鳥のそらねにはかされてせきのとひらき／てとをしけりこれもかたきはかり（ママ）ことにやなかすらんたゝよ」（３９オ）をよや（ママ）とそ申けるされとも五月のみしか夜なりけれは夜／ははやほの〳〵とあけにけり夜うちこそさりともとおもひつ／れひるいくさにはいかにもかなふましてともよひかへせよやとて／によいかてをもよひかへすおほてはまつさかよりこそかへ／りけれ大しゆ共申けるはしよせんこれは一如はうかなかせん／きにこそ夜は明たれ其はうきれやとてわか大しゆあくそうら／百余人をしよせてさん〳〵にきるふせく所のてし同宿す十人／うたれにけり一せう房はう〳〵六はらへはせさむしてなく／〳〵このやうを申けれとも平家のつはものす万きにて／かためたりけれは事こそなかりけれさる程に三位入道宮の」（３９ウ）御前に参て申けるは山門には心かはりしつなんしゆ（ママ）と／はいまた参らす寺はかりにてはいかにもかなひ候まし／なんとのかたへ参らせまし〳〵候へと申けれはおなしき二／十三日のうのこくはかりになんとへおもむかせ給ひけり／

たかくらのみや御ふえの事

宮はせみおれこえたとてかんちくの御ふえを二もたせ給ひ／たりこのせみおれと申は鳥羽院の御宇にこかねを千りやう／そうてうの御門へ奉らせ給ひたりけれはそのへんほうとおほ／しくてしやうしんのせみのやうなるふしつきたるかんちくを一／よをくられたりけれはいかにかゝるてうほうをはたゝはえ」（４０オ）るへきとて大納言のそうしやうかくそうに仰てたん上にた／てゝ七日かちしてえられたる御ふえなりおほろけの御ゆうに／はとりも出されさりけるをあるときの御ゆうにたかまつの／中なこんさねひらのきやうふかれけるよのつねの笛のやう／におもひわすれてひさよりしもにをかれたりけれはふえや／とかめたりけんせみおれにけりそれよりしてせみおれとそ／なつけけるこのみやのつたへさせたまひたりけるを御心ほそ／くおほしめされけんなく〳〵こんたうのみろくに奉らせた／まひたりうけのあか月ちくの御ためかとおほえてあはれ／なりせうえんはうのあしやりきやうしうはとのつゑにすかりて」（４０ウ）みやの御まへに参りて申けるはいつくまても御ともにさん／じたう候かよはひ八しゆんにたけてぎやうぶもかなひかた／く候これ

にでしにて候きやうふはうしゆんしうをしんし／候なりあれは一とせへいちのいくさにこさまのかみよしと／もかてについて六条かはらにてうちしに仕りて候しさかみ／のくにの住人やまうちのすとうひやうふのせうとしみちかま／こにて候しをきやうしういさゝかよしみ候によてようせう／よりあとふところにておほしたてゝ心のそこまてもよくし／て候なりいつくまてもめしくせさせ給ふへく候となく〳〵／申せは宮いつのよしみにかやうには申らんとて御なみた」（41オ）にむせはせ給ふ老僧ともはみないとま申てとゝまりけ／りわか大しゆとものこるものなく御ともに参りけりそのせ／いつかう一千よきとそ聞へし／

うちはしかつせんの事

みやはだいこちにかゝてなんとへおもむかせ給ひけるか宇治／とてらとのあひたにて六度まて御落馬ありこれは去夜御／しんもならさりつるゆへなりとてうぢのびやうどうゐんへ入／参らせてしはらく御きうそくありつはものともうちはし三／けんひいて馬のあしひやさせてやすむ所に平家この事をきゝ／てすはやみやこそなんとへおもむかせ給ふなれさらはをつか」（41ウ）けまいらせよとて大しやうぐむにはさひやうゑのかみとも／り蔵人のとうしけひらさつまのかみたゝのりちうくうのすけ／みちもりさまのかみゆきもりさふらひ大しやうにはかづさの／かみたゝきよその子の太郎官判（ママ）たゝつなひたのかみかけい／へその子たゆうはんくはんかけたかゑつちうのせんしもり／としおなしき二郎ひやう衛もりつきむさしの三郎さ／ゑもんありくにをはじめとして都合そのせい二万五千よきにてこ／はた山をうちこえてうちはしのつめにそをしよせたるむかひ／のひやうとうゐんにかたきありとめをかけてへいけのせい／二万よき時をつくる事三かとなりてんもひゝき大ちもゆる」（42オ）くはかりなりみやの御かたにもときのこゑをそあはせける平／家の兵ともはしをひいたるをしらすしていそきすゝみて／わたるほとにせんちんかはしをひいたるそあやまちすな〳〵／とよははりけれともこちんきゝもつけすしきりにこみ／けれはせんちん二百よきをしおとされて水におほれて／うせにけりさる程にはしのりやうはうのつめにうつたてやあはせ／しけりみやの御かたには寺ほうしに大やのしゆんちやう／ひのをのちやううんわたなへのはふくさつくかいけるやそた／てもたまらすよろひもかけすいとをしける源三位入道頼／政はちやうけんのひたゝれにしなかはおとしのよろひをきけふ」（42ウ）をさいことたゝかはんとてわさとかふとはきさりけりちやく／しいつの守なかつなはあかちのにしきのひたゝれにくろ／いとおとしのよろひをきゆみをつよくひかんとてこれもかふ／とはきさりけり五ち院のたしまはあかゞはおどしのよろひ／きて五まいかふとのをゝしめしらえのなきなたのさやはつし／はしのつめにそすゝみたりかたきかかたよりさしつめひきつ／めいけるや雨のことくそかゝりけるさかるやをはおとりこえ／あかるやをはついとゝりむかふてくるやをは長刀をもてきて／おとすおほかた大うちはにてはいをはらふかことくなりかた／きもみかたもあれをみよとそ申け

るそれよりしてやきりのた」（43オ）しまこ(ママ)そ申けるつゞ井のしやうめうめいしうはかちんの／ひたゝれにくろかはおとしのよろひに五まいかふとのを／をしりて三しやく五すんのいかものつくりのたちをはき二／十四さしたる大中くろのやかしらたかにおひなしぬりこ／めとうの弓にこのむしらえのなきなたをそとりそへたる／ものそのものには候はねともたうしゆにつゝ井のしやうめうめ／いしうとてをんしやう寺にはそのかくれなし我と思はん人〻／はすゝめやむかへやけさんせんとてはしのつめにそすゝみた／るさしつめひきつめいるやに十二人やにはにいころして十／一人に手おふせて一はのこてゑひらにありゆみをからとな」（43ウ）けすてゝゑひらをとひて川へなけいれぬつらぬきぬひては／たしになりかふとのををそつよくしめけるかたきもみかた／もあれはいかにとみるほとにはしのゆきけたをさら〳〵と／はしりわたる人はをそれてわたらね共しやうめうか心には一／てう二てうのおほちとそふるまひけるなきなたにてむかふか／たき四人きて五人めになきなたまなかよりうちおりなけす／てぬたちにてたゝかひけるかくきやうのかたき七八きうてあ／まりにたちをかふとのはちにつよくうちあてめぬきのもと／よりちやうとおれてくつとぬけて川へさふといるたのむ所／はこしのかたなひとへにしなんとそくるひけるこゝにせう」（44オ）えんはうのあしやりきやうしうかしもほうしに一らい法師／とてしやうねん十八さいになりけるかもえきおとしのはら／まきになきなたのさやをはつしはしのゆきけたをはしり／わたるしやうめうはたちたりよくへきやうはなかりけりしやう／めうかかふとのてへんに手うちかけてあしう候しやうめう／はうとてかたゆらりとおとりこえてそたゝかひけるしやうめ／うも一らいをうたせしとつゝひたり一らいはかたきの中へ／やふつていりくきやうのつはもの四人きつて二人にいたて／おほせてわか身もいたておひけれは川へとひ入てそうせに／けるそのまにしやうめうはひやうとうゐんのしはにはしり」（44ウ）かへりて物のくぬきよろひに立たるやをかそへたれは六十／三うらかくやは五ところされともいたてならねはところ／〳〵にきうちしてかしらをからけしやうえをき弓うち／きつてつえにつきあみたふつと申てならのかたへそをち行けるそ／のゝちわたなへたうにはふくさつくをはしめとしてむねとの／つみ(ママ)もの寺ほうしに大やのしゆんちやう五ちゐんのたしま／しやうめうか渡りたりつるをてほんにしてはしのゆきけたを／はしりわたり〳〵たゝかひけりふむとりして帰るものもあり／手おひて川へとひ入しぬるもありへいけのつはものともい／かにもかなふへくもなかりけれはかつさのかみたゝきよ大将ぐん」（45オ）に申けるははしのうへのいくさいかにもかなふへしとも／みえ候はす川をわたすへきにて候かたうしはさみたれの／ころにてみかさはるかにまさりて候あひた馬人おほくうせ候／なんいかゝ仕り候へき淀いもあらひをや渡り候へきまたかは／ちちをや参るへきと申所にしもいけのくにの住人あしか、／の又太郎たゝつなとてしやうねん十八さいになりけるか／すゝみいてゝ申けるはをそれある申事にて候へともめのまへ／なる

かたきのかし奉りてなんとへいらせ給ひなはよし野／とつかはの御勢参りいよ〳〵御大事になり候へしよといも／あらひかはちちをは天ちくしんたんのふし共かまいりてわた」（45ウ）さんするかそれもわれ〳〵こそわたさんすれむさしとしも／つけとのさかひにとねかはと申きこゆる大河ありこかすき／のわたりたかゐのわたりとてともに大事のわたりなりせん／ねんち、ふとあしか、と中をたかひつねにかつせんの候／しにあしか、につたの入道をかたちひておふてはなかゐの／わたりにむかひからめてはすきのわたりよりにつたの入道／をむけしにすきのわたりにようしたりし舟ともち、／ふかかたよりみなやふられて入道か申しは舟かなけれは／とてた、いまこ、をわたささらむにはなかきゆみやのきす成へし／はんとうむしやのならひとしてめにかけたるかたきを川をへた」（46オ）てたれはとてふちせをきらふやうやある水におほれてしな／はしねわたせやもの共とて大勢馬いかたをつくりてわたせは／こそわたしけめこの川のふかさもはやさもとねかはにいく／程まさらしおとらしなとのはらいさやわたさんとてまつさ／きにこそうちいれたれこれをはしめとしてつ、くものとも／たいこ大むろふかす山かみなはの太郎さぬきの四郎たいふ／ひろつなをのてらのせんし大三郎みちつならうとうには／おふかたの二郎とねろの四らう日よしのとうたきりしの六／郎大をかのやす五郎大たの二らうた中の五郎をはし／めとして三百よきくつはみをならへてうち入たりあしか、大」（46ウ）をんしやうをあけてけちしけるはつよからむ馬をはうはてに／たてよはからん馬をはしたてになせ馬のあしのをよはん／程はたつなをかいくれてあゆませよはつまはたつなをくりて／をよかせよ一きもさからんものをはゆみのはすにとりつか／せよてをとりくみたかひにちからをあはせてわたすへしく／らつほにのりさためてあふみをつよくふめみつしとまは三つに／のりかかれ馬のかしらしつまはひきあけよいたうひいて／ひよかつくなかふとのしころをつねにかたふけよあまりに／かたふけて手へんいさすなかたきいるともあひひきすないむ／けの袖をまかほにあてよむまにはよはくみつにはつよくあ」（47オ）たるへしかねわたしてあやまちすな水にしなふてわたせや／〳〵とけちしつ、三百よきをつきもなかさすむかひのきし／へさつとそわたす／

けん三位入道とうしかいの事

あしかかはしけめゆいのひたたれにひおとしのよろひきしら／あしけの馬にきんふくりんのくらをひてのりたりけるあふ／みふむはりたちあかりてうてきまさかとをほろほしてけんし／やうにあつかりたりしたはらとうたひてさとか五代のへうゑ／いあしかかの太郎としつなかちやくし又太郎たゝつなと／てしやうねん十八さいかやうにむくわんむゐなるもの、みや」（47ウ）にむかひ奉りて弓をひきやをはなつ事みやうのをそれに候／へともゆみもやもみやうかのほとも大しやうの入道とのの御／身のうへにこそ候らめわれとおもはん人さむかへやす、めや／けさむせんとなのりてひやうとうゐんのしはにをしよせてひ／いつるほとそた、かひけるそののち二万よ

きのつはものとも／くつはみをならべてうちいれたり馬人にせかれてさはかり／はやきうち川の水は上にそた、へたりをのつからはつる、／みつには何もたまらすをしなかされけるその中にいか伊勢の兵／ともわたしけるいかにしたりけん馬いかたをおしやふ／られて六百よき水におほれてうせにけりもえきひをとし色」（48オ）〱のよろひとものうきぬしつみぬなかるれはかみなひ山の／紅葉のみねのあらしにさそはれてたつた川のあきのくれゐ／せきにかゝてなかれもやらぬにことならすひおとしのよろ／ひきたるむしや三人あしろにかゝりてなかれもやらさりけ／るをいかなるものかよみたりけん／

い勢むしやはみなひおとしのよろひきてうちのあし／ろにかゝりぬるかな

これは伊勢のくにの住人とはの源六ひの、／十郎くろたの五郎四らうと云ものなりくろたはさるつ／はものにてある間弓のはすをいはのはさまにねちたて、／わか身もあかり二人をもたすけけりそのちつはものうんか」（48ウ）のことくみたれいる三位入道はかなはしとやおもひけんみや／をも南都へさきたて参らせてふせきやいけりしそく源／太夫の官判（ママ）かねつなはこんちのにしきのひたゝれにあかおとし／のよろひきてれんせんあしけの馬にしろふくりんのくらを／きてそのりたりける三位入道にかゝるかたきを返し合〱七／八度まてふせきけりそのまきれにかつさの太郎はんくはん／かはなつやにかねつなかうちかふとをいさせてひるむ所に／かつさかわらはに三郎まろと云した、かものくひをとらん／とおちあひたりかねつないたてなりけれとも大ちからなりけ／れは三郎まろをとておさへてくひをかきおきあからんと」（49オ）する所に平家のつはものあまたおちあひて源太夫の判官／をうてけり三位入道これをみて心ほそくやおもはれけんさし／あらはれてこゝをさいことさしつめひきつめい給ふほとに／むねとのつはもの十二三きいおとしあまたに手おふせてうち／物になりてたゝかひけるかみきのひさくちをいさせてかなはし／とやおもはれけんひやうとうゐんのしはにかへりてちやう／七となふをめしてかたきかてにかくないそき首とれとのた／まへはとなふなみたをなかし御くひ給ふへしともおもひ候／はす御しかいたにも候はゝと申せはさらはとて西にむかひ／てさいこのことはそむさんなる」（49ウ）

むもれ木の花さく事もなかりしにみのなるはてそあ／はれなりけり

とてかうしやうにねんふつ十へんはかりとなへ／てたちのきつさきをはらにあて、つらぬかれてそうせにける／そのときうたよむへしとはをもはねともわかうよりすき給／いけれはさいこまてもわすれさりけりそのくひをはちやう七か／きおとし（*り）人にはみせすかたきともの中をとかくまぬかれいて、／大きなるいしにくゝりあはせてうち川のふかき所に／そしつめけるいつのかみなかつなおもひきてた、かひけるか／これもいたておひてひやうとう院のつりとのに入てしかい／しけりそのくひをはしもかはへのとう三郎とつて大ゆか

の」（50オ）下にそなけ入ける六てうの蔵人なかいへしそく蔵人の太郎／なかみつもひいつるほとたゝかひておなしくうちしにしけ／りこの六てうのくらんとなかいへと申はこ六てうの官判（ママ）（ママ）お／めよしにはまこたちはきのせんしやうよしかたかちやくし／なりきそのくはんしやよしなかにはあになりけるを三位入／たうやうしにしたりけるか弓やとりのならひとてねんら／いのけいやくたかへすうちしにしける契りの程こそあはれ／なれわたなへたうにはふくはりまの二郎やたね有程／いつくしてうちものになてた（*り）ゝかひけるかこれもいたておふてし／かい（ママ）ぬさつくさつふ（ま）のひやうゑのせうもさん〳〵にたゝかひ」（50ウ）てうちしにしけりきをふのたきくちをつはものともなに共／していけとりにせんとしけれともかたきをはるかにをひち／らしてたちのきつさきを口にふくみて川へとひいりてう／せにけりえんまんゐんのたいふけんかくもいまは宮ははる／かにのひさせ給ひぬらんとて左右の手に大なきなた大たち／もてもの、くしなから川へとひいりぬ物のくをも一もすて／すして水のそこをはひむかひのきしへとひあかりてへい／けのきんたちかやうには大事さうかよとて三井寺のかたへそ／おち行けるひたのかみかけいへはふるきつはものにて宮を／は一ちやうなんとへさきたて参らせつらむとていくさをはう」（51オ）ちすて、五百よきにてをつかけ奉る光明山の鳥ゐのまへにて／をつつき奉りて兵ともやたねをそろへてさしつめひきつめ雨／のふるやうにい奉りたるに何かはなちたるやとはしらね共宮の／ひたりの御そははらにやひとつたちにけれはやかて御／馬よりおちさせ給ふにへいけのつはものともあまたおちあ／い奉りてつゐに御くひをそ給ける御ともに候（は）けるりつしやう／はうのあしやりにちゐんきやうふはうしゆんしうこんくは／う院の六てんくをはしめとしてむねとのつはもの二十よ人／はけるもさむ〳〵にたゝかひてみなうちしにしたりけりみ／やの御めのとこ六条のすけのたいふむねのふは大おくひやう」（51ウ）なるうへかたきはしたいにちかつく馬はよはしかなはしと／やおもひけんにいの、池におりひたり水のそこに身をし／つめつ、めはかりはつかにみいたしてふるひゐたれはかたきの／とをるをみけるほとに三百きはかりありけるふしとも／中にくひもなきむくろのしやうゑきたるをしとみのもとに／かゝせて行をみれはわかしうの宮にてそわたらせ給ひけるわ／れしなは御くはんに入よとおほせのありけるこえたと聞え／し御ふえはいまた御こしにさゝれたりはしり出てとりつ／き奉りてなにともならはやとおもひけれ共さすかにおそろ／しさに水のそこにてかはつのやうにそなきゐたりけるかた」（52オ）きみなかへつてさてもあるへきならねはいけよりはひ上りぬ／れたるものともしほりきてなく〳〵きやうへそいりにける／なんとの大衆は其勢七千よきとそきこえしせんちんはきつ／にすゝみけれはこちんはいまたこうふく寺のなん大もんにそ／ゆらへたるさるほとにみやはくわうみやうせんのとりゐの前／にてうたれさせたまひぬと聞えしかは大しゆちからをよは／てみな袖をしほりてそかへりける今五十ちやうをまちつけさ／せ給はてうたれさせ給ひける御う

んの程こそうたてけれ平家／は宮の御くひならひにむねとのつはもの五百人かくひきて／夜に入て京へいりいさみのゝしる事なのめならす三位入」（52ウ）道かくひはうち川へしつめてけれはなかりけりいつのかみ／なかつなのくひはたつねいたしけりみやの御くひは日ころつ／ねに参りかよふ人もなかりけれはみしり参らせたる人もなし／てんやくのかみさたなりせんねん御れうちのためにめされた／りけるをこれそみしり参らせたるらんとてめされけれ共てん／やくしよらうとて参らす一とせ御かほにあしきかさのいて／きさせたまひたりしをめてたくれうちし奉りてたすから／せ給ひたりしに今度うたれさせ給ふそ御いとおしきみやの日／ころ夜な〳〵めされける女はうの宮の御くひをはみしりま／いらせたるらんとてたつねいたし奉りたりこの女ほう宮の御く」（53オ）ひを見たてまつりていかはかりの事をかおもはれけんそて／をかほにをしあてゝなみたにむせひ給ひけるにそ宮の御／くひともしりてんける／

たかくらの宮の御子出家の事

宮はわかみやひめみやあまたわたらせ給ひけり八てうの女院／にもいつのかみもりのりかむすめ三位のつほねと申ける女／ほうのはらにもみやたちあまたわたらせ給ひけりこの三位／のつほねは女ゐんの御いとおしみにて宮たちをも御子のことくに／おほしめし御いの御ふところにてそたて参らせさせ給ひけ／り中にもわかみやの七さいにならせ給ひけるを大しやう」（53ウ）の入道いけの中なこんよりもりをししやにてみやいたし／奉らせ給ふへきよし申されけれはにようゐんかゝる事の聞／えしあかつき御めのとか心をさなくとりたてまつり御ゆく／すゑをしらすとおほせけれはちうなこんもいはきならねは／うちしめりておはしける所に入道かさねてなんてうこれ御しよ／ならてはいつくへかわたらせたまふへきへちのしさいあるま／しそのきならは御しよをさかしまいらせんとて事のけ／いきはしたなけにみえられけれは御しよの女はうたちさはか／れける事なのめならすこのちうなこんはにより院の御めの／とさいしやうのつほねにあひくせられたりけれはにより院も」（54オ）あさからすおほしめされけるかたゝいまのけいきを御らんす／るにあはぬもの、やうにうとましくそおほしめされける／みやはにより院の御まへに参らせ給ていまはこれほとの大／事になり候ぬる上はとく〳〵いたさせ給へと申させ給へは／により院御なみたをなかさせ給てことしは七さいにならせ／給ふなに事もおもひわかぬほとそかしこれ程我ゆへに御／大事いてきけるをかたはらいたくおもひて出せとの給ふいと／おしさよかゝるゆうなる人をこれ六七年てならしてたゝ／いまうひめをみる心うさよとて御いの御袖にあまる／御なみたせきあへさせ給はすまして御母三位のつほねの心のうちい」（54ウ）かはかりの事かおもはれけん御しよ中の女はうたち已下／にいたるまて心あるも心なきもみなそてをしほらぬはな／かりけりさてしも有へきならねは御はゝなく〳〵御しやうそ／くきせ奉りてつゐに宮をはいたし奉らせたまひけりちう／なこんもほいの袖をしほりつゝわかみやいたき奉りて御くる／まにのせ参らせて六はらへわた

し奉るさきの右大しやうむね／もりのきやう宮をたゝ一め見まいらせていかゝおもはれけんちゝ／の入道しやうこくに申されけるはせんせのしゆくしうにて／候やらむあまりにいとおしくおもひ奉り候りをま／けてこの宮の御いのちをはむねもりにたひ候へと申されけ」（55オ）れは入道ものにおほえぬむねもりかなとのたまひけれともあ／なかちに申されけれはさらはとう御出家せさせ奉りて御／むろへ入奉るへしとの給へはむねもりいそき女ゐんへこのや／うを申されけり女院なのめならすよろこはせまし〳〵てへ／ちのやうあるましさらはとう〳〵と仰けれはやかて仁和寺／の御むろにて御出家ありやすゐのみやうたうそむと申しは／この宮の御事なり又ならにも一しよまし〳〵けるを御／めのとさぬきのかみしけひてか御出家せさせ奉りてしのひつ／つ本国へくしたてまつりておち下りたりけるをきそよしなか／しうにし奉らんとてゐつ中のくにみやさきの御しよつくり」（55ウ）て入たてまつり参らせけるきそ上らくせしときくし奉りて都／にて御けんふくありきそかみやとも申けんそくのみや共申／けり後にはさかのゝいりと云ところにまし〳〵けれはのいりの宮／と申けりさう少納言これなかはゆゝしきさう人とこそ／聞へしに宮をはみそむし奉りたりけるこそあさましけれなか／比つうしよといひしさう人ありきうちとの大二条殿をは三／代関白御とし八十と申しもたかはすそつの内大臣をはるさ／いのさうましますと申しもたかはすしやうとく太子の／しゆしゆん天皇をわうしのさうましますと申させ給ふ／も馬子の大臣にころされさせ給きかならすさう人としもな」（57オ）けれともしかるへき人はかくこそおはせしにこれさう少な／こんかふかくなりとそ人申けるそれ位のたかくかさなるをう／れへすしてとくのたとからさるをうれへよろくのおほからさ／るをはちすしてちのうすきことをはちよとみえたりむかしけ／んめいしんわうくへいしんわうはけんわうせいしゆの御／子にてさきの中しよわうのちの中しよわうとてめてたく／きこえさせ給しかとも御くらゐにもつかせ給はすされともい／つかは御むほんをゝこされしこ三条院の第三のわうしすけ／ひとのしんわうは御かくもむもすくれ御さいかくも聞えさせ／給ひしかともしら川のゐんいかゝおほしめされけんつゐ」（57ウ）に御くらゐにもつけ奉らせ給はすその御うらみをなため奉／らんとおほしめされけるにやすけひとのしんわうの御子はな／そのゝさ大しんとのをはしら川のゐんの御まへにしてけん／しのしやうをさつけ奉りてむゐより一とに三位にしよして／中将になされける一世のけんしむゐより三位になる／事さかの天皇の御子やうせい院の大納言さたむのきやうほ／かは承りをよはすさる程におなしき廿四日みやならひに／三位入道てうふくのきそうかうそうけんしやうかうふるまた／ちもくをこなはれけりさきの右大将むねもりのちやくしし／しやう清むね三位して三位のししうとそ申けるしやうねん十」（56オ）二さいちゝの卿はこのよはひにてはわつか（カ）にひやうゐのす／けにてこそおはせしかよをとる人の子ならんからにおそろ／し〳〵とそは（ママ）と申（ママ）けるこれはみなもとのもちひとならひに／まさより（ママ）入道ふしついた

うのしやうとそ聞えしみなもとの／もちひとゝ申は高倉の宮の御事なりまさしと太しやうほ／うわうの御子にてわたらせ給ふをうち奉るのみならすほん人／にさへなしたてまつるそあさましき／

をんしやうしえんしやうの事

さんもんにこそいさゝかの事にもみたれかはしくそせう／をも仕るかこんとはをんひんのきをそむして御ともせすなん」（56ウ）と三井寺にはあるひはたかくらのみやをふちしたてまつり／あるひは御むかひにさんすこれすなはちてうてきなりとて／ならをも三井寺をもせめらるへしとそ聞えしまつ三井寺／をせむへしとて入道の四なん蔵人のとうしけひらをいにち／うくうのすけみちもりつかうそのせい三千よきにておなしき／二十七日のむまのこくにをんしやう寺へはつかうすてらに／は大しゆほりほりきつてさかもきふさひてまちかけたりへい／けをしよせて一日せめたゝかふに大しゆい下のほうしは／ら三百よ人うたれにけりそのゝち寺中に火をかけたれは／やくる所はほんかく院しやうき院しんによ院花そのゝゐんふ」（58オ）けんたう大ほうゐんしやうりうゐんそむしやうかうたうけ／いそくはうけうたいくはしやうの御ほんはうならひに／御ほむかむこをうせんしんしやたん八けん大かうたうしゆ／ろふきやうさう二かいのろうもんくわんちやうたうそうしてたうし／やたうへう六百三十七宇大つのにしのうらのさいけ二十八百五（ママ）／十三宇地をはらふてやけうけりこんたう一宇はかりわつ／かに残りたりけるこそふしきなれ大師のわたしたまへる一／さい経七千よくわんふつさう二千よたいもたちまちに／けふりとなるこうかなしけれほうもんしやうけうのやくるけふ／りにはたいほんてんわうのまなこもたちまちにくれしよ」（58ウ）てん五めうのゐいもこのときなかくはうしりうしん三ねつ／のくるしみもいよ〳〵ほのほにむせふらんとそおほえたる／三井てらはあふみのき大りやうかわたくしのてらたりしを天／む天皇の御くはんとなすほんふつもかのみかとの御ほん／そむしやうしんのみろくときこえさせ給しけうたいくわしや／うの百六十年をこなひて大しにふそくし奉らせ給ひきと／した天上まにほうてんよりあまくたりてはるかにりうけ／けしやうのあかつきをまたせ給ふと聞えつるにこはいかに／しつる事そや天ち天むちとう三代の御門の御うふゆの／みつめされたりしゆへにこそ三井寺ともなつけたれかやうに」（59オ）めてたかりつるきうせきもいまはなにならすけんみつしゆゆに／めつしからんさらになししよ三みつのとうちやうもな／かりけれはしんれいのひくきもたえ仏せんもなかりけれは／あかのをともせさりけりしゆくらうせきとくのめいしもきやう／かくにをこたりしゆほうさうせうのてしもみなきやうけう／にわかれたり寺のちやうり八条の宮天王寺の別当をとゝめ／られ給ふそうかう十二人けくはんせられぬあくそうにはつゝゐ／のしやうめうにいたるまて三十よ人なかされけるさしも／めてたかりつる三井のほうりうのつきはてぬるにこそあやし／の心なきものまてもかなしますと云事なし三位入道宮を」（59ウ）はたのもしけに申てすゝめ奉りたりけれともえんこくは申／にをよはすきんこくの

けんしたにも参らす山門も心かはり／しぬなんとの大しゆいまたさんせさるうへへいけす万きにて／をつかけ奉りたりしかはあへなくうたれさせ給ふのみならす／てらをもたちまちにほろほしはてぬるこそかなしけれ／

けん三位入道うたの事

この三位入道と申はつのかみらいくわうの五代のまこみか／はのかみよりつなかまこひやうこのかみなかまさか子なりけ／り保元にみかたにて命をすてゝたゝかひたりしかともさせ／るしやうにもあつからす平治のらんの時しんるいをすてゝ」（60オ）御かたへ参りたりしかともほんしやうこれをろそかなりきちう／代のしよくなれは代々のしゆこ承てとし久しかりしかとも／せうてんをはゆるされすとしたけよはひかたふきて後しゆつ／くはいの歌一しゆよみてこそせうてんをはゆるされけれ／

人しれぬ大うち山の山もりはこかくれてのみ月をみる／かなとつかまつりて四位してしはらく候けるか又三位をこゝ／ろかけて／

のほるへきたよりなけれは木下にしゐをひろひて世を／わたるかな

とつかまつりて三位したりけるとそ聞えしほと／なくしゆつけしてけん三位入道とそ申ける」（60ウ）

けん三位入道ぬえをいる事

この人の一このかうみやうとおほしき事ともおほかりける／中にも近衛院の御宇さんぬる久安比しゆ上夜な〳〵／おひえさせ給ふ事ありくたんの御なうはとう三てうの／木のむらよりくろくも一むらたなひきてたいりの御殿におほふときは／かならす御なうまさらせたまひけりきそうかうそうにおほ／せて大ほうひほうをしゆせられけれともそのしるしもなかり／けりいまはけんへいの中にしかるへきふしをめしてけいこ／あるへしとくきやうせんきありほり川院の御宇寛治のころ／も主上かやうにおひえさせ給ひけれはその時のしやうくむ」（61オ）きかをめされけりきかはかうのかりきぬにぬりこめとうの／弓に山とりのおをもてはいたるとかりや二とりそへて南／殿の大ゆかにしこうす御なうのこくけんにめいけんする事／三度のゝちさきのむつのかみみなもとのきかとかうしやうに／なのりたりしかはきく人みのけよたつて御なうをこたらせた／まひけりしかはせんれいにまかせてけいこあるへしとて／しかるへきけんしの中によりまさをえらひ申／さるよりまさその時ひやうこのかみと申けるかめされま／いりけるよりまさ申けるはてうかにふしをゝかるゝ事／はきやくほんのものをしりそけいちよくのものをほろほさん」（61ウ）かためなりくんにぬけてめさるゝ事は家のめんほくた／りといへ共めにみえぬへんけのものをつかまつれといふちよ／くちやうこそしかるへしともおほえねと申まゝにとをた／うみのくにのちう人ゐのはやたにほろのかさきりはいたるや／おはせてわか身はぬりこめとうのゆみにこれも山とりのお／をもてはいたるとかりやにかふら取そへてしんかうにを／よんてさんたいす御なうのこ

くけんにをよひてみれはけ／にも人のいふにたかはすとう三条のもりのかたより御てん／にくろくもおほひあやしきものありよりまさ南ていに／すゝみいてゝこれをいそむしつるものならは世にあるへき」（62オ）身とはおもはす南無八幡大ほさつと心中にきねんし／まつかふらやにてひやうといるやうありとみるところにへん／けのものかふらやのこゑにおとろきてくろくもの中に／ひめいてなき参るところをとかりやとつてつかひよくひいて／ひやうといる手こたへしてふつとあたるえたりやあふとさけ／ひをこそしたりけれやたちなからなんていへとうとおつゐのは／やたつとはしりよておさへて九かたなそさしたりけるその時／上下手に火をいたしてこれをみれはかしらはさる身はた／ぬきおはくちなはあし手はとらのすかたなりなくこゑぬへに／そにたりける大しやうてんわう御かんのあまりにしゝわう」（62ウ）とめされける御けんをくたさせたまひけりよりなかさふ／これをたまはりついてよりまさに給けるに比は四月十日あま／りの事なれはおりふしくもゐにほとゝきすのこゑをと／つれてとをりけれはさふ／

ほとゝきすなをもくもゐにあくるかな

とおほせかけ／られたれはよりまさひたりのひさをつき右の袖を／ひろけゆみわきにはさみて月をそはめにかけつゝ／

ゆみはり月のいるにまかせて

とつかまつりて御けんを／給てまかりいつゆみやにちやうせるのみならすかたうもす／くれたりけるときみもかんせられけるさてこのへんげのもの」（63オ）をはうつほ舟に入てそなかされけるよりまさはいつ／国をたまはつてしそくなかつなしゆりやうになしたん／はの五かのしやうわかさのとうのみやかはちきやうして／さてあるへかりし人のよしなき事をくはたてみやをも／うしなひまいらせわか身もしそむもほろひけるこそ／うたてけれ／

平家物語巻第四終

（以下、二行分空白）」（63ウ）

平家物語巻第五目録

一みやこうつりの事
一ほうわうをふくはらにをしこめ奉らるゝ事
一都うつりせんしようの事
一しんとのことはしめの事
一とく大寺殿しやうらくし給ふ事
一へいけくわいいの事
一おほはちうしんの事
一かんやうきうの事
一もんかく上人の事
一もんかく上人るさいの事
一へいけ関東よりにけのほらるゝ事
一大しやうゑの事

」（1オ）

一へいけ都かへりの事
一なんとめつはうの事
（以下、五行分空白）　」（1ウ）
平家物語巻第五
　みやうつりの事
治承四年六月三日入道しやうこくの年ころしつしてかよは／れつるふくはらへみやこうつりあるへしとそ聞えける日比も／ない〳〵そのさたありしかともまさしくきんきやうのほと、／はおもはさりつるものをとて上下さはきあはれけり三日／とさためられたりをいま一日ひきあけて二日のうのこくに／きやうかうなる主上ようしゆの御ときの御とうよにはほ／こうこそ参らせ給ふ事なれ共こんとはそのきなし平大納言／時た、のきやうの北のかたそつのすけ殿そ参られけるおなしき三日」（2オ）福原へつかせ給ふ入道しやうこくのしやていいけの中納言／よりもりのきやうのしゆくしよくわうきよになるおなしき／四日いへのしやうとてよりもり正二位したまひけり九条殿／の御子右大将よしみちのきやうこえられたまふせうろく／のきんたちのはんしんにかくいこえられたまふ事これ／はしめとそうけたまはる／
　ほうわうをふくはらにをしこめ奉らる、事
ほうわうはこその冬より鳥羽とのにをしこめられてわたら／せ給ひしをさきの右大将むねもりおりふし申されしによ／りて鳥羽とのをいたし奉りて八てうからすまろのひふくもん」（2ウ）ゐんの御所に入まいらせられたりしか又たかくらの宮の御む／ほんによりて入道大きにいかりてこんとはこかうをふく／はらへなし奉り四めんにはたいたをし口一あるうちに三／まのいた屋をつくりてをしこめまいらせしゆこのふしには／はらたのたいふたねなをそ候ける其外は参りちかつく人も／なしわらはへはこれをろうの御しよとそ申けるきくもいま〳〵／しくあさましかりし御事也さるま、にははんきの御ま／つりことをつゆしろしめさはやとおほしめされす山〳〵寺〻／しゆきやうして御心にまかせてなくさまはやとそおほせ／られけるすへて入道相国のあくきやうにをいてははやきは」（3オ）まりぬいんし安元よりこのかたおほくのけいしやううんかくを／あるひはなかしあるひはうしなひ関白をなかし奉りて二位の／中将殿をくわんはくにをしなしほうわうを鳥羽とのにをし／こめたてまつりて第二の御子を九重のうちをついしゆ／つしたてまつりてうちにてうしなひ奉るいまのこるとこ／ろとてみやこうつりなれはかくし給ふにこそと人申ける／
　都うつりせんしようの事
都うつりはこれせんしようなきにあらす神武天皇は地神／五代の御門うかやふきあはせすのみことの第四の王子御／は、はたまよのひめ天神七代ち神五代神代十二代のあ」（3ウ）とをうけ百王のていなりかのとのとりのとしひうかの国みさ／きのこほりにして皇子のほうそをつき五十九年といひし／つちのとのひつしのとし十月にとうせいしてこの比やまとの／国となつけたるとよあしはらの中つ国

にとまりうね／ひの山をてんしてていとをたてかしはらのちをきりはらふて／きうしつをつくり給ふこれをかしはらのみやとなつくしかしより／このかた代〻のみかとみやこをたこくたしよへうつさるゝ事三／十度にあまり四十とにをよへりしんむてんわうよりけいかう／天わうまて十二代はやまとのくにこほり〳〵に都を立たこくへ／はうつされすしかるをせいむ天わう元年にやまとのくによりあふみ」（4オ）のくに、うつりてしかのこほりにすみ給ふちうあひてんわう／二年にあふみの国よりなかとのくに、うつりてとよらのこほ／りにすみ給ふその国のこほりにして御門かくれさせ給ひしかは／きさきしんくうくわうこう代をうけとらせたまひによた／いとしてしんらはくさいかうらいけいたんこくまてうちし／たかへさせ給ひいこくのいくさをしつめさせ給ひて後ちくせん／のくにみかさのこほりにしてわうしたむしやうありそれよ／りしてそのところをはうみのみやとは申ける御くらゐの後／はおうしん天皇と申きかけまくもかたしけなきやはたの／御事也仁とくてんわう元年つの国なにはにうつりてたかつのみや」（4ウ）に住給ふりちう天皇二年に猶やまとの国へかへりてとを／ちのさとにすみたまふはんせい天王くわんねんにやまと／のくによりかはちのくににうつりてしはかきのみやにすみ／給ふいんけうてむわう四十二年になをやまとのくにかへり／てとをちのあすかのみやにすみ給ふゆうりやくてんわう／廿一ねんになをたうこくはつせあさくらにみやこをた／つけいたいてんわう五年にやまとの国よりやましろのくに／つゝきにうつり十二ねんそのゝちをとくにに宮ゐしたまふ／せんくわ天皇元年になをやまとにかへりてひのゝまいるのゝみやに／すみたまふきんめいひんたつようめいしゆしゆんすいこし」（5オ）よめいくわうきよくまて七代はなをやまとのくに所〻に／都をたてたこくへはうつされすしかるをかうとく天皇大／くわ元年にやまとの国よりつの国なからにうつりてとよ／さきのみやにすみ給ふさいめいてんわう二年にやまとに／かへりてをかもとのみやにすみたまふ天ち天王六ねんにや／まとの国よりあふみの国にうつりて大つのみやをつくりたま／ふこれをきよみはらのてんわうと申てんむてんわうくわんねん／になをやまとにかへりてをかもとの南のみやに住給ふち／とうもんむ二代のせいてうはとうこく藤原のみやにすみ／給ふけんめいけん正しやうむかうけんはいたいせうとくくはうにん七代は」（5ウ）なをとう国ならの都にすみ給ふしかるをくわんむてんわ／う延暦三年十月二日ならの京かすかのさとより山しろ／のくになかをかにうつりて十ねんこのきやうにすみ給ふおなしき／えんりやく十三年正月三日大なこんふちはらのをくろまろ／さんきさ大へんきのこさみをつかはしてたうこくかとの、／こほりうたむらを見せしむる両人くもにそうしていはく（ママ）／このちのていをみるにさしやうりううひやくこせんしゆしやく／こけんむ四しんさうおうのちなりもとものていとをさたむへ／きにたよりありとてよてをたきのこほりにまします／かもの／大明神につけ申させ給ひて同き十月二十一日なかをかのきやうよ」（6オ）りへいあんしやうにうつされてていわう三十二代

せいさう三／百八十よさいの春秋を、くりむかふ昔より国〳〵所〻／へ都をうつされしか共かゝるせうちはいまたなしとてくわんむ／天皇ことにしつしおほしめし大臣公卿しよたうのさいしんに仰／あはせてまつ長久なるしゆつとてつちにて八尺の人かたをつ／くりくろかねのよろひかふとをきせくろかねのゆみやを／もたせて東山のみねに西むきにたて、そうつまれける世／のすゑになりてこの都をたこくへうつす物あらはしゆこしん／となるへしとそ御せいやく有けるされはてんかに事のいて／こんとてはこのつかかならすめいとうすしやうくむつかとて今」（6ウ）にありくわんむ天王と申は平家のせんそにておはします／中にもこの都をへいあんしやうとなつけてはたいらかにや／すきみやことかけりもとも平家のあかむへきみやこ也／昔さかのくわうていの御時へいせいのせんていないしのかみの／す、めによりてすてにこのみやこをたこくへうつさせ給／ひしを大臣くきやうしよこく七たうの人みん百しやうらに／いたるまてうれへ申しかはつゐにうつされすしてやみに／きかたしけなくも一天の君万せうのあるしたにもたやすく／うつし給はぬみやこを入道相国しんの身としてうつされ／けるこそおそろしけれこれはくに〳〵のいそくせめのほり」（7オ）へいけみやこにあとをとゝめすさんりんにましはるへきせん／へうかとそ人申けるあはれきうとはめてたかりしみやこそ／かしわうしやうしゆこのちんしゆはよもにひかりをやはらけ／れいけんしゆせうの寺〳〵は上下にいらかをならへたりはく／せいはんみんわつらひなく五き七道もたよりあり今はい／へ〳〵をはかも川かつら川にこほち入いかたにくみうかへし／さいさうくを舟につみふくはらへそはこひくたしけれはの／きをならへし人のすまゐ（ママ）をへつゝあれゆきて花のみやこは／たゝなりにゐなかとなるこそかなしけれつら〳〵ほりきりさかもき／ふさきたりけれは車なとのたやすくゆきかよふ事もなしたま」（7ウ）〳〵ゆく人もをくるまにのりみちへてこそとをりけれいかな／るものかしたりけんふるきみやこの大りのはしらに二しゆの／歌をそかきつけたる／

も、とせを四かへりまてそすき、にしをたきのさとの／あれやはてなん／

さきいつるはなのみやこをふりすて、かせふくはらのす／ゑそあやうき／

しんとの事はしめの事

おなしき九日ふくはらにはしんとの事はしめ有へしとて上けい／には徳大寺のさ大将しつていのきやうさんきにはつちみ」（8オ）かとのさいしやうの中将みちちかの卿ふきやうのへんには／とうのさせうへんみつまさ蔵人殿させうへんゆきたかくはん／人ともあひくしてわたの松原の西の、をてんして九条のち／をわられけるに一条よりはしめて五てうまてはその所有／けれとも五てうより下はなかりけりきやうしくわんかへり参て／此由をそうし申けれはさらはは りまのいなみのかなをつの／国こやのかなとさたありしかともとみにみちゆくへしとも／みえすきうとをはすてにうかれぬしんとはい

またことゆかす／有としある人はみな身をうきくもの思ひをなしもとより／この所に住ものはちをうしなひてうれへいまうつりくる人〳〵はとを」（8ウ）くのわつらひをのみなけきあへりたゝ夢のやうなりし事／とも也土御門のさいしやうの中将みちちかのきやうの申／されけるはいこくには三ちやうのくわうちをひらひて十二の／とう門をたつといへりいはんや我てうに五てうまてあらん／こほりに都をたてさるへきとそ申されけるまつかつ〳〵さ／とたいりをつくらるへしとて五てうの大納言くにつなの／きやうりんしにすわうの国を給てさうしんせらるへきよし入道／相国はからひ申されけるこのくにつなのきやうと申はなら／ひなき大福長しやにておはしけれはつくり出されん事は／しさいにをよはぬ事なれともいかてか国のついへたみのわつ」（9オ）らいなかるへきまつさしあたりたる大しやうゑのをこなはる／へきをはさしをきてかゝる世のみたれの中に都うつりそう／たいりすこしもさうおうせすいにしへのかしこかりし御代に／はたいりをはちにてふきのきをたにもとゝのへられすけふ／りのともしきを御らんしてはかきりあるみつき物をもゆる／されきこれひとへに国をたすけたみをめくむによりてなり／されはたうのたいそうはりさむきうをつくつてたみのつ／いへをやはゝからせ給ひけんかはらに松おひかきにこけむす／まてもりんかうなかりけるにはさういかなそしやうくわのたい／をたてゝれいみんあらけしんあはうのてんをゝこして天下を見」（9ウ）たるといへりはうしきらすさいてんけつらすしうしやかさ／らすいふくあやなかりけんよもありけんものをおそろし／〳〵とそ人申ける／

とく大しとのしやうらくしたまふ事

おなしき廿一日にさとたいりの事はしめありて同き八月／十日御上とう同き十一月七日御せんかうとそさためける／ふるき都はあれゆけは今の都ははんしやうすあさましかりし／夏もすき秋もなかはになりにけりふくはらにおはしける／人〳〵は名所の月をみんとてあるひは源氏の大将のむかし／のあとをたつねつゝすまよりあかしのうらつたひしらゝふ（ママ）」（10オ）きあけわかの浦住吉なには江たかさこのおのへの月のあけほの／をなかめてかへる人もありきうとにのこる人〻はふしみふかく／さこはたの里きせんかすみしうちやまひろさはおほゐかつら／の里さかのゝ原の月をみる中にもさ大将しつていの卿ふる／きみやこの月をこひ八月十日あまりに入道相国にいとま／申てふるき都へかへりのほり給ひけるかみちすからもめいしよ／〳〵の月をなかめ給ふすゝめの松原みかけのもりいくたこや／のゝ月をみるくも井にさらすぬのひきのたきもとめつかと／なつけしはこれやこのこひゆへ身をうしなひし二人の男の跡な／らんゐなのみなとの明ほのにきり立わたるなにはかたおとこ」（10ウ）山の月かけはいはし水にやとるらんむつたのよはのむしの／こゑいなはにそよく風の音あきの山のもみちの色心をそ／むるたよりとなるきうとにかへり見給へはたま〳〵残る／家〳〵も門前草しけり庭上露ふかしよもきかそまあさ／ちかはらかりのふしとゝあれはてゝたゝくわうきくしらんのの／へとそなりにける今はふるきみやこの

なこりとては御いもう／とこんゑかはらの大みやの御しよはかり也大しやうかれにま／いらせたまひてすいしんをもてそうもんをたゝかせらるれは／内より女はうのこゑにてたそやよもきふの露うちはらふ人も／まれなるところにととかむれはこれはふくはらより大しやう殿」（11オ）の御参りにて候と申せはそうもんはさゝれてさふらふ東の門より／まいらせたまへと申せは大しやう川おもてのもんよりそまいら／れける大宮はおりふし月を詠させ給て南おもての御所に／して御ひはをあそはされけるか秋のけしきに事よせてしう／ふうらくをそあそはしけるけんしのうちのまきにはうはそく／のみやの御むすめ秋のなこりをおしみつゝひはをしらへて夜／もすから御心をすまさせ給ひしに有明の月の山のはよりいて／けるをなをたえすや思召けんはちしてまねき給ひしも今こ／そ思ひしられけれ大みや御はちさしおさめさせ給ひてこれへ／とおほせ有けれは大しやう御前ちかう参らせたまひてやゝは」（11ウ）るかに御ものかたりあり大しやうまつよひのこしゝうよひい／たしてこしかたゆくすゑの事共夜もすからかたりあかさ／せ給ひけりこのまつよひのしゝうと申は／

まつよひにふけゆくかねのこゑきけはあかぬわれのとりはものかは

とよみたりけるゆへにこそそのなにやかて／めされけれはるかに夜ふけ人しつまりてのち大しやうひやう／てうをねとりすまして／

さうさうかれなんとす虫の思ねんころなり

と云らう／ゑいをしふるき都のあれゆくやうを今やうにこそうたはれ／けれ」（12オ）

ふるきみやこをきてみれはあさか原（ママ）とそあれにける／月のひかりはくまなくてあき風のみそ身にはしむ

とこれ／を二三へんうたひ給ひたりけれは大みやをはしめ参せて／侍従い下の女はうたちみな袖をそぬらされける明けれは大将い／ま（ママ）申て下られけりししうは大将のなこりやたえすおもひ／けん車よせまて立出てはる〳〵みをくり奉りてなみたを／おさへてとゝまりける大将御ともに候ける蔵人をめしてししう／かみをくりて立たりつるにゆきて何ともいひてこよとのた／まへは承りかへり参て大しやう殿の申せと候つるとて／

ものかはときみかいひけんとりのねのけさしもなとか」（12ウ）かなしかるらん／

しゝうとりあへす／

またはこそふけ行かねもつらからめあかぬわかれのと／りのねそうき

蔵人かへりまいりてこのよしを申せはさてこ／そなんちをはつかはしつれとて大しやう大きにかんせられ／けりそれよりしてそ物かはのくらんとゝはめされける／

へいけくわいいの事

さる程に平家の人〻都うつりの後さま〳〵夢見あしくさ／としともゝおほかりけりまつ入道のつほのうちにひさうし／てうへられけ

る五ようの松一夜のうちにかれにけるこそふし」（13オ）きなれ又入道のおはしけるしゆくしよのうしろの松山のかた／に人なら千人はかりのこゑして大木をたをすやうにして一／度にとゝわらふこゑしけり入道ひきめのはんとなつけて／夜三十人ひる三十人六十人のひやうしをすへてひきめのかふ／らをいさせられけるかいおほせたるをおほしき時は音もせす／又すゝろなる時は四方にとゝそわらひけるつねにおはしける／ちやうたいより一間にはゝかる程のものゝおもて出きて入道を／のそきたてまつるある日のまたあした中門にいて給ひて人や／あるとのたまひけれともおりふし人も候さりけるにつま／とをおしひらきてつほのかたをみやりたまひたりけれはしやれ」（13ウ）たるかうへ共か一二千みち〳〵て上なるはしたへいり下なるは／上へいてなかなるははしへなりはしなるはなかへなりころ／ひあひころひのきからめきあふさるかとすれは一に成て／十ちやうはかりもたかくそひえあかる時もあり又すこしに／なるときもあり千万のまなこをもて入道殿をにらみ奉る／入道もさる人にておはしけれはわらはへのめくらへなとする／やうにまたゝきもせすにらまれけれは露霜の日にあたりて／きゆることくにあとかたなくそうせにけるまた十四五の／わらんへを三百人めしあつめてかみをかふろにきりまはさせめし／つかはれける中には天くまきれてあそひけり又一の馬やに」（14オ）ひさうして立られたりける馬のおにねすみかすをくひ一夜の／うちに子をうみたりけるこそふしきなれはとうこくさかみの／国の住人大はの三郎かけちかとう八か国にはふさうのめい馬／とてしんしたりける馬のひたい少しろかりけれはなをもち／月となつけてとねりあまたつきてへんしもはなれすなて／かはれけるむまのおにねすみすをくひ子をうみたりし／にも天下をたやかならすとそ日ほんきにはみえたるま／たふるき都におはしける源中なこんからいの卿のもとに候／けるせいしかみたりけるゆめこそふしきなれ大内のしんきく／はんをとをるとおほしかりけるにそくたいし給へる上らう」（14ウ）のいくらもなみゐさせ給てきちやうなとのやうなる事の有／けるをなに事やらんときくほとにさしやうにおはしまし／ける上らうのゆゝしくけたかき御こゑにてこの年ころ平家／のあつかりたりたるせつとをはいつの国のる人よりともにたふ／へしと仰のありけるとみけるにはつさにおはしましける人の／平家のかたうとするとおほしきをおつたてらるゝと云ゆ／めをみて人にかたる程に入道相国かへりきゝてそれに／ゆめみのおとこの候なる給てゆめのしたいたつね候はんとのた／まひつかはされたりけれはこのおとこやかてちくてんしぬ入道／かさねての給ひけれはからいのきやう身つからはせくたりて」（15オ）またくさる事候はすとちんし申されけれは入道ちからを／よひ給はすかうやの御山におはしけるさいしやう入道このよし／つたへきゝ給ひてすは〳〵へいけのうんめいはすゑになり／ぬるはさ上におはしましける上らうのへいけのあつかりつるせ／つとをよりともにたふへしとおほせの有けるとみけるは／八幡大ほさつにてそおはしますらん又はつさにおはしける人の／へいけのかたうとするとお

ほしきををつたてらるゝとみける／はあきのいつくしまにてそおはしますらんたゝしいつくしま／はしやからりうわうの第三のひめみやにて女神とこそきく／にさやうにそくたひにてみえられけるこそふしんなれとそ申」（15ウ）されけるうきをいとひまことのみちに入人もせんしをきゝ／てはよろこひなけきを聞てはかなしむならひなりふかき／山へ入給ひしこのかた一かうこせほたいのつとめの外にた事／やはあるへきなれとも時にしたかひおりによれはかやうの／事をもの給ひけり平家世を取て二十一年たのしみさかへ／昔も今もためしなかりし事共なりされともはういつしや／けんにおはせしかはいまはせつとをもめしかへされ給ふ／やとあわれなりし事ともなり／

おほはちうしんの事

去程におなしき九月二日とうこくさかみの国の住人大」（16オ）はの三郎かけちかはや馬を立てふくはらへ申けるは伊豆／国の流人さきのひやうゑのこんのすけよりともしうとほうてう／の四郎時まさ以下そのせい五十よきをさしつかはしてさむ／ぬる八月十七日の夜たうこくのもくたいいつみ判官かねたかを／やまきのたちにて夜うちにしぬ同き二十日さかみの国にうち／こえてとひつちやをかさきのもの共つかう三百五十よきにて／たうこくのうちいしはしの山にたてこもりて候しをかけ／ちかむさしさかみ二か国のくむひやう三千よきをもよほし／立て同き二十三日のとりのこくよりをしよせて夜もす／からせめたゝかひ候程にひやうへのすけいくさにまけしうしう七」（16ウ）八きにうちなされてとひのすき山へこもり候ぬおなしき二十／四日にみうらの大すけよしあきらか一たう五百よきにてけん／しかたをしはたけ山五百よきにてみかたを仕りゆゑこつ／ほのうちにてかつせんすはたけ山いくさにまけてむさしのくに／へひきしりそき候ぬはたけ山又江戸かさいしな川のもの／共三千よきをいんそつしておなしき廿六日にみうらのきぬかさ／のしやうにをしよせてさん〳〵にせめ候ぬ子ともまことも／いくさにまけてつかうそのせい三百よきみうらのくりはまの／浦より舟にのりてひやうゑのすけのあとをたつねてあはかつ／さへわたり候ぬとそ申たりけるさる程にふくはらにはへ」（17オ）いけの人〻都うつりもはやけうさめぬわかきくきやう殿上人／やさふらひ共はあはれさらはとくしてことのいてこよかしうつて／にむかはんと云そはかなきそのころ東国の大みやう小みやう大／はんのやくにておりふし都に（ママ）候ひけりむねとの大みやうに／ははたけ山のしやうしけよしかおとゝ小山田のへつたう／ありしけうつのみやのさゑもんのせうともつなぎ入道かれ／らをめしてなんちら源氏にとうしんせしときしやうもむを／して参らせよとの給ひけれは承てかれら七まいきしやう／をかきて奉る時中にもはたけ山きやうたいか申けるはし／たしくなりて候へはときまさなとか事はさためてさそ候らん」（17ウ）しよのものともはいかてかてうてきととうしんをはつかま／つり候へきたゝ今聞召なをさんするものをと申人もあり／いや〳〵大事にをよひぬとさゝやくものもおほかりけり入／道の給ひけるはこのひ

やうゑのすけと云はさんぬる平治に／すてにちうりくすへかりしをこいけのせんにのおりふしの／給ひしによてるさいにしよする所也いつしかそのおんを忘て／たうけにむかひて弓をひきやをはなさむするにこそあんな／れしんめい三ほうもいかてかゆるさせたまふへきたうしこそわう／ゐもむけにかろけれは昔はせんしをむかひてよみけれは／かれたる草木もひこはへとふ鳥もしたかひ奉る中比の事」（18オ）そかしえんきのせいたいしんせんえむに御かうなりて池のみき／はにさきのゐたりけるを蔵人めしてあのさき取て参れと／おほせけれはいかてかとるへきとは思ひけれともりんけんな／れはまかりむかふさきはねつくろひしてたゝんとすせんし／そまかりたつなと仰けれはひらみてとひさらすかれをいた／きてまいりたりけれはなのめならす御かん有てなんしかせん／しにしたかひて参りたるこそしんへうなれやかてしやくをた／まふへしとて五位になさるけふより後はさきの中のわうたる／へしといふ御ふたをさきのくひにつけてそはなさせおはし／ましけるまたくこれはさきの御ようにはあらすたゝわうゐの」（18ウ）程をしろしめされんかためなりきそれてうてきのはしめは／やまといはれひこの御宇きの国なくさのこほりたかをのむら／といふ所に一のくもありあしてなかく身みしかくてちから人／にすくれたり人みんをおほくかいせしかはくわん人はつかう／してせんしをよみかけかつらのあみをむすひてたちまち／にこれををひころすしかしよりこのかたやしんをさしはさむ／もの大いしのやまろゝ大やまのわうしもりやの太臣大とものまと／りそかの入かふむやのみや田たさいの小弐ひろつきさ大臣な／かや右大臣とよなりゑみの大しんをしかついかみのわうこう／さあらのたいしたちはなのいちせい藤原のちうせい平の」（19オ）まさかとふち原のすみともあへのさたたうむねたうたけひら／いへひらつしまのかみ源のよしちかあくさふあくゑもんのか／みに至るまてそのれい二十よ人なりされともいつかはそ／くはひをとけたりしこれらはみなかはねをれうもんけん上／のつちにうつみかうへをこくもんにかけられけりとをくい／てうのせんせうをとふらふに昔えんの大子たんはしくはうてい／にとられていましめをかうむる十（ママ）二年ある時大子たんしくはう／ていに申けるは我ほんこくに老母ありしはらくのいと／まを給てほん国に下りかれをみんとそ申けるしくわうてい／あさわらひてのたまひけるはなんちにいとまをたはん事は」（19ウ）馬につのおひからすのかしらのしろくならんをまつへしとそ／の給ひける時に太子たむ天にあふきちにふしてねかはくは／天しんちきかう〳〵の心さしをあはれみ思召むまにつのお／ひからすのかしら白くなしてたへ本国にかへりてはゝをみん／とそ申けるかのめうをん大しはりやうせんしやうとにけ／いしてふかうのともからをいましめくしかんくはいはしなしん／たむにいてゝちうかうのみちをはしめ給ふみやうけん／三ほうもかう〳〵の心さしをあはれみたまふ事なれは馬／につのおひてきうちうにきたりからすのかしらしろくなり／て庭前の木にゐたりしくはうていをうとうはかくのへんに」（20オ）おとろきりんけんかへらさる事を思召

て大子たむをゆるして／えんの国へそかへされけるしくはうてい大子たむをゆる／して本国へかへされける事を猶ほいなき事に思ひ給ひ／てしんのくによりえんの国へゆく道そこくと申ちあか彼／さかひに大かあり大河のうへにたかき橋ありかしこへさきに人をつ／かはして大子たむかこの橋をわたらん時おとしいるへきはから／ひをせられたりけれはなしかはよかるへき太子たむこの橋を／わたる程に中の程にておちにけりされともしさいもなくて／むかひのきしへわたりつく大子たんふしきのおもひをなして／うしろをかへりてみれはかめのこうにそのりたりけるこれも」（２０ウ）かう〳〵の心さしのふかかりけるによてなりたいしたむ本／こくにかへりて猶うらみをふくみて又したかはすしくわう／てい大きにいかりて四かいにせんしをくたし大子たんをほろ／ほさるへきよしはかり事をめくらされけれはたいしたむ大／きにをそれけいかをはしめとして兵をとゝのへらるこゝに／でんくわうせんじやうと云ものありけいかかれをかたらひ／けれはせんしやう申けるはきりんは千里をとふといへ共／年おひぬれはどばにもおとれりきみはこれ身のわかく／さかりなりし事をおもひてさやうにたのみ給ふか今は年／おひちからおとろへていかにもかなふましつはものをかたらひて」（２１オ）奉らんとてかへりけれはけいかかれかそてをひかへてあひか／まへてこの事天下にもらしたまふなといふせんしやうたち帰／りて申けるは何よりも人にうたかはれぬるにすきたるはち／はなし我もらさすともこの事もし天下にもれなはさため／てうたかはれなむす人の口よりもれぬさきに心やすく思ひ／給へとてやかてけいかさまへなるすもゝの木にかしらをうちあて／てこそうせにけれこゝこにはんよきと申つはものありこれは／もとしんの国のものにて候けるかしくわうていに親おほちき／やうたいをほろほされてえんのくにへにけこもりたりけり／しくわうてい四かいにせむしをくたしはんよきかかうへをはね」（２１ウ）て参らせたらんものには五百こんのきんをあたふへしとひ／ろうせられたりけれはけいかかれかもとにゆき我きくなんな／むちかく（ママ）ひをは五百こんのきんにほうせられたりまことに／なんちしくはうていをほろほすへきこゝろさしならはなんち／かかうへを我にあたへよしくわうていの大りにちさむし／たらんほとにくひしつけんのあらんときつるきをぬいてむね／をさゝむやすかりなむと云はんよき聞もあへすおとりあか／り大いきをついて申ける我しんるいこと〳〵くしくわうていに／ほろほされてよるひるこれを思ふにこつすいにとをりてしの／ひかたしまことになんちしくわうていをほろほすへきはかり」（２２オ）ことならはなむちにあたへん事ちりはいよりも猶かろかる／へしとてみつからくひをかききりてそふしにける又しんふや／うといふつはもの有これももとしんの国のものにて候けるか／十三の年おやのかたきをうちてえんのくにへにけこもりた／りけるかれかいかりてむかふ時は大の男もせつしゆしゑみ／てむかふ時はみとり子もいたかれけるかれ（ママ）にはんよきか／かうへを持せてけいかはえんのさしづのいりたりけるひつ／をもちてはしめてしんの国へそむかひけるさうてんゆるし給

／はねははつこう日をつらぬいてとをらすといふてんへんなり／わかほんいとけかたしとそ太子たんはのたまひける去ほとに」（２２ウ）しくわうの大りにまいりてはんよきかかうへならひにえん／のさしつもちてまいりたる由そうもんしたりけれはしくわう／ていなのめならすよろこひて人してうけとらんとしたまへは／人してはかなふましちきに参らせんと申せはせちえのき／をとゝのへてえんのつかひをめされけりかんやうきうと申／は都のめくりは一万八千三百七十よりとかや大りをはち／より三里たかくつきあけさせくろかねのついちをたかさ／百よちやうはう四十里につかせその中につくられたり／秋はたのむのかりのきて春はこしちへかへるものなれはひ／きやうしさいのさはり有とてついちにはかん門といふ門をあけて」（２３オ）とをされけりしろかねをもて月をつくり金をもて日をつく／れりしむしゆのいさここかねのいさこるりのいさこをしきみ／てりちやうせいてんありふらう門あり三十六宮の中にし／くわうていのすまはれけるてんはあはうきうとてくち六し／やくのあかゝねのはしらをたかさ三十六ちやうに立させ東西へ／九ちやう南北へ五ちやうにつくられけり大ゆかの下には五ちやう／のはたほこをたてたりけるかなををよはぬほとなりきかし／こに玉のきさはしありしんふやうこれを上りけるか心おくして／や有けんひさのふしわな〳〵とふるひてのほりわつらふしん／かこれをあやしみてふやうはむほんの心あり君はけいしんに」（２３ウ）ちかつかすけいしんをは君のかたはらにをかすといひけ／れはけいか立かへりて申けるはふやうえむの国のいやしき／にならひてかゝるくわうきよをはしめてみる間心めいわくす／といひけれは兵をの〳〵しつまりけりまことにそれせきれ／きにならひてきよくゑんをうかゝはさるものはいまたり／れうのわたかまるところをしらすそのへいゆうにならひて上／はうをみたるものはいまたゑいゆうやとれる所をしらすと云／事あれはめいわくしけんもことはりなりさる程にはんよき／かかうへならひにえんの国のさしつをひけんせらるえむのさしつの入／たりけるひつのそこにつるきのこほりなとのことくなるか見」（２４オ）えけれはしくわうてい大きにをとろひてやかてにけんとした／まふをけいかきよいのそてをひかへ奉りてつるきをむねに／あてたり千万のつはものとも庭上に袖をつらぬといへ共／すゝまんとするにちからなしきみきやくしんにをかされ給はん／事をのみそなけきけるしくわうていのきうちうには三千人／のひしんありそのなかにくはやうふ人と申はならひなききん／のしやうすにてそおはしけるしくわうていの給はくねかはくは／我にへんしのいとまをえさせよ今一度さいあいのきさきの／きんをきかんとの給へはゆるし奉る婦人は七尺のひやうふ／をへたてゝきんひかせ給ひけりをよそこのきさきのきんの」（２４ウ）ねにはもの、ふのたけくいかれるもやはらきとふ鳥もおつる／はかりなりいはんやけふをかきりたゝ今はかりのゑいけむに／そなへんとてなく〳〵ひき給ひけんさこそはおもしろかり／けめけいかはやほうしんの心もうせはてぬかうへをうたれ耳／をそはたてゝこれをきくふにんかさねて一きよくをそ

う／せらる七しやくのひやうふはたかくともおとらはなとかこ／えさらん一てうのらこくのそてはつよくともひかはなとかたえ／さらむとそひかれけるけいか聞もしらすしくわうていはき、／しりておはしけれはけいか、ひかへたりける御いのそてをふ／つとひききりて七しやくのひやうふをとひこえあか、ねの」（２５オ）はしらのかけにたちかくれ給ひけりけいかいかりてつるきを／なけかけ奉るおりふしはんのいしかふしよと申か御前に候／けるかくすりのふくろをなけかけたるにつるきはくすりの／ふくろをかけなからくち六しやくのあかかねのはしらをな／からまてこそきりたりけれされ共けいかはつるきかあまた／もなけれはつ、きてもなけすしくわうていひしゆと云つる／きをめしよせてけいかをは八さきにこそさかれけれしんふやう／もうたれぬそののちうてをくたして太子たんをもほろほされ／けりをんをわすれちきりをへんするものは昔もかうこそ有し／かされはいまのひやうゑのすけも思ふにこ、ろにくからすとし」（２５ウ）きたいする人もおほかりけり／

もんかく上人くわんしんちやうの事

そも〳〵このひやうゑのすけといふは年十四と申し永暦／元年三月二十日いつの国ほうてうひるかしまへなかされて二／十年の春秋を、くりむかふ日比もあれはこそありけめいかな／れはことししもか、るむほんを思ひた、れけるそといふに／後日に聞えしはたかをのもんかく上人のす、めなりとそ聞え／けるこのもんかくと申はもとはわたなへたうえんとう／左近のしやうけんもちとをか子えんとうむしやもりとを／とて上さいもんゐんのむしや所の衆なり十九のとしあさからす」（２６オ）思ひける女にをくれてけんこのたうしんをおこし出家入道／して山〳〵寺〻にしゆきやうしけるかちかきころはたかを／のへんにしはらくをこなひてそ候けるたかをにしんこ寺／と云山てらありひさしくしゆさうなかりしかはとひらは風に／たふれむなしくおちはの下にくちのきは、雨にをかされて／ふつたむさらにあらは也もんかくおもひけるはわれたま〳〵／人かいにしやうをうけて出家とむせいの身となれりか、る／ふるきたうしやをこんりうしたらんほとのけんたうのおもひて／何事か有へきしゆさうせはやと思ふ心いてきてくわんしむ／ちやうかきて十方たんなをそす、めけるある時院の御所法」（２６ウ）住寺殿へまいりて御ほうか有へき由を申いれたりけれとも御／ゆうのおりふしなり後日にまいれと仰けれはもむかくこれ／は申とも人かそうせぬそとこ、ろえてもとよりふてき第一／のあらひしりにては候けりやかて御つほの内にやふり入て大し／大ひの君にてわたらせ給ふこれ程の事なとか聞召入さる／へきとてやかてくわんしんちやうをとりいたしたからかにこ／そよみたりけれそのくはんもむにいはく

しやみもん／かくうやまて申／

ことにきせんたうそくのしよしやうをかうふりてたかを／山のしんこしくわうはいをしゆふくし二世あんらくの」

（２７オ）大りをこんきやうせんとこうしやう／

それおもんみれはしんによくわう大にしてしやうふつのけ／み

やうほとこすといへ共ほつしやうすいまうのくもあつ／くおほひ十二ゐんえんのみねにたなひきしよりこの／かたほんかくの月のひかりかすかにしていまた三とく四まん／のそらにあらはれすあゝかなしきかなやふつ日はやくほつして／しやうしるてんのちまたみやう〳〵たりたゝ色にふけりかにふ／けるたれかきやうさうてうえむのまとひをしやせんいたつら／に人をはうし法をはうすあにゑんらこくそつのせめを／まぬかれんをやこゝにもんかくたま〳〵そくちんをうちはらひて」（２７ウ）法衣をかさるといへ共あくこう猶心にたくましうして日夜／につくりせんえん又耳にさかて朝暮にすたるいたましいかな／二たひ三つのくわたくにかへりてなかく四しやうのくりんに／めくらんとこのゆへに無二のけんしやう千万ちくちく〳〵に／ふつしゆのゐむをあかしすいえむししやうのほう一としてほ／たいのひかんにいたらすと云事なしかゝるゆへにもむかく／むしやうのくはんもんになみたをおとして上下しんそくの／けちえんをもよほしふたいのしやうせつに心をはこんてとう／めうかくわうのれいちやうをしゆせんとほつすそも〳〵たか／を山うつたかうしてしゆふうせんの木すゑをへうしたにし」（２８オ）つかにしてしやうさんとうのこけをしくかんせんむせんても／てみゝをあらひれいゑむさけんてえたにあそふしんりん／とをくしてきようちんなくしせきことむなうしてしん／しんのみありちけいすくれたりもとも仏天をあかむへし／ほうかすこしき也たれかしよしやうせさらんほのかにきくしゆ／しやいふつたうくとくたちまちにふつゐんをかんすいかに／いはんや一紙はんせんのほうさいにをいてをやふしてねかはく／はこんりうしやうしゆきんけつほうれき御くわんゑんまんとひ／ゑんきんりみんしむそともにけうしゆんふゐのくはをう／やうりやうしむ（ママ）そくのゆうきこと〳〵く一仏しやうもむ」（２８ウ）のうてなにいたりかならす三しん万とくの月をもてあそはん／よてくわんしんしゆきやうのおもむきたいかいくたんのことし／

治承三年三月日　　しやみもんかくうやまて／申

とそよみあけたる御せんにはめうをんゐんの大政大臣／ひはかきならしらうゑいせさせ給ふあせちの大なこんすけ／かたの卿ひやうしをとてふそくさいはらうたはれけりむま／のかみすけときわこむをしらへ源少将まさかた四位のしゝう／もりさたはいまやうとり〳〵にうたひておもしろかりけれは法皇／も御かんあて御つけうたなともありにしきのちやう玉のすた／れもそよめきわたりけるにもんかくか大をんしやうにてう」（２９オ）しもたかひやうしもはやみなみたれぬ何ものそらうせきなり／ついはうせよと仰出さるゝ程こそ有けれなに事もかなこ／とにあはんと思ふはやりをのものとも我も〳〵とはしり出けう／のひしりかな御ゆうのおりふしにてあるそ後日にまいれと／申せはあなこと〳〵しやたかをのしんこ寺へ国にてもし／やうにても一しよよせさせ給へさらん外はまたくもんかく／出ましとてなをよみかけたりしんへいはんくわんすけ／ゆき文か

くかそくひつかんとてよりけれはもむくわんしんち（ママ）／やうをとりなをしすけゆき判官かゑほうしうちおとしむねを／ついてのけにつきたふすすけゆきゑほうしうちおとされも」（29ウ）と、りはなちてをめ〳〵と大ゆかの下へそにけ入けるもん／かくはつかに馬のおまきたるかたなの七すむはかり有／けるかこほりなとのやうなるをふところよりぬき出しより／こんものをつかんとこそまちかけたれ左の手にはくはんし／むちやうみきに刀をもてはしりまはりけれは思ひもかけ／ぬにはか事にてはありけりさうのてにかたなをもちたる／やうにそみえたりける法皇もゑいりよをおとろかしおはします御／ゆうもはやうちさましぬ御所中のさうとうなのめならすこ、に／しなの、国の住人あんとうのむまの大夫右むねその比はむしや／ところのしゆにて候けるかたちをぬきてつとよる右むねひしりを」（30オ）きりてはせんなしとおもひけれはなをしたちのむね（ママ）にてもん／かくかかたなもちたるみきのかいなをした、かにこそうちた／りけれうたれてもむかくひるむところに右むねたち／をうちすて、つとよてむすとくむもんかくはいたかれなから／すけむねかいなをついたりすけむねはつかれなからそ／しめたるけるすけむねもつよし文かくもつよかりけり／たかひに上になり下になりころひあふところにこ、かしこ／ににけちりたりつるもの共かかうみやうかほにちきりき／さいはうをもちてもんかくかはたらく所をかうしてけりされ共／もんかくはちとも色もへんせすわろひれたるけしきもみえす」（30ウ）いよ〳〵あつこうはうこん共をそしけるたとひほうかをこそし給さ／らめこれ程もんかくにからきめをみせ給ひぬれはたゝ今思／ひしらせ申さんする物を三かいはこれくはたくなりわうくう／とてものかるへからす今こそさやうに十せんていゐにほ／こり給ふともくわうせんのたひにおもむきなん後はこつ／めつのせめはよもまぬかれ給はしものを〳〵とおとり上り〳〵／そ申けるやかてちやうのしもへにたふしもへ七八人してもん／かくをひきはりていてけるかちやうのものはもんかくをひ／きはりていつると思ひけれ共人のめにはちやうのものかもむか／くにみなひきたてられていつるとそみえしやかてこくちやう」（31オ）せられけるしんへい判官すけゆきはゑほうしうちおとされ／めんほくなさにしはらくしゆつしもせさりけりすけむね／はもんかくくんたるけんしやうにたうさに一らうをへすむ／まのせうにそなされける／

もんかく上人流さいの事

その比ひふく門院かくれさせ給て大しやをこなはれける間も／むかくこくをいたされけりその後又たかをのへんにをこなひ／候けるかこりす猶くわんしんちやうをもてありき十方たんな／をす、めいか、おもひけん平家のあたりをとをるとおほ／しきときあはれこの日ころてうをんにほこり候平家の人さ」（31ウ）のた、いまに世のみたれ出きたりてうせはてにあはんする／ものをなとのろ〳〵しき事を申間この法師都のうちに／をきてはあしかりなんをんるせよとていつの国へそなかされ／けるかいたうはかなふまし舟にのせて下せとて伊勢の国／あの、つへいてまかりけるにはうへんりやう三

人をつけられ／たりこれらか申けるはちやうのしもへのならひかやうの事に／つきてこそをのつからゑこも候へいかにひしりの御はうこれ／程うきめにあひてをんこくへなかされ給ふ(ママ)しる人はおは／せぬかとさむりよらうことき物をもこひ給へかしと申も／むかくは東山のへんにこそとくいはもちたれいてさらはふみ」（32オ）をやらんといへはけしかるかみを尋てえさせたりかゝるかみ／にものかくやうなしとてなけ返すそのゝちたうしをたつね／て出したりてんせいもんかくは物をはえかゝぬそさらはなん／ちらかけとてかゝせけるやうは文かくこそたかをのしんこ寺／さうりうの心さしとてすゝめ候つる程にかゝる君の御世に／しもあひ奉りてしよくはんをこそはたさゝらめあまさへきん／こくせられてはてはいつの国まてなかされ候へとさんりよ／らうこときのものたいせつにしこのつかひにたひ候へと書へし／といへはいふかことくかきてさてたれ殿へと書候はんするそと／とへは清水のくわんおんはうへとかけとそいひけるこれは」（32ウ）たゝちやうのしもへをあさけるにこそと申せはさりとては／もんかくはくわんおむをふかくたのみ申たれさらてはたれ／にかようをもいふへきとそわらひけるあのゝつより船をしい／たして下りけるにとをたうみの国てんりうなた九十九ひ／きのこむまかたなと申なんしよをすきけるにおりふし大風／大なみ立てすてに舟をうちかへさんとすすいしゆかんとり／ほをおろしかちをなをせともかなはす舟すてにうちかへさ／んとしけれはすいしゆかんとりともろかひをすてたふれふし／あるひはくわんおむのみやうかうをとなへあるひはさいこの十／念にをよふされとも文かくはちともさはかすふなそこに」（33オ）させんしてこそゐたりけれかんとりともいかにひしりの御はう／これほとに大風大なみにてふねすてにうちかへさむとする／にきやうをもよみねんふつをも申てりうしんにたむけ命／たすからんとは思ひたまはぬそと云けれはもんかくけにもとや／おもひけんふねのへにたて海のおもてをしはしにらまへりうわう／やある〳〵なとこれほとに大くはむをこしたるひしりをはたゝ／今こゝにしつめてみんとはするそ天のせめをかうふらんする／りうわうともかなと申けれは其ことはにやをそれけん／なみ風程なくしつまりてことゆへなくいつのくにへそつ／きにけるもんかく大くわんをゝこす事ありわれ二たひ都にの」（33ウ）ほりてたかをのしんこ寺さうりうすへくはしぬへからすそのく／はんむなしくは道にてしすへしとて都を出しよりいつのくに／へつくまて二十一日ゆ水をたにものみいれすたんしきを／したりけれともけしき少もおとろへすさせんしてこそ／ゐたりけりまこと(ママ)にたゝ人にてはなかりけりとおほゆる事／のみおほかりけりくまのゝなちこもりしたりけるにも十／月上しゆんの事なりけるに七日たきにうたれんと云大くはん／をゝこして一日に三度七日かあひたかたれけるにつゝかなし／いま七日うたれんとて二七日こそうたれけれこれまてもしん／しんさらになやめる心ちもなかりけれはかさねて又一七日う」（34オ）たれけりすてに三七日にまんする朝身すくみちからもよわりてた／きつせにおち入けるをよにあたゝかなる御てをも

ていたき／とゝむるもの有けりもんかくその時に心いてきてゆめのことく／に見奉れはまことにうつくしくかうはしきとうしにてまし〳〵／けるもんかくいかにこれはたそとゝひけれは大しやうふと／う明王の御つかひせいたかとうしとそこたへける明王はい／つくにそとゝへはたうり天にとこたへてかきけすやうにう／にうせにけりかゝるなんきやうくきやうをのみしける間天地／をもうこかし草木をもなひかす程のかうけんにてそ有けるはい／しよの国につきけれはさいちやうこんとう四郎国高あつかりて」（３４ウ）なこやのをかといふ所にそをきたりしそれよりひやうゑのす／けのおはしける所ほとちかゝりけれはつねはよりあひて／京ゐ中の物かたり申てなくさみあはれけりひやうゑの／すけに申けるは平治には小松とのこそ心もかうにさいかくもす／くれてたくひなき人にておはせしか共うんめいすゑになるや／らむきよねんの八月にうせ給ひぬいまは源平両家のうち／をみるに御へんほとしやうくんのさうもちたる人もなく候そ／むほんをこしてへいけをほろほし日本のぬしにならんとは／思ひたまはすやといひけれはひやうゑのすけもとよりしり／よふかき人にておはしけれはそれはおもひもよらぬ事也こいけ」（３５オ）のせんにゝ命をたすけられ奉りしかはまい日法花経を二ふよみ／奉りて一ふをはふもしやうりやう一ふはせんにのためにとゑか／うするより外にたしなしたうしのていにてはいかてかおもひ立／へきとのたまひけれは文かくかさねて申けるは天のあたふ／るをとらされはかへりてそのとかをうく時いたりてをこな／はされはかへりてそのやうをうくと云ほんもむあり文かく／か御へんのために心さしの有なきをはこれにて見給へとてすゝけ／たるぬのゝふくろよりされたるかうへを取出して奉るひやう／ゑのすけあれはいかにとの給へはこれこそ父さまのかみ殿／の御くひにてありしそ平治の比こくしやのへんにうつもれて」（３５ウ）とし月をゝくり給ひしをもんかくそむするむね有てほりを／こしこの十よ年身をはなさす御ほたいをとふらひ奉れは／今はさためて一こうもうかひ給ひ候ぬらんされはもんかくは／こ殿のためにはほうこうのものにてこそ候らめと申されけれ／はひやう衛のすけ一ちやうとはおもはれさりけれ共父のかう／へときくかなつかしさにひたりの袖にうけとりてまつなみた／をそなかされけるその後やう〳〵うちとけての給ひけるはそ／も〳〵よりともる人の身としてちよつかんをゆりすしてはい／かてか思ひたつへきとの給ひけれはそれはもんかくきやう／へ上りて申ゆるして奉らんひやうゑのすけこはいかに御へん」（３６オ）もる人たりなから人のちよつかんを申ゆるさんとの給ふ事／こそ心えねもんかくそれは法師か身をゆるされんと申は／こそひかことならめ御へんのちよつかん申ゆるさんは何かく／るしかるへきこれよりふく原のしんとへ三日ゐんせんうかゝ／はんに一日上下七日八日によもすきしそのほとはまちた／まへとてわかはうにかへりてしともにあひていひけるはも／むかくはいつの御山に七日さむろうの心さしありあひかま／へて人たつぬともしらすへからすとて坊を出て夜を日につ／いて上る程に三日と申とりのこくには福原のしんとにつ

く／さきのひやうゑの守みつよしの卿のもとにいさゝかゆかり有け」（36ウ）れはかしこへおちつきけりもんかく申けるはよりともこそ／ちよつかんをたにゆるされてゐんせんをたにたまはるもの／ならはむほんをこして平家をほろほさむと申みつよし／の卿いさとよたうしは君もをしこめられさせ給て月日のひ／かりたにもはか〳〵しくも御らんせすみつよしも三くわん共／にとゝめられて心くるしきおりふしなりとのたまひけれとも／やう〳〵にすゝめ申さらはとてしのひて御前に参りこの由／を申されけれは法皇聞召てやかてゐんせんをそなされ／けるもんかくかしこまてこれを給て夜を日について下りけり／ひやうゑのすけはあはれこのひしりのなましひなる事し出し」（37オ）て我さへいかなる事にかあはんすらんとあんしつゝおは／しけるに七日と申いぬのこくにいつの国につきにけりす／はやすけとのゐんせんよとて奉るひやうゑのすけなのめな／らすよろこひたまひて手くちをすゝきあたらしきしやう／ゑをきてゐんせんをそひらかれけるそのことはにいはく／

項年よりこのかたへいちわうくはをへつしよしてせいたう／には、かる事なし仏法をはめつしてういをほろほさんと／ほつすそれわかてうは神国なりそうへうあひならんて神／徳これあらたなりかるかゆへにてうていかいきの後す千よさ／いのあひたていゆうをかたふけ国家をあやふめんとするものみな」（37ウ）もてはいほくせすと云事なししかれはすなはちかつは／神道のめいしよにまかせかつはちよくせんのししゆをま／ほりはやくへいちの一るいをちうしてててうかのをんてきをし／りそけよふたいきうせんのひやうりやくをつきるいそほうこう／のちうきんをぬきんて、身をたて、家をゝこすへしていれ／はゐむせんかくのことしよつてしつたつくたんのことし／

治承四年七月九日　　前のさんき光能ほう／

きん上　　さきのひやうゑのこんのすけ殿／

とそなされけるやかてこのゐんせんをはにしきのふくろに入／いしはしかつせんにもくひにかけられたりけるとそ承るさる」（38オ）程にふくはらにはとうこくにせいのつかぬさきにうつてを／くたせとて大しやうくむにはこんのすけ少将これもり中／宮のすけみちもりさつまのかみたゝのり三人つかうそのせい三／万よき治承四年九月十八日にふくはらのしんとをたちてき／うとにつき二十日やかてとうこくへこそうちたゝれけれこんの／すけせうしやうは今年二十三にそなられけるようきたいはい／ゑに書ともふてもをよひかたしよろひかふと馬くら弓矢たち／かたなにいたるまててりかゝやく程にいてたゝれたりしかは／ゆゝしかりしけんふつ也大しやうくむせんちやうへむかふ／に三のそむちありまつちよくめいをかうふるとき家をわすれ」（38ウ）家をいつる時さいしを忘れかたきとたゝかふに身をわする／といへりさためてこれもりもさこそは思はれけめ中にもさ／つまのかみたゝのりねんらい思ひてかよはれける女はうのも／とよりたひのしやうそくををくられけるか千里のなこりを／しみて一しゆの歌をそへられける／

あつまちやくさはをわけんそてよりもたゝぬたもとはな／をそ
露けき
御返事には／
あつまちをなにかなけかんこえてゆくせきをむかしのあ／とゝ
おもへは
せきを昔のあとゝ思へはとよめる事はこの人（39オ）人のせんそ平しやうくんさたもりまさかとついたうのた／めにあつまへ下かうせられし事を思ひいたしてやよまれ／けんいとやさしうそ聞えしてうてきをたいらけにくいと（ママ）／へむかふしやうくんはまつさんたいしてせつとを給る事／ありしんきなんてんに出御なりてこんゑかいかにちんをひき／ないへんけへんの公卿さむれつしてちうきのせちゑをゝこ／なはるされ共治平（ママ）天慶のしようせきは年ひさしくしてなす／らへかたしほり川の天皇の御時さぬきのかみまさもりのいま／たいなはのかみたりし時つしまのかみ源のよしちかついたう／のためにいつもの国へけかうせられしれいとてすゝはかりを」（39ウ）給てかはのふくろに入さうしきのくひにかけさせてこそく／たられけれ去程にへいけは九重のわうしやうをたち千里／のとうかいにおもむく野はらの露にやとをかりたかねの／くもに旅ねをし山をかさね川をへたてゝ日かすふれは十月十／六日にはするかの国きよみかせきにそつき給ふ都をは三万／よきにて出しかとろしのつはものかりくしてつかうそのせい七／まんよきせんちんはかんはらふし川にさゝへこちんはいまたてこし／うつの山にこそみち〳〵たれ少将かつさのすけをめしての給ひ／けるはいそき山をこえて八か国にてのかつせんたるへしとの／たまひけれはたゝきよ申けるは東国は皆草も木もよりとも」（40オ）になひきしたかひて候なれはいかさまにも二三十万きには／よもをとり候はしみかたは七まんよきと申なからあるひは／かりむしや共あるひはさう兵ともにて馬も人もなかたひに／せめつかれて候三かはとをたうみの御せいの参るへきたにも／参り候はすたゝいくたひも山を前にあてゝ御せいをまたせた／まふへくや候らんと申ければせうしやうちからをよひ給はす／さる程にひやうゑのすけよりともかまくらをたちてあしからの／山うちこえきせ川にこそ付給へかひしなのゝ源氏ともはせ／来てひとつになるするかの国うきしまか原にてせいそろへ／有つかうそのせい二十まんきとそ聞えしひたちけんしさた」（40ウ）け太郎かさうしきのしゆのつかひに文もちて京へのほりけ／るを平家の方のさふらひ大将かつさのかみたゝきよこの文／をうはひ取てみるに女はうのもとへのふみなりくるしかる／ましとてとらせてけりたうしかまくらにけんしのせいはいか／程有とかきくとゝひけれは下らうは四五百千まてこそ物／のかすをはしりて候へそれよりうへはしらぬ候四五百千よりお／ほひやらうすくなひやらうはしり候はすをよそ八日九日の道／にはたとつゝひて野も山も海もかはもみなむしやて候きのふ／きせがはで人の申候つるはけんしの御せい二十まんきとこそ／申候つれと申けれはかつさのかみあな心うや大しやうく」（41オ）むの御心のゝひさせ給ひたる程口おしかりける事はなし今／一

日もさきにうつてをくたさせ給ひたらはおほきやう／たいはたけ山か一そくなとの参らて候へきこれらたにまいり／候ははいつするかのせいはみなしたかひつくへかりつる物を／とこうくはいすれ共かひそなきむさしの国の住人なかゐのさ／いとうへつたうさねもりはへいけのかたに候けるを今度東／国のあんないしやにめしくせられたり少将さねもりをめして／のたまひけるはとうこくになんちほと大矢いるものいか／ほとかあるさねもり大きにあさわらひて申けるは君はさね／もりなとを大矢仕るとおほしめされ候か真守はわつかに十四五」（41ウ）そくをこそ仕り候へとうこくに大やと申ちやうのもの十五そ／くにおとるは候まし弓は四人五人なとしてはり候かゝるつよ弓／大やをもてい候へはよろひの二三りやうもいとをし候大みやう／と申ちやうのものゝ五百きにおとるは候まし馬にのるに／おつるみちをしらすあくしよをはするに馬をたふさす西／国ふしきないのものともこそいくさをし候に親うたるれ／は子はひきしりそきいみあきてのちよせ子うたるれは／おやはしりそきけうやうして後よせ夏はあつしときらひ／冬はさむしといひやう（ママ）らうつきぬれは田つくりかりおさめて／のちによせ候へとうこくにはまたくそのき候ましおやうたれんと」（42オ）すれは子はさきにしなんとすゝみしうかけんとすれはらうとうは／まつさきにふさかるおやもうたれよ子もうたれよし人をのりこえ／〳〵たゝかひ候ふしのこしよりからめてさためてまはり候らん／かく申はきみををくせさせ参らせ我ほんこくをほめて申／にては候はすよく〳〵御ようい候へしとおひたゝしけに申／たりけれは平家の兵とも色をうしなひてそ候けるさる／にてもいくさはこんみやうのほとにてはよもあらし今夜は／たひのなこりをおしめやとてそのへんちかきしゆく〳〵よりゆう／くんゆうちよともむかへてあるひはかふとをふせてまくらに／しよろひの袖をかたしきてせんこもしらすそふしたりけるを」（42ウ）のつからせんちんはかりそようしんをもしけるさいとうへ／つたうさねもりはこれをみて今度のいくさのていはか／〳〵しからしとや思ひけん又家のなをおしとやおもひけん／てせい五十よきをひきくしてさきに都へ上りけり少／将これを聞給ひよし〳〵さねもりかなき所にてはいくさは／せられぬかとそのたまひけりさるほとにひやうゑのすけは十／八万きのせいにてさかみの国かまくらをたてあしからをこそこ／えられけれかい源氏へんみたけたおかさはらなんふいたかきこ／れも一まんよきにてふしのこしよりからめてにこそまはりけれ／しなの源氏大うちひらか井上たかなし木曾のくはんしやこれも」（43オ）一万よきにて山のねをつたひひやうゑのすけのせいにくはゝるほ／となく二十まんきになりにけり／

平家くわんとうよりにけ上らるゝ事

おなしき二十三日のうのこくにふし川にて源平たかひにやあ／はせとさためたりけるその夜はんはかりにふしのぬま（ママ）／いくらもおりゐたる水鳥とも何にかおとろきたりけん千まん／たつ羽をといかつちなとのことくにおひたゝしくそ聞えける／平家の人さあはやけんしは夜うちをこのむときくにたか／はすたゝいまよせたるはさいとう

へつたうか申つるやう／にふしのこしよりからめてさためてまはり候らん我らふあん」（43ウ）ないにてとりこめられてはかなふましこゝをはひきしりそき／すのまたをふせけやとてとる物とりあへす我さきにとに／けのほるかふときるものはよろひきすたちとるものは刀／とらすゆみとるものはやを忘れゆみ一ちやうに二三人たち一／ふりに一二人とりつきてうはひあひわか馬をは人にのられ／人の馬をわれのりあるひはつなきたる馬にのりてはすれは／うて共あふれともくいをめくる事かきりなしあまりにあはてた／るものはさかさまむまにのりたりけれはぬしは西へと心させ共／馬は東へはするもあり何よりあさましくみえしはそのへんち／かきしゆく〳〵より遊君ゆうちよともむかへたりけるかさうとう」（44オ）にあるひはかしらけわられあるひはこしふみおられおめきさけ／ふ事なのめならす同き二十四日のうのこくにひやう衛のす／けふし川にをしよせて時をつくられけれ共へいけ音もせす／こはいかにとて人をつかはしてみせけれはかたきはおちて候／けるとてすてをきたる大まくとつて参りたるものも有よ／ろひとりてまいりたるものもありかたきのちんにははひだにも／かけり候はすとて一とうにとゝそわらひけるひやうゑのすけ／むまよりおりかふとをぬいて都の方を三度ふしおかみまたく／これよりともかうみやうにあらすたゝ八まん大ほさつの御は／からひなりとその給ひけるやかてつゝきてもせむへけれとも」（44ウ）はんとうもおほつかなしとてそれよりかまくらへそひきかへ／されけるへいけはたゝにけにして京へのほるかいたうのゆう／くんなとか申けるはあなあさましやせんちやうへむかふう／つての大しやうくんのや一すしもいすしてにけ上る行末の／たのもしからすさよ見にけと云事はあれとも聞にけと／いふ事はいまたなし中にもかつさのすけふし川原によろひ／をわすれにけのほりたりけれはたゝきよといふみやうしをとりて／

ふしかはによろこひはすてつすみそめのころもたゝきよ／のちの世のため／

たゝきよはにけのむまにそのりてけるかけぬにおつる」（45オ）かつさしりかひ／

ふしかはのせゝこすいはの水よりもはやくもおつるいせ／へいちかな

うつての大将をはこんのすけといひ都の大将を／はむねもりといふ間へいけをひらやとよみなして／

ひらやなるむねもりいかにさはくらんはしらとたの／むすけをおとして

入道さいあいのまこにておはしけれとも／こんのすけをはきかいかしまへなす（カ）へしたゝきよをはくひ／をきらんとのたまひか（シ）とも人〳〵やう〳〵に申されけれは／ちからをよひ給はすおなしき十一日これもりさこんゑの中／将になり給ふうつての大しやうのしいたしたる事もなくて」（45ウ）こはなにのけんしやうそやと申されけれは昔たはらとうた／ひてさと平しやうくむさたもり二人の人〳〵まさかと／ついたうのためにはんとうへ下られたりしにまさかとほ

ろ／ひかたき所にうちのみんふきやうたゝふむきよはらの／しけふちくむけんと云くはんを給て関の東へおもむく／するかの国きよみかせきにしゆくせられたりけるにしけふち／まん〳〵たるかいしやうをゑんけんしてきよしうのひかけさむ／くして波をやくゑきろのすゝのこゑはよる山をすくとたうか／をくちすさみ給へはたゝふんゆうにおほえてかんるいをそな／かされけるさてまさかとをはさたもりひてさとつゐにうつとつて」（46オ）けりそのくひをとりて都へ上るほとにするかの国にてゆき／あふたりそれよりせんこの大将くむうちつれて上らくすさ／たもりひてさとにけんしやうをこなはれけるにたゝふむし／けふちにもけむしやう有へきかと公卿せんき有けるに九／てうのゆうせうしやうもろすけこうの申されけるは仰をか／うふりてはんとうへむかふたりと云ともまさかとほろひ／かたきゆへにこのともからかさねてせきの東へおもむく時／まさかとたやすくほろひたりこれらにもなとかけんしやうな／かるへきと申されけれはその比のしつへいをのゝ宮とのう／たかはしきをはなす事なかれとらいきのもんに候へはとてつゐに」（46ウ）をこなはれさりけれはたゝふん口おしき事にしてをのゝみや／殿の御末をはやつこにみなさん九てうとのゝ御すゑにはいつの／世まてもしゆこしんとならんとちかひつゝひしにゝこそした／りけれ扨こそ九てう殿の御すゑはめてたくさかへさせ給へ／ともをのゝみやとのゝ御すゑはしかるへき人もましまさすたえ／はて給ひけるとかや去程にふくはらには五てう大なこん／くにつなの卿きら〳〵しく里たいりつくりいたしてせんかう／なし奉るたゝしこの都は北は山にそひへてたかく南はうみ／ちかくしてくたれり波のをとつねにあらまし（ママ）くしてしほ風は／けしきところなり大りは山の中なれはかの木のまろとのも」（47オ）かくやとおえ*ホてなか〳〵ゆうなるかたもあり家〳〵は野中田／なかなりけれはあさの衣うたね共とをちのさとゝもいひつへし／

大しやうゑの事

ことしは大しやうゑ有へしとそ聞えける大しやうゑと申は／十月の末に東かはらにみゆきなりて御けいあり大たいのき／たのゝにさいしやうしよをつくりてしんふくしんせんをとゝ／のふ大こくてんのまへれうひたうのたんかにくはいりうてんを／たてゝ御ゆをめすおなしきたむのならひに大しやうく／うをつくりてしんせんをそなふしんえんあり御ゆうありせい／しよたうの御かくらありしかるを福原のしんとには大こくてん」（47ウ）もなけれは大れいをこなわるへきところもなしふらくゐん／もなけれはえんくはいもをこなはれすせいしよたうもなけ／れは御かくらもとけらす*レことしは五せつはかり有へしとしよ／きやう申されたりけれともしんしやうのまつりは猶きうと／のしんきくわんにてそとけられける五せつはこれきよみはら／の天皇の大ともの王子におそはれさせ給ひてやまとの国／吉野の宮にすませ給ひしに月しろく嵐はけしき夜みかと／御心をすまさせたまひてきんをしらへ給ひしにしんちよた／ちまちにあまくたりて／

をとめこかをとめさみしもからたまのそのからたまや」（４８オ）からたま

と五たひこれをうたひ五たひ袖をひるかへす／これそ五せつのはしめなる／

平家みやこかへりの事

今度の都うつりの事をはきみもしんもなけき思召されけ／るうへ山門なんとをはしめとしてしよ寺しよしやの寺僧しん／くはんしよ国七たうのにんみん百しやうらにいたるまてうれ／へ申しかはさしもよこかみをやられける太政入道とのも／第三かとのそうしやうにたうりしこくしてやおもはれけん同／き十二月十日都かへり有へしとそ聞えけるさんぬる夏み／やこうつりありしにいつしかみやこかへり有しかはりやうゐんは」（４８ウ）六はらへいらせ給ふきやうかうは五てうたいりへなる入道相／国已下のけいしやううんかく一人ものこらすかへりのほられ／けるうへはましてたけの人ゝたれか心うかりつるふく原の／しんとに一日もとゝまるへきならねはわれさきにとそ上ら／れけるいへ〳〵をはさんぬる夏ふくはらへはこひ下してかた／のことくとり立られけれ共何事のさたにもをよはすうち／すてゝそ上られけるをの〳〵しゆくしよもなかりけれはある／ひはやはたかもさかうつまさ西山東山のかたほとりにつきて／御たうのくわいらう社のはいてんなとにたちやとりてそ然へ／き人〳〵もおはしけるそも〳〵都うつりのほんいをきけはき」（４９オ）うとは山門南都ちかくしていさゝかの事もあれはかすか／の神木をさゝけて上らくし日吉のしんよをさゝけてしゆ／らくする間ふくはらは程もはるかにとをしみちもたやすから／ねはさやうの事もややむとて入道はからひいたされけると／そ承る／

なんとめつはうの事

さる程に南都の大しゆ高倉の宮の御むほんとうしんによ／りてへいけのうつふむいまたやますこれにようてむねとの／ちやうほんをめされ大衆大きにいきとをりてみやこよりの御／つかひをさん〳〵にれうりやくしてをひ上すせつしやう殿よ」（４９ウ）り大しゆしよそむあらはそうもんにをよふへしと仰けれ／はたゝきよもり入道にあひてしなんとそ申けるこれによりて／右官の別当蔵人のゐもんのすけちかまさ南都しつめにとて／下されけり大しゆこつ川のはたにゆきむかひてちよくしに／さむ〳〵のちしよくをあたへてをひのほすあまさへくはんかく／ゐむのさうしき二人かもととりきる御つかひちかまさかも／とゝりもきれやとのゝしりけれはちかまさ色をうしなひ／てにけのほるそのゝち大しゆいよ〳〵ほうきして法しはらに大な／るきちやうの玉をつくらせこれはきよもり入道かかうへと／なつけてうてふめなとそ申ける又八しやくはかりに人かたを」（５０オ）つくりならさかはんにや寺の大そとはにくきつけにしてこれは／きよもり入道をはつけにするなときくもいま〳〵しくおそろし／かりし事共をしけりかたしけなくも君の御くはいそにて／まし〳〵太政大臣まてきはめ給へる人をかやうに申事ひ／とへになんとの大しゆにはてんまの入かはりたりとそみえ／し事のもらしやす

きわさはひをまねくなかたち也事のつ／つしまさるはやふれをとるみちなりとはかやうのことを／や申へき太しやう入道ひちうの国の住人せのをの太郎かねや／すをやまとの国のけひいし所にふして下されけるかはかり／ことになんちら物のくもすへからす弓矢うち物もたいすへから」（５０ウ）すとの給へは承て五百よきにてむかひけるか皆しらしやうそ／く也大しゅ又ゆきむかひてかねやすかせい五百よきをさんさ／むにけちらしあまさへ六十よ人かくひをきりてさるさは／の池のはたにそかけたりけるへいけかやうの事共を何かは／よしと思はるへきさらはなんとのしゅとをもついたうすへし／とて大しやうくむには入道の四男くらんとのとうしけひら／おひに中宮のすけみちもりおとゝにさつまのかみたゝのりさふら／ひ大しやうにはかつさのかみたゝきよかつさの太郎判たゝ（ママ）／つなひたのかみかけいへその子のたゆうはんくわんかけたか／むさしの三郎さゑもんのせうありくにをさきとして都合」（５１オ）そのせい四万よき治承四年十二月十八日になんとへはつ／かうせられけりなんとにはならさかはんにや寺二のみ／ちをきりふさきざい〳〵しよ〳〵にやくらをかきかいたてか／いて二かしは（ママ）のしやうくはくにらうせう七千よ人たてこもる／へいけをしよせてせめられけりくはんくんは四万よきつ／よ弓せいひやう馬むしやともかかけまはり〳〵さしつめさん／〳〵にいける大しゅ七千よ人うち物かちたちなりけれはその／日一日たゝかひくらし夜に入けれはならさかはんにや寺二か／しよのしやうくわくやふれにけりはちをも思ひなをおし／む大しゅはならさかにしてうちしにしはむにや寺にしてしか」（５１ウ）いしぬきやうふもかなはぬしゅかくしやらあゆみもやらぬらう／僧ともはにはか（ママ）にいておほく命をうしなひけりこゝにお／ち行ける大しゅの中にさかの四らう房やうかくと云あくそう／有ゆみやを取てもうちものもても七大寺十五大寺に聞え／たりもえきおとしのはらまきにくろいとおとしのよろひかさねて／きほうしかふと同くかさねてきるまゝにかた手には三尺／八すむのたちをぬきかたてにはしらはのなきなたのさやは／つし我にをとらぬてしとうしゅく前後さうにたてゝてかいのもん／よりうち出西へむけてしはらくさゝへたりけるにそ馬の／あしなかれてくはんくむおほくほろひけるされとものみき」（５２オ）りたりけるてしとうしゅく十よ人もみなうたれぬわか身もう／すておひけれはかなはしとや思ひけん大せいの中をうちやふり／て南をさしてそおちゆきける此は十二月二十八日やはん／はかりの事也けれはくらさはくらしかたきもみかたもみえ／わかす大しやうくんしけひら法花寺のとりゐのもとにうつ／たちて火をいたせとけちせられたりけれははりまの国の住／人ふくいのしやうのけし二郎大夫ともかたと云ものたてをわ／りたいまつにしてかいの門の西なるさいけにひをそかけた／りける火もとはひとつなりけれ共ふきまよふ風におほくの／からんにふきかけたりたうしやたうへうふつかくかうはう（ママ）一」（５２ウ）宇ものこらすふけさう（ママ）きやうくはんほつさう三ろんのほう／もんしやうけう一くわんもまたからすくわろく（ママ）のさいちをは／らひてかんやう一てうのけふりを

なすじんしやうなるちこ女／はうあるひはたうそくらうせういくらといふかすをしらすあ／るひは山しなてらあるひは東大しへにげこもる大仏殿の／二かいにも男女二千人はかりにけ上りてかたきを上せしとはし／をやかてひかせけりさりとともとおもひけれともみやうくわ／まさしくをしかけたりをめきさけふこゑけうくわん大けうく／わむせうねつ大せうねつむけんあひのほのをのそこのさい人も／これにはすきしとそみえしこうふくしはたんかいこうの御く」（53オ）はんとうしるいたいの寺なりとうこんたうにおはします仏法／さいしよのしやかのさうさいこんたうにおはしますしねんゆ／しゆつのくはんせをんるりをならへし四めんのらうしゆた／むをましへし二かいのろう九りんたかくかゝやきける二きの／たうもたちまちにけふりとなるこそかなしけれ東大寺は／しやうむくわうていのしやうさいふめつしつほうしやつくわう／しやうしんの御ほとけとおほしめしなすらへて手つから身／つからいたてまつらせ給ひしこんたう十六ちやうのるしやな／ふつうしつたかくあらはれてなかそらのくもにかくれひやく／かうあらたにみかゝれ給ひしまん月のそむようも御くしはや」（53ウ）けおちて大地にあり御しんはわきあひてつかのことし八万四千／のさうかうは秋の月のはやく五ちうのくもにおほれ四／十一ちのやうらくはよるのほしむなしく十あくの風にたゝ／よひけふ（ママ）は中天にみち〳〵てほのほはこくうにひまもなし／まのあたりみたてまつる人はさらにまなこをあてすはる／かにつたへきくものはきもたましゐをうしなへりわかてう／は申にをよはす天ちくしんたんにもこれ程のほうめつは／ありかたしほんしやく四わうりうしん八ふみやうくわんみや／うしゆもさためておとろきさはきたまふらんとそみえしほつ／さうおうこの春日大明神いかなる事をかおほしめされけんしん」（54オ）りよの程もはかりかたしされはかすかのゝ露も色かはり／みかさ山のあらしのをとまてもうらむるさまにそきこえける／同き二十九日くらんとのとうしけひらなんとほろほし北京へ／かへりのほりたまひけりせんしやうにしてうたるゝ大しゆ／三千人やけしぬるものかすをしらす大ふつてんの二かいにも一／千よ人やましなてらに六百よ人ある寺に三百よ人つふさに／しるしたれは已上四千よ人とそ聞えけるちやうほんのしゆと／のくひを大ちをわたしこくもんにかけらるへしとさたあり／しかともなんとほろほしたるめんほくなさにこくさうゐん／のみなみなるほりやみそにそすてられける入道相国はかりこ」（54ウ）そいきとをりはれておもはれけれ一ゐんせつしやうとの、／御なけき申もをろかなりたとひあくそうをこそほろほ／すともからんをはめつすへしやとそ御なけきありけるさ／れはしやうむくわうていのしんひつの御きしやうもんにもわか／てらこうふくせはてんかもこうふくせん我寺すいひせは／てんかもすいひすへしとあそはされたるにいまはか／やうにちりはいとなりぬるうへはこくとのめつはうも／うたかひあらしとそみえしさるほとにうかりしとしも／くれ治承も五年になりにけり／

平家物語巻第五終　」（55オ）

（空白）」（55ウ）

平家物語巻第六目録

はつねのそうしやうの事
なんとのそうかうけくわんの事
たかくらのゐんほうきよの事
あふひのまへの事
こかうのつほねの事
大政入道殿御むすめ法皇へ参らせらるゝ事
きそのよしなかむほんの事
たいしやう入道せいきよの事
きをん女御の事
五条大なこんくにつなのきやうたかひの事
ほうわう法住寺とのへしゆきよの事
とうこくいくさの事
こうふくしむねあけの事
きやくしやうしゆつけん事

（以下、五行分空白）」（1ウ）

平家物語巻第六

はつねのそうしやうの事

治承五年正月一日あら玉のとしたちかへりたれともとうこ／くのひやうらん南都のくわさいによつて大りにはてうは／いとゝめられて主上しゆつきよなしとうしのくきやう一人も／参られす二日殿上のえんすいもなしふかくもそうせす吉／野のくすもまいらす男女うちひそめてきんちうの有さまさ／ひしうそみえし仏法王法ともにつきぬる事そあさましき／新院の御所にもつねは御なうと聞えさせ給ひしかはなにこ／との御さたにもをよはす法王もない〳〵おほしめされて万」（2オ）せうのほうゐをたもつ四代のていわうをおもへは子なりまこ／なりいかなれは万きのせいむをとゝめられてとし月をゝくる／らん心うしとそおほしめしける中にもこうふく寺の別／当けりんゐんのそうしやうやうゑんはほうもんしやうけう／のけふりとなるを見給ひしよりやまひつきていくほとなくて／うせられぬこのそうしやうと申はやさしき人にてそおはし／けるあるときほとゝきすのなくをきてゝて／

きくたひにめつらしけれはほとゝきすいつもはつね／のこゝちこそすれ

とよまれけれは人はつねの僧正とそ申ける／

なんとのそうかうけくわんの事」（2ウ）

おなしき四日なんとのそうかうくしやうをとゝめてけくはん／せらるしゆとはわかきもおひたるもあるひはうちころされあ／るひはやきころされたま〳〵残りとゝまりたるもみなさんり／むにましはりてあとをとゝむるもの一人もなしされともかた／のことくにても御さいゑはをこなはるへきにてそうみやうの／さたありしかともなんとをはけくはんせられぬされはてん／たいしうの人はかりをしやう

せらるへきか又御さいゐをゐんいん／せらるへきかとさたありしかなんとをはいかてかすてら／るへきとて三ろんしうのかくしやうしやうほういかうとて／くわんしゆしに候ひけるをめされてかたのことく御さい」（3オ）ゐもとけられけり／

たかくらのゐんほうきよの事

新院は去ゝ年の冬ほうわう鳥羽とのにをしこめられ／させ給ふときこしめされしよりつねは御なうと聞えさせ給／ひしか又とう大こうふく両寺やけぬときこしめして御なういよ〳〵／おもらせ給ひておなしき十四日に六はらいけとのにてつゐに／ほうきよならせたまふやかてその夜東山せいかん寺にをくり／奉りて夕のけふりにたくひつゝ春のかすみと立そのほる／せ給ひける御としわつかに廿一にならせおはしましける八／さいより御くらゐにつかせ給しかは御宇十二年とくせい」（3ウ）千万たんししよしんきのすたれたるみちをゝこしりせいあ／むらくのたえたるあとをつき給ふしひのめくみは一天の下を／はくゝみひやうとうのいつくしみは四かいのほかうにかれき／三みやう六つうのらかんもまぬかれすけんしゆつへんけの／こんしやものかるる事なきみちなれともうむしやうのかなし／みはことはりすきてそおほえけるれいぎもよくしろ／しめされてくもりなきかゝみにてわたらせ給ひつる物をとて／世のおしみ奉る事たゝ月日をうしなへるかことしまして法皇／の御心中さこそはおほしめされけめ人のしたかひつき奉る／事もをそらくはゐんき天暦の御門もこれにはいかてまさら」（4オ）せ給ふへきとそ人申ける御ついかうをは高倉院とそ申す／大方はけんわうのなをあけしんとくのかうをほとこさせお／はしますも御せいしんの後せいちよくをわかたせ給てのうへ／の事にてこそあるにこの君はむけにようちにわたらせ給ひ／しよりせいをにうわにうけさせおはします承安のころほ／ひは御さいゐのはしめつかたにて御としわつかに十さいはかり／にやならせおはしましけんことに紅葉をあひせさせおはし／ましけるにはしやかえての色うつくしくもみちしたり／けるか参りたりけれはなのめならすよろこはせ給て北のちん／に小山つかせこれをうへさせつゝもみちの山となつけてひね」（4ウ）もすにゐいらんあるになをあきたらせおはしまさすしかる／をある夜あらしはけしくふきて紅葉みなふきちらし落は／すこふるらうせきなりとのもりのともものみやつこあさきよめす／とて是をこと〳〵くはらひすてのこれる枝ちれるこのはをか／きあつめて風すさましき朝なれはぬいとのゝちんにてさけ／あたゝめてのみけるたきゝにこそはしたりけれ大せんの大夫／なりたゝいまた蔵人にて紅葉のふきやう承りて候けるか夜／のまのあらしうしろめたくて行幸より御きにといそきま／いりて見けれはもみちは一もなしなりたゝいかにとゝひけれ／はしか〳〵と申なりたゝ大きにおとろきてしらすなん」（5オ）しらきんこくるさいにもあたりなりたゝも又いかなるけきりむ／にあつからむとをそれおのゝく所に主上いとゝしく夜の／おとゝをいてさせ給てかしこに行幸なりてゐいらんあら／むとするにあとかたもなしなりたゝにいかに御たつねあり／けれはそうすへきやういかにと

ありのまゝにそ申ける天き／ことさら御心よけきうちゑませ給ひて林間にさけをあたゝ／めてこうようをたくと云しの心をはされはかれらにはたかを／しへけるそややさしくも仕りたるものかなとかへりてゑいかむ／にあつかしうへはあへてちよくかんもなかりける又安／元ゝ年の冬の末にしゆしやうある所へ御方たかへの行幸あり」（5ウ）けるにさらてたにならはぬはぬ御たひねなるけいしんあかつきを／となふこゑめいわうのふりをおとろかす程にも成にしかはしゅ／しやう御ね覚かちにてうちとけ御しんもならさりけりい／はんやさゆる霜夜の冬の空雪ふりあらしはけしきときは／えんきせいたいの国との人民ともかかんきにとちられてい／かにさむからんとおほしめしやらせおはしまし御衣をぬかせ／給ひて夜のおとゝよりをし出させ給ひし御事まてもおほ／しめしいたさせ給ひて我ていとくのいたらぬことをなけきま／おほしめしたる時しも程とをく女のさけふをとのしけるを人／〳〵は聞もつけられさりけるをしゆしやうきこしめしてたゝ」（6オ）今さそふものはなにものそきとみて参れと仰せけれはうへ／ふしたる殿上人上日のものをつかはさるはしりちりて見け／れはあるつしにあやしのめのわらはのなかもちのふたをひ／きさけたるかなくにてそありける立よりていかにとゝのへは／しうの女はうのやう〳〵にしてしたてられて候つる御しやうそく／をもちて御しよへ参る程に只今おそろしけなるおとこか／二三人きたりてうはひ取てまかりぬるそや今ははか〳〵しく／立いらせ給ぬへき御したしき人もおはしまさす御しやうそく／かさふらはゝこそ御しよにもさふらはせたまはめこの事を／思ふにせんかたなくてなくなりとそ申ける上日ものかの」（6ウ）めのわらはをめしくしてこのよしを申しゅしやうきこし／めしあなむさんやなにものゝしわさにてかありつらん昔／のけうの代のたみはけうの心をもて心としけるゆへにみなす／なをなりきいまのちんか代にはちんか心をもつて心とするゆ／へにかたましき物のてうにありてつみをゝかすこれわかは／ちにあらすやとそ仰せけるさてそのとられたりけるきぬは／なにいろにかと尋させらるれはしか〳〵と申中宮の御かた／にさやうの色したる御いや候と申させ給ひたりけれはは／にうつくしきか参りたりけるをめのわらはにくたしたま／はすとていまた夜ふかし猶もやさやうのめにもあふとて」（7オ）上日のものあまたつけさせおはしましてしうの女はうのつほ／ねまてをくらせ給ひけるそかたしけなきされはあやしのしつ／のおしつのめにいたる迄たゝこの君の千しう万せいのほうさん／をいのり奉る／

あふひのまへの事

なによりも又いふにあはれなりし御事は中宮の御かたに／さふらはれける女はうのめしつかはれけるかうへわらはにあふ／ひのまへと有けりたゝあからさまの事にてもなくて／しのひてめさるゝことあまたたひになりけれはしうの女はう／もめしつかはすかへりてしうのことくにそもてなける其」（7ウ）かみようゑいにいへる事あり男をうみてもかくわんする事／なかれをんなをうんてもひさんする事なかれ又いはくなん／はこうにたにもほうせすをんなはきさきと

なると申は此／人いかさまにも女御きさきこくもせんゐん共あふかれなん／すめでたかりけるさいわいかなあふひのまへと申せは人是／をあふひによこなんとそさゝやきけるしゆしやう此事を／聞召てそののちはあへてめされさりけりまたく御心さし／のつきさせ給へるにはあらさりけりたゝ世のそしりを思召はゝか／らせ給ふによてなりされは御ねさめかちにてそあかさせお／はしましけるそのときの関白まつとのこのよしをきこしめし」（8オ）てさては御心くるしき御ことにこそあるなれ参りて申なく／さめんとていそきさんたいありてきやうにゐ（ママ）いりよにかゝ／りおほしめされん事をは御はゝかりありてなにのせんか／候へきたゝくたんのしんをめさるへしそくしやうたつねら／るゝにをよはすやかてもとふさかゆうしに仕るへきよし／申させ給けれは主上仰せの有けるはまことにはからひ申／さるゝ事なれともくらゐをしりそひてのちこそまゝさるた／めしもありけるなときこしめせまさしくさいゐの時あこめ／なと云てすそもなきとのきたるものなとをめさるゝ事は／れいなしされはわかよにはしめむ事うそたいのそしりな（ママ）」（8ウ）るへしとてつゐにきこしめしも入させ給はねは関白殿ちか／らをよはせたまはす御なみたをゝさへて御たいしゆつあり／しゆしやうそのうろなにとなき御てならひのついてにおり／ふしおほしめしあはせてふるきうたをそあそはしすさは／せ給ひける／

しのふれと色に出にけりわかこひはものやおもふと人／のとふまて

御心しりの殿上人を給てあふひのまへにたま／はせけれはかほうちあかめたもとにひき入しかれいならぬ心／有とてつほねを出里にかへりてうちふす事十よ日有て／この御しよをかほにをしあてゝつゐにはかなくなりにけり」（9オ）しゆ上聞召て御なけきあさからさりけるとかやきみ一しつの／をんのためにせうか百年の身をあやまつともかやうの事を／や申へきかのたうの太そうのていしんきかむすめをけんく／はてむに入しめ給はんとせし時きてう申ていはくすてにり／くしにやくせりといさめしかはめさるゝ事をやめられけん／には猶まさらせ給へる御心はせかなとそ人〻みな申ける／

こかうのつほねの事

又その比さくらまちの中納言しけのりのきやうのむすめこ／かうのとのとてかたちもすくれくわんけんのみちもたへなる／人きんちうにさふらはれけりれんせいの大納言たかふさの」（9ウ）きやうのいまた少将にておはしけるとき見そめたりし人なり／はしめはうたをよみ心をつくし年月こひかなしまれけれとも／ない〳〵（ママ）けしきもなかりしかなさけによはる心にやつゐに／なひきたまへり少将わりなき御心さしにてかよはれけるにいく程／なくてうちへめされ参らせられぬと聞てせんかたなくかなしさ／にあかぬわかれの涙には袖しほたれてほしあへすせうしやう／もしよそなからたにみるたよりもやとつねはその事と／なくさむたいせられけりこかうのとのゝおはしけるつほねの／あたりをかなたこなたへとをりたゝすみありかれけれとも／つてのなさけをたにもかけられす一しゆのうたをかき

てみ」（１０オ）すのうちへなけいれられける／
おもひかね心はそらにみちのくのちかのしほかまち／かきかひなし
こかうのとのかやうにきみにちかつき参らせ／なんうへはいかてか又人にことのはもかはしいらへをもすへき／とてふみをは上わらはにとらせつゝみすのほかへそなけ／いたされけるなさな（ケ）くもうらめしくもおほされけれとも／人めもさすかそらおそろしくていそきこの文をとりふとこ／ろにひきいれてつ（ママ）ゝいてられけるかさるにてもとて又立／帰り／
たまつさをいまは手にたにとらしとやさこそ心に」（１０ウ）
おもひすつとも
今は今生にてあひみん事もかたけれはいき／てゐて人をこひしとおもはんよりもたゝあらぬよにもかなと／そおもはれけるあふてあはさるこひもありあはぬにふかき／うらみもありあはぬか思ふこひよりもあふてあはさるうらみ／こそせんかたなくは思はれけれこのせうしやうと申も入道／相国のむこなり又中宮大りにわたらせ給ひしかは入たう／かた〳〵やすからすおほしいや〳〵このこかうのつほねか／あらんにはよかるましされは此しんをうしなはんにはとそ／の給ひけるこかうのとのこのよしをわ（ママ）か身のいかにもなら／んはとてもかくてもありなん君のためこそ御心くるし」（１１オ）けれとてある夜たいりをはしのひつゝまきれいて行ゑもし／らすうせられけりしゆしやうつねは御なかめかちにて夜のお／とゝのみにそおはしましける入道相国このよしを聞給ひて君／はこかうか事におほしめししつませ給はさんなるさらんに／をきてはちかくさふらはるゝ女はうたち一人をも参らせら／れす参内せられけるきんしんたちをもそねまれけれは／入道のけんいにをそれて参入する人もなしきん中の有さまい／ま〳〵しきほとなりけりしゆしやう夜はなんてんにしゆつき／よなりて月の光に御心をすまさせ給ひひるは夜のおとゝに／いらせおはしますあるよなんてんにしゆつきよなりて月を詠」（１１ウ）させおはしましけるにころは八月十日あまりの事なれはさし／もくまなき空なれと御なみたにくもりつゝ月のかけさへ／かきくらす人やあるとめされけれとも折ふし人も候はさりけ／るにだむしやうのせうひつなかくにそのよしゆつきよの御と／も候にたるかめしにつきて参りたりちかふ参れ仰らるへ／き事ありと仰せある（ギリ）けれは御前ちかふまいりたり思ひかけ／ぬ事にてはあれ共もしこかうのつほねかゆくゑやしりた／るとおほせらるいかてか存つかうまつり候へきと申せはまこ／とやらんさかのおくにかたおり戸とかやしたる内にあり／と申ものか有こそ（ママ）よそこはたしかにしらす共たつねなんや」（１２オ）とおほせけれはやとのあるしかなをたに存候はていかにも尋／あひ参らせかたく候と申けれは主上けにもとて御涙をくま／せ給ふそかたしけなきなかくにつく〳〵とあんするにまことや／こかうのとのゝことをひき給ひしにつねはめされてふえ仕る／事のありし物をこの月のくまなさに君の御事を思ひ参ら／せられんにつけてもこと引給はぬ事はあらしさかのさいけ／いくはくあ

らしうちまはりてたつね奉らんにその人のこ／とのねならはいつくにてもきゝしらむする物をと思ひけれは／さるへしとはそむし候はねともたつねまいらせて見候ははや／もしたつねあひまいらせて候とも御しよなくてはうはのそ」（１２ウ）らにや候はんすらんと申せはやかて御しよをあそはしてたひ／けりれうの御馬にのりてゆけとおほせけれはなかくにめい月／にむちをあけそこはかとなくあくかれ行かのありはらのなに／かしかをしかなくこの山里とゑいしけんさかのあたりのあき／の夜はさこそあはれもふかかりけめかたおり戸したる所／を見つけてはもしこゝにやおはすらんとてひかへ〳〵きゝけ／れともことひくをともせさりけりもし月の光にさそはれ／て御たうへもや参り給ひたるらんとてしやかたうをはしめ／てたう〳〵をまはりてみけれともにたる人なかりけりたいりをは／たのもしけに申ていてぬたつぬる人にはいまたあは」（１３オ）すむなしくかへり参りたらんは中〳〵たゝ参らさらんよる／もあしかるへしこれよりいかなる方へもまよひうせはやとは／おもへとも猶もたつねきはめてこそとおもひけれはもしほ／うりん寺へもやまいり給ひたるらんとて大ゐ川の方へ行ほと／にかめ山のあたりちかく松の一むらあるかたにかすかに／ことそ聞えけりみねのあらしかたきつせか尋る人のことのね／かおほつかなく思ひつゝ駒をはやめてゆく程にふしたる／かたおりとのうちにことをそ引すましたる少もまかふかた／なくこかうのとのゝつま音なりかくはなにそときゝけれは／おつとをおもひてこふるとよむさうふれんをそひかれけるい」（１３ウ）とおしやがくこそおほきにこのかくをひき給ふ事のあはれ／さよこの人いまた君の御事をわすれ参らせられさりけりと／うれしくてよこふえ少ねとり馬よりとひおり門をほと〳〵と／うちたゝけはことははや引やみぬ是はたいりよりなかくに／と申ものか御つかひにまいりて候あけられ候へとたゝけとも／も〳〵（ママ）ことふる（ママ）をともせさりけりやゝはるかに有てうちよ／りて人の出る音のしけれはうれしくおもひてまつ所にしやうを／はつし門をほそめにあけて十二三はかりなる小女はうのかほ／はかりをさし出してたいりよりの御つかひなとたつへき所に／てもさふらはすかたたかへにてそさふらふらんと申けれ」（１４オ）はなかくにか返事をはかとさゝれてはかなふましと思る／やかてをしあけてそ入につまとの前のえんにかしこまり／て申けるはいかにかくてはわたらせ給ひ候やらんきみは／御ことゆへに思召しつませおはしましてくごなともつや／つやきこしめしいれさせおはしまし候はす御いのちもあやう／くこそまし〳〵候へかく申をうはのそらとおほしめし候まし／御しよを給て参りて候とてありつる女はうして参らせたり／けれはこかうのとのこれをひらきて見給へはまことにきみ／の御しよなりけりやかて御返事かき給ふ引むすひつゝ女はう／のしやうそく一かさねそへてをし出されたる中国女房しやう」（１４ウ）そくかたにうちかけて申けるはよの御つかひにてたにも／候はゝ御しよの御返事の上はしさいに及はす候へともこ／れは大りにて御ことあそはされ候し時つねはめされてふ／えつかうまつりし身にて候へはいかてか思召忘

れさせおはし／ますへきちきの御へんし承らさらんかあまりにくちおし／く存候と申たりけれはさもとや思はれけんみつからはしちか／く出てそこにもさためてしられたるらんやうに大しやうの／入道殿のあまりにおそろしき事をのみの給とき、しかあ／さましさに大りをはひそかにまきれ出てか、るすまゐにて／ありつれはことなか（ト）ひく事もなかるつるかあすの程より大」（15オ）原のへんにおもひ立事さふらふ程にあるしの女はうのこよ／ひはかりのなこりをおしみて夜もはるかにふけぬたちきく／人もあらしなとやう〳〵にす、めらる、にさそなむかしの／事もこひしくて手なれしことをひくほとにやすくもき／きいたされけるかなとて涙にむせひ給ひぬなかくにも袖を／そぬらしけるあすのほとより大はらのへんに思召たつ御事と候／は御さまなとかへさせ給ふへにて（キ）候やらんあるへくも候はす／あひかまへてこの女はういたし参らすなとてやとのあるし／にかけてともにめしくしたりけるめふきちしやうなと申／ものをと、めをきわか身はいそき大りへまいりたれはその夜」（15ウ）ははやあか月ちかうなりにけり今ははや御ゑん（し）もなりたる／らんたれしてか申へきとおもひてれうの御馬つなかせ女房／のしやうそくをははね馬のしやうしになけかけてなんてんの／かたへまいりて見けれは十六日の月ははやなんてんの西の／まよりのこりなくさし入たれとも君はいまた夜のおと、へも／いらせたまはすなかくにを御まちかほにてよひの御さにそ／おはしける／

南にかけり北にむかふかんうんを秋のかりにつけか／たし東にいてにしになかるた、せんはうをあかつきの月に／よすとたからかにゑいせさせ給ひける所になかくにつと参」（16オ）りて御返事をは（ソ）参らせけり主上なのめならすよろこは／せ給てさらはおほせあはすへき人もなきにやかてなんちむかへ／に参れとおほせけれはなかくに平家のかへりきかれん事を／もは、かりおもひけれともこれ又ちよくちやうなりけれはう／し車きよけにさたしてさかへゆきむかひこのよし申／けれはしきりに参ましきよしの給ひけるをやう〳〵に申／てむかへ奉りて夜な〳〵めされける程に姫宮と申ははうもんの／にようゐんの御事也大しやうの入道いか、して聞出されたりけん／こかうかうせたりと云事はあとかたなき事なりけり／とてなにとしてかたはかりいたされたりけんこかうのつほねを／と」（16ウ）らへつ、あまになしてをひはなつ出家もとより思まうけし道／なれとも心ならすあまになされて年二十三こきすみそめ／にやつれつ、大原のおくにそすまれける／

太しやう入道殿の御むすめ法皇へまいらせらる、事

入道かやうにふるまひたりし事ともさすかおそろしくもや／おもはれけんあきのいつくしまのないしかはらの御むすめ年／十七になり給ひけるを法皇へ奉らせ給ふ御ともの人さもあま／たえらはれ女はうたちもおほくすくられてそ参られけるひと／へに女御しゆたいのきしきにだがわす（ママ）こゐんかくれさせ給ひ／ていまた二七日たにすきさるにおりふしさうおうせすとそ人」（17オ）／〳〵申ける一ゐんはうちつ、き御なけきあさからす永万元年／七月に第一の御子二

条院ほうきよなりぬ安元二年の七月には／御まこ六条院かくれさせ給ひきれんりのえたひよくのとりと／ほしをさして御契りあさからさりしけんしゆむもん院も秋／の霧におかされ朝の露ときえさせ給ぬ治承四年五月には第／二の御子高倉のみやかたれさせ給ひいまはけんせこしやうた／のみまいらせ給ひしこの君にもをくれ参らせさせ給ぬちかう／仰あはせられし人さむつましくめされしともから共もある／ひはちうせられぬされはなに事にか御心もなくさませ給ふ／へきさるまゝには大乗妙てんの御とくしゆもおこたらす三三（ママ）」（17ウ）つきやうほうの御くむしうもつもらせたまひけり／

きそのよしなかむほんの事

そのころしなのゝくにきそと申所によしなかと申源氏／ありこれはためよしか子たちはきのせんしやうよしかたの二男／なりちゝよしかたは去ぬる久寿二年八月八日むさしの／国大くらにしてをいあく源太し*ヨひらか手にかゝりてうたれ／ぬそのときよしなか二さいになりしを母なく〳〵いたきて／しなのへこえきその中三こんのかみかねとをにむかひて／この子そたてゝ人になしてみ給へとてとらせたりけれはかね／とをかひ〳〵しくうけとりてこの二十四年やういくしたりお」（18オ）ひたつまゝにふようの心たけくしてゆみやの道にすく／れたりをよそはかりことをめくらす事もむかしのたむらとし／ひとにもすくれまさかとすみともにもこえたりけりされは／内〳〵はへいけをほろほして世をとらんなとそ申けるやうふ／のかねとを此由をきゝてそのためにこそ御へんをは今まてそ／たて申たれかくのたまふこそまことに八幡殿の御すゑとお／ほゆれとほめられていとゝ心をこりして兵をもよほしけれは／まつしなのゝ国にはねのゐの大やたしけのゝゆきちか／をさきとして国中のものともみなきそに同心すかうつけの／くににもなはの太郎ひろすみをさきとしてたこのこほりの」（18ウ）ものともこたちはきのせんしやうよしかたかよしみについてみな／したかひつきにけりきそと申はしなのにとッても南のはし／みののくにのさかいなり都も程ちかけれはへいけこのよし／をきゝたまひて色をうしなひてそさはかれける（ママ）は思ふ／に心にくからすわかしやうこくなれはしなの一国こそした／かへともしよのものともたれかはしたかふへきゑちこのくにの／住人しやうの太郎すけなかおなしき四郎すけもちこれら／きやうたいはよ五の将くんのはつようたせいのものなりかれ／らにうッて参らせよと仰くたされたらんに何のしさいか／有へきとよにこともなけにその給ひけるおなしき二月一日しや」（19オ）うの太郎すけなかきそついたうすへしとて越後のくにをそ／給けるおなしき七日しよ大臣已下に仰てそむせうたらにふ／とうみやうわうかきくやうさせ給ひけりこれはひやうらんの／御いのりのためとそ聞えしなにとしたらははか〳〵しからむ／するやうにともすれは人くるしき事のみあるかなとそ／申あはれける同しき九日かはちけんしこんのかみよしも／と入道しそくいしかはの判官代よしかぬむほんをこすとき／こはし（ママ）かは平家これをせめんとてけん大夫の判官すゑさ／たつの判官もりすみをさきとしてつかうそのせい三千よき／にてむけられけ

りよしもと入道はさん〳〵にたゝかひてうちしに」（19ウ）すいし川のはんくわん代はうすておひていけとりにそ／せられけるおなしき十一日よしもと入道かくひ大ちをわた／されけるりやうあんのあひたにそくしゆを渡さなゝ／事は堀河の天皇嘉承二年七月十九日ほうきよ成ぬ同しき／三年正月七日つしまのかみ源のよしちかゝくひわたされたりその／れいとそ聞えけるこのよしもと入道と申は八幡殿の五男むつ／の五郎ひやうゑのせうよしときの子なりけりおなしき十二／日に九こくにうさの大くんしきんみちはや馬をたてゝ申／けるはちんせいのものともきくちはらたうすきおかたまつ／らたう所さにしやうくわくをかまへてたさいふのけちにも」（20オ）したかはすとそ申たる十六日いよの国よりひきやくたうら／いすきよねんの冬のころより四国の河のゝ四らうみちきよ／をはしめとして一かうへいけをそむいて源氏に同心の間ひん／このくにの住人ぬかの入道せいしやくはへいけに心さしふる（ママ）／かりけれはいよのくにへをしわたりたうせんたうこのさかひ／なるたかなをのしやうにをしよせてかはの、四郎みちきよを／うちとり候ぬしそく四郎川の、みちのふは母かたのおちあき／のくにの住人ぬたの四郎かもとへこえてありあはすちゝを／うたせてやすからすやおもひけんいかにもしてせいしやくを／うちとらんとそうかゝひけるぬかの入道せいしやくは四こく」（20ウ）のらうせきをしつめてことし正月十五日ひんこのくにのとも／へをしわたり遊君ゆう女ともめしあつめてあそひたはふれ／酒もりしきる（ママ）所へかはの、四郎みちのふおもひきりたるもの／とも百よ人あひかたらつてはつとをしよすせいしやくかかた／にも三百よ人有けれともにはかの事なれはおもひもまう／けすあはてふためきけるかたてあふものをはいふせきりふせ／まつせいしやくをいけ取ていよのくにへをしわたりちゝかうたれ／たるたかなをのしやうまてさけもつてゆきのこぎりにて／くひをきりたりともきこゆ又はつつけにしたりともきこく（ママ）／けりそののちは四国のものともかはの、四らうにしたかひつ」（21オ）つ又きいのくにもくまの、別当たんそうゆあさの七らう／兵衛むねみつこれも源氏によりきす東国北国すてにおこ／りぬ南海西海かくのことし四海すてにみたれぬ世はたゝ今／にうせなんすこはいかゝはせんとそらくちうさはきける／おなしき廿日六はらにはへいけの人さあつまりてかつせんのひ／やうちやうありまつ右大将むねとり（モ）の申されけるはうつては／どゝくたして候へともはか〳〵しくしいたしたる事も候は／す今度にをひてはむねもりまかりむかふへきよし申さ／れたりけれは上下しきたいしてもともゆゝして候（ママ）なんまこと／にさも候はゝそむくもの一人も候ましと申あはれけれは入道」（21ウ）ふくわんにそなはりきうせんにたつさはらんともから一人も／もるへからすみな右大将を大将として東国へはつかうすへし／とその給ひけるおなしき二十三日門出ありてあかつきたゝ／むとせられける／

太しやうの入道せいきよの事

その夜のやはんはかりに入道やまひつき給ひけれは東国けか／うはえんゐんすおなしき二十七日の朝より入道ちうひやうを／うけ給た

りと聞えけれはたかきもいやしきもあはしつるは／さみつる事よこ*ト
そ申あひける入道やまひつき給ひける日／よりしてゆ水をたにもも
ちひ給はす身の内のあつき事たゝ火」（22オ）をたくにことなら
すふし給へる二三間のあたりはあまりあつく／たへかたけれは参り
ちかつくものもなしたま〳〵参りたる／ものもこらへかねてまかり
いつきん〳〵しゆきよくれうち（ママ）／きんしうきうは六ちく七ちん万ほ
うれいふつれいしやにさ／さけられけれ共じやうごうはちから及は
ぬ事なれはふつりき／ほうりきもかなはすたゝの給事とてはあつや
〳〵とはか／りなりある時は大しかの五かしら六かしらある時は十
四五もふ／したまへる上をあなたへこえこなたへこゆるとぬれはゆ
めさ／むれはうつゝにそ見給ひけるひとへに春日大明神のたけか（ママ）／
けらせ給へるかとおほえておそろしかりし事ともなり同き」（22
ウ）うるう二月二日二位殿已下男女きんたちさしつとひてかな／し
み給へとかいそなき二位とのあつさはたへかたけれとも／入道のま
くらちかふおはして御やまひ日さにしたかひてたのみ／すくなくみ
えさせ給ひさふらふなにことも思召をくこそ／ト／あらは仰られをけと
申されけれは入道よにくるしけにてやゝ／はるかに有ていきのした
にのたまひけるは保元平治より／このかた世を取て二十よねんたの
しみさかへむかしもいまもた／めしすくなし生をうくるものゝしを
のかるゝ事なし入道／一人にかきらねは今さらおとろくへきにあら
すたゝしなに／よりもいつのくにのる人よりともかくひを見さりつ
るこそ心」（23オ）にかゝりておほゆれ入道かなからん後たうと
うをもたてきや／うをもくやうせんこと有へからす入道を入道とお
もひあらんす／る人さはみな一み同心してうつてをくたしてよりと
もかくひ／をきりて入道かつかのまへにかけさせよそれぞなにに
／すくれたるけうやうとおもふべきとの給ひければ人〳〵つ／みふ
かくこそきかれけれ二位とのある夜み給ひけるゆめこそ／おそろし
けれ八ようの車のみやうくわおびたゝしくもえた／るにくろかねの
ふだにむと云字をかきてくるまの物みに／たてたるをうしのおもて
したるものやしやきじん四五百人か程／ひきつれてにし八条のなん
ていへからとやりいれたり二位殿」（23ウ）ゆめ心ちにあれはい
かにとのたまへはこれは入道と／のゝ御むかへにゑんまくうよりく
はしやらいかうとぞ申け／るあのふだはいかにとのたまへはこれは
大からんほろぼさせ／給ひたるそのつみによつて八まんごうまてし
づませ給ふ／へきむけんのむなりけんの字はいまたかゝれぬなりと
申と／おほえてゆめさめて五たいよりあせなかれむねふさかりてし
／はしは物ものたまはすそののちねつひやういよ〳〵きうに／せめ
けれは千しゆ井より水をくたして石のふねにいれ／奉りて四方より
火をかけされとも水ほとなくゆのことくにそなり／にけるいたしき
に水をかけころひふし給へともたすかる心ちな」（24オ）しおな
しき四日もんせちひやくちしてつゐにあつしにゝそせ／られける入
道うせたまへりと聞えしかは京中六はら西／八条にむまくるまのは
せちかふ事なのめならすたとひ一／天の君はんせうのあるしのいか
なる御事わたらせ給ふとも／これにはすきしとそみえしことしは六

十四にそなられける／七八十までもたもつ人もあるそかしかならすこれをらうしと／申へきにはあらねともしゆくうんつきて天はつをかうふりた／まへはいのかいのりもかなはす御身にかはり御命にかはら／んと思ふものいく千万か有らめともめいとのつかひをはふせ／かす枕をかさねしさいしよもくわうせんのたひにはとも」（24ウ）なはす又もかへらぬしての山たゝひとりこそおはすらめたゝ／日比つくりをき給ひしさいこうはかりやともなふらんあはれ／なりし事共なりおなしき七日東山をたき寺の辺へをくり奉／りてけふりとなし奉るこつをはおちのえんしつほうけんくひ／にかけふくはらへおりておさめ奉る入道あなかちにしつし／おもはれし所なれはとてかやうにしてんけり日ほん国にな／をあけゐをふるひし人なれともその身はたゝ一時のけふりと／なりて都のそらに立のほりかはねはてんしやのいさこにま／しはりてつゐにはつちとなりにけるかゝるさうそうの折／ふしふしきの事ありけりにし八てうに火出きてやけにけり」（25オ）人の家のやくる事はつねのならひといひなからおりふしこ／そあれ是もたゝことならすとそ申けるあやしのものゝなき／あとにあさ夕はかねうちならしつとめをこなふ事にて／こそあるにさこそゆいこんならむからにあけくれはたゝかつ／せんのいとなみのほかは他事なしとそ聞えける入道相国の／さいこのありさまこそあまりにおそろしけれとも大かたは／しんきをうやまひ仏法をあかめ給ふ事も世にはすくれ給へ／りき何よりもつのくにふくはらに経のしまをつかせて上下／わうらいの船末代の今にいたるまてさういなきこそめて／たけれ石のおもてに一さいきやうを一日にしよしやしくや」（25ウ）うしてつきこめられたりけるゆへにこそきやうのしまとは名／つけけれ入道相国はたゝ人にはあらすと申事ありそのゆへは／つのくににせいてう寺と云山てらにぢしんばうそむゐと／てならびなきちぎやうじや一人ありこれかあるよのゆめにみ／やうくわんきたりてつけ給はく来十一月廿一日にゐんまわう／くうにて二万のくにより二まん人のそうをあつめて法花／きやうてんとくの事ありそむゐも其人数にいりたり其／ときにのそみてかならす参るへしと云つけをかうふりて大／きにきとくのおもひをなしその寺の別当しゆきやうに此よし／をかたりけれはをの〳〵ふしきの事也と申ける程にその」（26オ）日その時にいたりてすいめんの心ちいてきけれはぢぶつだ／にとぢこもり念仏して候けるに一人のみやうくはんきたりて／すなはちえんまくうへくそくしてゆく大こく殿のやうなる／所に二万の僧りよなみゐて法花経てんとく心とことは／もおよはれすほうゐはてにしかは二万人のそうりよみない／とま申てまかりいつその中にそむゐはいまた出さりける／にえんま大わうなどなんちはまかり出ぬそと仰けれはそむ／ゐ申けるはそも〳〵法花は三世しよふつしゆつせのほんくわ／い一さいしゆしやう成仏のちきたうなり一け一くのとくは五／はらみつのせんこんにもこえたり五十てん〳〵のすいき」（26ウ）は八十か年のふせにもこえたりとみえたり法花てんとく今／にをこたらすされともわかしやうしよをいまたしらすなに／としてか往生をはとけ候へき

と申けれはえんま大わうの給／けるはわう生ふわう生は人のしんふしんによる也悪をしゆす／るものはあく道にだしぜんをしゆするものはせんしよにむま／るこ*スしもあやまる事なしなんぢが生所ははりのかゝみに／みるへし行て見よとてみやうくわんをそへてつかはさるは／りのかゝみに行むかひみるにしやうねんのむかしよりおもひ／とおもひせし事の一としてあらはれすといふ事なしさ／れともつゐにはとそつのないゐんにむまるへしと見えたりそ」（２７オ）むゑかつかうの心きもにめいしすいきの涙せきあへすそむ／ゑえんま大わうの御まへに参りいとま申けれは大わうの／給ひけるはなんちか国に入道大臣しやうかいと云人あり定／めてなむぢしりたるらんその人はじゑ僧正のさいたむなり／末代のしゆじやうにゐんくわのことはりをしめさんかためにか／りにしやうぐむの身とはあらはれたりされはその人を日ゝ／に三度らいするなりそのことはにいはく／

きやうらいしゑ大そうしやう　天たいふつほうおうこしや／
しけんさいせう将くんしん　あくこうしゆ生とうりやく

と／いふこのもんをとなへてらいするなりとての給ひけるそむ」（２７ウ）ゑほんふくしかやうの事ともをせいてう寺のえむぎにし／るしていまにありとそ承るかのゆの山はゑんまくうの東／門にあたれるとそ人申ける入道相国は白河院の御子なり／とそうけ給はる／

きをん女御の事

さんぬる永久の比ほひ白河のほとりにきをんによことてさい／わい人おはしましける一院しのひてつねに御幸なりあるとき／きんしゆのくきやう一りやう人天上人三四人か程めしくして／かしこへ御かう成けるにこの女房の住給ひけるあたりち／かきはやしの中をすきさせ給ひける程にころは五月廿日あ」（２８オ）まりの事なれはめさすともしらぬやみに五月雨さへにかき／くらして物すさましかりけるにふるたうのうちよりひかり／ものこそ出きたれかのひかりものゝていたらくかしらはしろかね／のはりをみかきたてまつるかことくなりかた手にはつちの／やうなるものをもてかたてには光るものをもてとはかりあ／りてはさとひかり〳〵次第にちかつき奉るあなおそろしや／なにものにてか有らんつちのやうなる物はおにかもつうちて／のこつちなんめりちかつき参らせたらはいかなる事かあらん／すらんとおそれさせおはしましけるにきやうふきやうたゝ／もりのいまたひせんのかみにてくふせられたりしかおもはれ」（２８ウ）けるはこのたうのうちにあらん程のものまことのきしんにて／はよもあらしおもふにきつねのしわさにてそあるらんくん／ていけとてけさむに入と思はれけれはたうのうちへはしり入／うしろへまはりひかるものをむすとたくこはいかにといふこ／ゑをきけは人のこゑなりそのの ちてゝに火をともして見／給ひけれは六十はかりなる法しなりその御たうのせうし法師／にてそ候ける仏に御あかしを参せんとて手かめにあふらを／いれてもちたりけるかつちのやうにはみえたるなりかたてに／はかはらけに火を入てもちたりけるそひ

かりものとはみえ／たりける雨しけかりけれはぬらさしとてこむきのわらをあみ」（２９オ）あつめてかつきたりけるかしろかねのはりをたてたるやうに／はみえたりけりその人さとゝわらひてのき給ぬ一院これを御／らんしてあはれふしの心程たけくやさしきものあらしまこと／のきしんとこそ思召御（さ）れつるにくまんとおもひかゝりけるた／たもり今夜のふるまひ返す〳〵しんへうなりこれをはもしき／りもとゝめたらはいかはかりかむねんならましとてやかてそ／のけんしやうにはかのきをん女こをそ給りけるこの女御くわ／いにんし給へりうめらん所の子女子ならはわれにえさ／せよなんしならはたゝもりか子にしてゆみやの道をつかせ／よとてたひたりけるかなんしにてそおはしましけるやかて此」（２９ウ）よしをも申はやとはおもはれけれ共ひんきなくしてそうせら／れさりけるにこの君二さいと申し秋のころ一院御くまのまう／ての御幸ありくはんきよの時きいの国いとか山と申所／に御こしかきすへて御きうそくありけるに折ふし申はやと／おもはれけれはかたはらのやふにいくらもありけるぬかこと／云ものを袖にもり入てかしこまて／

いもか子ははふほとにこそなりにけれ

と申されたりけれは／一院はや御心へありて／

たゝもりとりてやしなひにせよ

とそ仰けるされとも／こと（ママ）のわうしにておはしましけれは内さもてなしたりけり十二」（３０オ）にてしよしやくし給て十八にて四ほんして四位の兵衛のすけと／いはれ給ひしかは時の人さいつしかなりと申あはれけるに／鳥羽院の仰のありけるはきよもりかくはしよくは人／にはをとるましき物をとそおほせられけるされはまこと／のわうしにておはしましけれは太政大臣まてもたやすくへ上／り人はとかく申しかとも一こは思ふ事なくてすくされけるこ／そめてたけれむかしもてんち天皇はらみ給へるによこを大／しよくわんに給とてうめらん所の子女ならはちんか子たるへしなん／しならはしんか子にせよとてたひたりけるか是も男子にてそおはし／ましけるたうのみねのほんくわんちやうゑくはしやうこれなり」（３０ウ）

五条大納言くにつなきやうたかひの事

おなしき廿日五てう大なこんくにつなのきやうもうせられけり／さしも入道殿の心さしふかふおはせしかせめての事にや／入道とのゝやまひつき給ひし同日やまひつきおなし月／にうせられけるこそふしきなれそも〳〵入道このくにつなの／きやうにかたらひ給ひける事はかのきやうならひなき大ふ／くちやうしやにておはしけれ何にても日に一しゆは入道相／国のもとへをくられけり入道いや〳〵けんせのとくはこれにす／きしとよろこひ給ひてくにつなのきやうのしそくけんは／のかみきよくにを入道のやうしにし四なんしけひらのきやう」（３１オ）をくにつなのむこにそなされけるされは大なこんまてもたや／すくなられけるとそ承るくにつなのきやうの母うへせんねんか／もへまうてゝねかはくはわか子のくにつな一日なりとも蔵／人のとうになして見せ給へといのりけるに有ときのゆめ／にかものかたより宮人ともかひりやうの車をひきてくに／つなの宿

所へやりいるゝとみて人にかたりたまへは扨はいかさまに／もくきやうのきたのかたになりたまはんするにこそと申／けれはゝうへわか身年おひたりいかてさやうのことあるへ／きとの給ひけるにくらんとのとうは事よろし正二位大な／こん迄ならはれ(ママ)けるこそふしきなれそも〳〵このくにつなと」（31ウ）申は中なこんかねすけのきやう八代のすえさきのむまのかみ／もりくにの朝臣の子なりけり近衛院御さいゐのころしんし／のさうしきにて候はれけるか仁平の比四てうたいりえん／しやうありけるに主上なんてんに出御なりたれともみな人あ／きれてきやうかうのさたまても及はさりけるにくにつな／ようよをかゝせて参りたりけれはしゆしやういかなるものそと／御尋ありしんしのさうしき藤原のくにつなと申しゅ上よ／うよにめし五てうたいりへいらせ給ふ主上なのめならす御か／む有てほうしやう寺殿へかゝるさか〳〵しきものこそ候へ／めしつかはれ候へとてつかはされけれはほうしやう寺との御」（32オ）りやうたひなとしてめしつかはれけりあるときおなし御宇や／はたへ行幸なりてりんしの御かくらのありけるにんちや／うか川へおち入てしやうそくぬれてその日の御かくらの／ひらん(ママ)にてありけれはくにつなしつへいの御ともに候ける／にしんへうにこそ候はねともにむちやうかしやうそくはよう／い仕り候とてとり出してきせかへ其日の御かくらをとけさせ／給ひけり程こそすこしをしうつりたりけれともうたのこゑ／まひのすかたつねよりもことにすくれたり物のおもしろきは／しんめいも人の心も同事也とかやむかしてんせう太神あま／の岩戸をひらかせ給ひしも今こそおもひしられけれくはんへ」（32ウ）い法皇さかの大井川にみゆき成て御ゆうの候ひけるにく／はんしゅ寺の内大臣たかふちこうの御子いつみの大しやうて／いこくをくら山のあらしはけしくふきてゑほしを川へふき／いれられかりきぬの袖にてたふさをゝさへせんかたなけに／ておはしけるに山かけのちうなこんのしそくしよむそうつ三／ゑはこよりゑほうしを取いたして大しやうにきせ奉るよ有(ママ)／てこそかゝるふしきもありしにくにつな時にとてのよう／いありかたしとそ人申けるさんぬる治承四年の五せちはふく／はらにてそありけるしかるへきくきやう殿上人中宮の／御かたへすいさんしていまやうらうゑひなとしてあそはれ」（33オ）けるにある殿上人／

たけしやうほにまたらなり　くもこしつのあとにこる／

と云らうゑいをせられたりけれはくにつなあさましやかやう／の事はきんのきのくとこそ承はれきくともきかしぬ／きあしをしてにけられけるこのしの心はむかしけうのみかと御／むすめ二人までもち給へりあねをはかくわういもうとをは／ちよゑいとてともにしゅんのみかとのときなりくしゅんかくれ／させ給ひしかはさうこの野辺にをくり奉るきさきみかとの／わかれをかなしみ給ひてさうこのゝへに尋きてなき給ひし／なみたしやうほのきしの竹にかゝりてまたらなりそれよりして」（33ウ）しやうほの竹はおひいつる事またらなりこゝにてしつをし／らめ給ひしにそのあとはいまも猶くもたなひきて物あはれ／なる心ありくにつなさせるふんしやうにたつせ

る人にては／おはせさりけれともさか〳〵しきによてかやうの事を
も／き丶とかめられけるとかや／

法皇法住寺とのへしゆきよの事

おなしき廿二日ほうわう八条からすまろのひふくもむゐんの／御し
よよりほうちう寺とのへこかうなる此御所はさぬる応／保元年八月
十三日につくりいたされていまひえいまくまの／ほとちかくくわん
しやうし奉りてせんすいこたちにいたる」（34オ）まて思召すさ
まなりしかこの二三か年かあひたせいなんの／りきうにをしこめら
れさせあるひはふくはらへ御幸なりな／として御しよもみなあれた
りけれは御（さ）きの右大将むねもり／しゆりして入参らすへきよし申さ
せ給ひけれ共法皇なにの／やうもあるましとていそきくわんきよな
らせ給ふまつこ女院／のわたらせ給し御かたをゑいらんあるにきし
の松みきはのさ／くら年へにけりとおほえてこたかくなりたる有さ
まを御らん／せらる丶につけても御涙そす丶みける大ゑきのふよう
ひやう／の柳是にむかひてはいかてかなみたくましからさらんかの
／なんたいせいきうのむかしのあとに花の色鳥のこゑのみは今」
（34ウ）もかはらぬにつけてもつきせぬものは御なみたはかりな
り／おなしき三月一日南都へ大しゆほんにふくししやうえんまつ／
しもとのことくちきやうすへきよし仰くたさるおなしき／三日東大
寺つくりはしめらるふきやうのへんは蔵人の左少／へんゆきたかと
そ聞えけるゆきたかせんねんやはたへ参て／つやせられたりけるに
御ほうてんのうちよりひんつらゆ|きた（イ）／るとうし一人いてさせ給て
やあなんち東大寺ふきやうの時／はこれをもちてむかふへしとてこ
かねのしやくを給と云ゆめ／をみてうちおところきてみれはすなは
ちまくらにそありける／ゆきたかは何事によりてもとう大しふきや
うにはむかふへき」（35オ）やらむとおもはれけれとも大ほさつ
の御つけのうへはしさい／あるらんとおもひてふかくおさめてとし
月ををくらる丶程に／はるかに程へてことし七人のへんの中にえら
はれてとう／大しふきやうにむかはれけるこそふしきなれひとへに
八幡／大ほさつの神りきにあひかなひ給ひけるしゆくしうの／ほと
こそありかたけれ／

とうこくいくさの事

おなしき五日とう国よりはやむまうちて平家へ申けるは／十郎蔵人
ゆきいへおいにきやうのきみきゑんあくせんし／えんさい大せいに
ておはりのくにまてせめ上りたるよし」（35ウ）みの丶くにのも
くたいかもとより申たりけれはへいけこれを／せめんとて大しやう
くむにはさ兵衛のかみとももり中宮／のすけみちもりさつまのかみ
た丶のりさふらひ大しやうに／は越中のせんしもりとし二郎ひやう
衛もりつくをさ／きとしてつかうそのせい二万よき同き十日都をた
ちて同／十五日にはみの丶くにまてはせくたりすのまたのにしのか
／はらにちんをとる十郎くらむとこのよしをき丶そのせい／七百よ
きにてすのまたのひんかし河原へをしよせたり／けんへい川をへた
て丶さ丶へたりおなしき十六日の卯のこくに／やあはせときため（サ）た
りけるそのやはんはかりにきやうの君」（36オ）きゑんいかゝお

もひけん十郎くらむとにもこのよしかくと／もいはすしう〳〵八きすのまた川をうちわたりてへいけ／のちんへそ入たりけるゑつちうの二郎兵衛もりつく五十／きはかりにて夜まはりしけるに行あひたりもりつく／是はたそみかたとこたふみかたにはたそまことはかたきそかし／清和天皇に十代六てうの判官ためよしかまこさま守よし／朝かはつしきやうのきみきゑん日ころのくはいけいのはち／をきよめむためにこれまてきたりけるなりとてさん〳〵に／たゝかひけり十郎くらんとこのよしをきゝきやうのきみ／うたすなあくせんしうたすなとてすのまた川をうちわ」（３６ウ）たり平家のちむにかけいりさん〳〵にたゝかひけりきやうの／きみうたれにけりへいけの大しやうけちせられけるはか／たきかはをわたしたれはぬれむしやはかたきそあますな／もらすなうつとれとて馬物のくのぬれたるを中にとりこめて／たゝかひけれはけんしのつはものとものこりすくなくうたれに／けり十郎くらんとかなはしとやおもひけんすのまた河をわ／たしかへしてひきしりそく平家つゝひてわたしかしこに／かけつめこゝにをひつめうちけるにおもてをむかふるもの／そなきすいえきをうしろにあてされとこそ申に今度／けんしのはかりことをろそかなりとそ申ける十らう蔵人うち」（３７オ）まけて三かはのくにゝうちこえやはきかはのはしをひいてし／やうくはくをかまへてこもるへいけつゝきてせめけれは十郎／くらんとこゝにてもかなはすしてとをたうみの国にうちこ／えててんりう川のはしをひきてむかひのきしにちんをとる／へいけつゝいてせめられけるか大しやうくむさひやう衛の／かみ（ママ）ももりしよらうとてたかせ山のふもとよりひつかへさ／れけれはつはものすゝむにをよはす今度はわつかに一ちん／はかりやふれつれともさむたうをやふらねはしいたしたるこ／となきかことしへいけは去ゝ年小松殿こうし給ひぬことし／入道相国うせ給へは年来おむこのともからのほかは参りし」（３７ウ）たかふものもなしおなしき六月十五日ゑちこのくにの住人しや／うの太郎すけなかゑちこのかみにんせしてうをんのかた／しけなさにきそついたうすへしとてゑちこのてはあいつ／四郡をもよほしてけれは都合そのせい六万よきにてうつた／たむとす其夜の夜半はかりに雨しやちくのことくふりくた／るいかつちおひたゝしくなりさかりかせ木をおりてふきける／か雨風やみてそらしはらくうすくもりけるに大なる声／のひゝき有にてこくうにつけてとをりけるなにものにても／あれ大からんほろほしたる平家のかた人せんするものをは／めしとるへしとそ申けるしやうの太郎身のけよたちて」（３８オ）おもひけれ共ゆみや取ものそれにはよるましとておなしき十／六日の卯のこくに六万よきをひきくしてたちを出十四五ち／やうそ行たりけるくろくも一むらしやうの太郎かうへにひき／おほひけるかやかて目くれ心きえて馬の上にてもかなふ／ましけれはあふたにかゝれたち帰て三ときはかり有てはや馬／をたてこのよしを申けれはへいけの人ゝ大にさはきあはれけり／同き十四日にかいけんあて養和元年とかうす／

こうふく寺むねあけの事

同き十八日こうふく寺の上とうあり筑後守さたよしちんせい／のむほんたいらけんとてその日やかて門出してうつ立けり」（３８ウ）おなしき八月十七日まさかとついたうのれいとてくわんのちや／うにして大にむわうゑをこなはれけりおなしき九月九日／すみともついたうのれいとてくろかねのかつちうを太神宮へ／まいらせ給ひけりちよくしはさいしゆんきのこんのせう大な／かとみのさたゝかとそ聞えけるさたたかよろひかふとを／給て大神宮へまうてけるかあふみのくにかうかの馬屋にてやまひ／つき伊勢のりきうにてしにけり又日吉のやしろにして／三七日の五たんの法をこなはれけるに初七日の第三日に／あたりける夜かう三せのたんの大あしやりかくさむ法印／大きやうしのひかん所にてねしにゝこそしたりけれ神明三」（３９オ）ほうも御なうしゆなしといふ事いちしるしまた大けんの／ほうをこなひけるあむしやう寺のしちけんあしやり御くは／んしゆをしんしたりけるかけんしてうふくとはかくてへい／けてうふくとかきたりけるそきたいのあやまりなるいか／にと御たつねありけれはてうてきてうふくてんかあんおむ／の御きたうをつかまつるにたうしのていをみるにもはらへ／いけてうてきとみえ給ふとてかれをてうふくするなにの／あやまり候へきと申けれはこのほうししさいかるさいかとさ／たありしかとも大小事のそうけきにうちまきれてや／みにけりそののちけんしの世となりてひやう衛のすけた」（３９ウ）つねいたしたまひてこんりつしにきよし申しやかてほう／いんにそなされけるおなしき十二月二十五日中宮ゐんかう／かうふらせ給ひてけんれいもんゐんとそ申けることし二十／五にならせ給ふしゆしやういうしゆの御ときのほこうの院／かうこれはしめとそうけたまはるさるほとにとしくれて／養和も二年になりにけり／

きやくしやうしゆつけんの事

正月廿三日たいはくはうせいをゝかすてむもむはかせかんかへ／申けるはたいはくはうせいをゝかす時はしやうくんのさか／ひをいつと云りおなしき四月十四日にさきのこんせうそうつ」（４０オ）けんしんひよしのやしろにしてきせん上下をすゝめてによほう／に一万ふの法花経てんとくの事あり一院このよしきこし／めして御けちえむのためにひよしのやしろへ御幸なるなにも／のか申いたしたりけんほうわう山の大しゆに仰てへいけ／ついたうせらるへしと聞えけれはへいけの人さみな六はらに／あつまる山門にはへいけ山をせむへしときこえしかは／三千の大しゆひかしさかもとにおりくたりこはいかゝせんと／そさはきけるかゝりけれは御けちえんもはやうちさまし／ぬほうわうみやこへくはんきよなるまことに山門も平家をついた／うすへしといふ事もなしともにあとかたなき事共なり」（４０ウ）をよそてんまあれたりとそみえしおなしき五月三日伊勢いは／しみつをはしめ奉りて二十二しやにくわんへいありこれはこん／とのひやうらんの御いのりのためとそおほえたるおなしき／十七日にかいけん有て寿永元年とそ申／

よこたかはらかつせんの事

さるほとにゑちこの国の住人しやうの四郎すけもちかあに／すけなかかせいきよのあひたふ吉なりとてなかもちとかい／みやうすあにかしゆくいをたつせんかために木曾ついたうす／へしとて今度はゑちこのくにをもよほしたれは都合其／勢二万よきとそ聞えける同き九月十一日にしなのにうちこえ」（41オ）よこた川原にちんをとるきそ此よしをきゝ三千よきの勢／にてよこた川原にはせむかふきそかたき大勢と見てけれは／からめてをまはされけり今井ひくちに五百よきをさし／そへてむけられけるそのほか井上の九郎たかはしの判官代い下二／百よき三百よきさしそへ〳〵かしここゝへむけられけりなか／もちか一ちむにさしむけたりけるあいつのせうたんはううた／れにけりそののち二百よき三百よきによこたかはにうち入〳〵／はせわたししやうの四郎かせいを中にとりこめてさん〳〵／にたゝかひけれはしやうの四郎か勢むらくもたちてそひ／かへたるきそかつにのつてせめけれは二万よきとはみえし」（41ウ）かとおちぬうたれぬせし程にちり〳〵にこそなりにけれしや／うの四郎たゝ一きにておち行けるかかたきはをひかけた／りかなはしとやおもひけんよこた川にとひいりてそこにて／物くぬきすて水のそこをくゝりゑちこのさかいへおち行けり／なかもちはや馬立てこのよしを申けれは平家今度は／右大将むねもり正二位し給ひけり同き七日内大臣に成給ふ／同き十三日にはいかのきありたうけたけの公卿十三人こせう／らる蔵人のとうい下の殿上人十六人せんくし給ふ我も〳〵と／出立れけるけしき今いく程とそ覚えたる東国北国はち／の如くをこりあひてすてに都へせめ上るへしと聞えしか共都」（42オ）には風の吹やらむなみの立やらんもしらすしてあそひたはふれ／てそおはしけるたゝうんのきはめとそ覚えたる国のついへ民の／わつらひのみ有て其年も暮ぬれは寿永も二年になりに／けり／」（42ウ）

（以下、六行分空白）

（次号に続く）

（ぱくちえ　本学日本学研究所研究員）
（すずきあきら　本学教授）